毛詩集

全

910.1
力

序

おのれ始めて東京の能を見たりしは。明治七年。飯倉なる金剛の舞臺にてなりき。其頃棧敷に居る人々を見渡せば。十の九までは。前代遺物の白髪翁ならぬは無く。十七八歳の書生として其中に交りゐたるは。何となく耻かしき心地したりき。いかでか能は美術なり。謠は美文なり。などいふ考いだきたる人々のあるべき。

芝能樂堂の立ちたるは。明治十四年なりしと覺ゆ。おのれも一日見にゆきたるに受付より蒟蒻版にて摺りたる物を渡しくれたり。見れば其日の番組を說明して。紅葉狩は維茂將軍の戸隱山にて鬼神を退治する事を作れる能なり。などやうにしるしたるものなりき。謠本よまば誰にても分るものを。あらずもがなとは思ひたれども。當時の見物は多く此說明を要する人なりしならんと思へば。今日の進歩に驚かずんばあらず。今は然らず。能見にゆけば。老いたるは少なくして。若きが多きを知るべ

く。人ごとに謠本を携へつゝ。其意味を解せぬは。幾百の見物中。ほとんど二三人も無き程になりたり。我友の新聞記者は曰く。能樂堂にて年々增加するを感ずるは。若き婦人の見物なり。是も能樂趣味の普及を證するに足るべしと。或は然らん。

江島書店の花傳書を出版せしに。豫約者の非常に多かりしも。かゝる斯道隆盛の結果に外ならじ。酒にも肉にも飽きたる人は。更に一椀の挽茶を思ふ。又人情ぞかし。再板の成るに及び序をと乞はれて。感じたるまゝを一言す。

明治三十三年の仲秋

大和田建樹

花傳書目次

一　能樂起原
二　調子
三　謠
四　鼓
五　能
六　能
七　囃
八　稽古

夫申樂延年のことわさ其源を尋るにこの國にはしまるところは地神五代あまてる御神の御時に天の岩戸の神遊し給ひし時八百万の神たちたかまか原にあつまりたまひ此曲をつくり御はしめあつて岩戸のまへにて神樂といふ事をそうし給ふその樂成就して天照皇太神宮岩戸を出給ひ日本あきらかになるより此かた今に此曲繁昌也されは目出度曲なれはとて其風をつたへまなふといへ共代へたゝりぬれは其風をまなふ事及ひかたしかくら管絃は役者あまたなれは萬人もてあそふ事なりかたし近代あまたの役者を略きしなり物のしやうかを加へ能といふ事を作り初むるなり其水上を尋ぬるに御門より秦川勝に仰て天下安全のため又は万人快樂の爲にれもしろき曲を作り候へとありしかは川勝承て其とき三十三番の能を作りはしむる也然共今のやうなる能の心もなく和歌をあげ唯打はやして一曲一かなて一座の遊ひまてにてありつるを中頃天下に竹田はつとりとて兩人曲の名人

ありつるか此曲を再興し其時は兩人六十六番の能を作り色々の曲を
そへたる也今にかすの能と申は是也竹田は今春太夫なりはつとりは
當家の源なりされは神代のまなびはやしはかつら男のよそほひをに
せうたひは神歌を表せり然に神事に能をすると云ふも此儀也何たる
まつり祈禱よりも神もうけ給ふとは右の子細なり此藝をたしなまん
人は佛神の御めくみにかなふ事うたかひなし能なくはなにとして心
なきしつのをしつのめまても此國のはしまるよりこのかたの事をし
らんや一日の能に佛法世法神代のはしまり人間のはしまりめいとの
有樣まてを〳〵くあらはしみ〳〵ちかく言葉をやはらけ仕舞にあらは
す是をみていかなるこゝろなきいやしき民まても能を見たらん人は
有爲無常因果むくいの有樣義理順義たもひよこしまなる事をさりな
にとて善にかたむかさらんや然る時は此藝に心をかくる人は現世は
後生にかなひ後生は佛果にいたる事うたかひなし然は歌道にもむか

し今の事世間のありさま神祇釋教戀無常色々さま〳〵をつくしむか
しより讀をく歌のしな〳〵を御門より紀貫之に仰せて撰せられ古今
集をつくらせ給ふ則古今とはいにしへ今とかいたりこれも神代より
このかたの有樣色々の世間の道理をあらはし人間にしらせん爲也然
れとも此道も万民のみ〳〵に入事なりかたしたゝうたひにこしたる事
はなし先おもしろき曲なれは高きもいやしきも是をもちひ給ふによ
りさなから道にいる事はやし佛法にも念のつき所は佛なり能にても
あれはやしにてもあれ此藝あらんときはする人も見る人も他念はな
しつみをつくらんとも人のにくき事も思ひ出さすたしやう一へんな
るところはさなから佛なり如此威德おほき曲なれは此道をたしなま
ん人はいかにもかりそめに心得す一大事として稽古すへし
一　樂屋入をゝて物の色めも見へさるところは人間の胎内にやとる
かたちなり

一　まくをうちあけいつる風情是人間の生るゝかたちなり

一　翁といつは釋尊出世の佛法をひろめたまふ心也翁のうたひ多羅尼と神道をもつて是をつくる太夫笛大小太鼓をは五躰五輪に表し地水火風空をかたどる太夫をは空の字にたとへ笛をは風の字にかたどる小つゝみを火の字にたとへ大鼓を水の字にたとへたいこを地の字にたとへ太夫を空にたとふる事空は天地陰陽五躰五輪佛法のみなかみ也この理り釋尊ものへかたきと說給ふ御詠歌に

空の字はちゝみかしらにたとへたり
　とくもとかれすいふもいはれす

能くみの事一日に六番なり子細は抑此國を六十六にわる事役行者行基菩薩國々の水をのみわけ給ひ候へは六十六色これありかるかゆへに人の心も國々にかはり聲言葉なまり以下まて別にわかつ事右の水のかはりめの子細也この國も六十六能のはしまる所も六十六番なれは其數を表して一日に六番にさたむる也

一　一番に祝言をする事神能にさたまりたり祝言にてあらはなに能にてもあれ是あるへき儀なれ共神能にさため候事は子細あり日本は神國なり神代よりつたはる國なれは今仁王の御代に至るまて我朝の守護神たりかるかゆへに其日祈禱として神をくわんしやうするといふ心によつて一番に神能なり

一　二番に脩羅をする事抑此國は弓矢をもつてあくまをたいらけおさまるくになれはとてあくまかうふくのために脩羅を用ふる也

一　三番にかつらをする事みな人をにかつらにてさへあれは何なりともと心得候事是れほきなるひか事なりかつらはゆうけんのかつら本也其ゆへは一番に神代のはしめをうけ二番にあくまかうふくの脩羅を引三番にはか樣に國れさまり天下泰平の御時はとゝくゆうけんなりかるかゆへに三番に幽玄をさたむ幽玄いろ〳〵あり男の幽玄

もありさま〳〵の幽玄ありさいへ共女能にさたむること二番の脩羅男能なれは陰陽和合と取りあはせ三番にかつらなりそのうへ世おさまり泰平の御代にはいろにそみかにめてゆうけんつもりてれんほのみちになるゆへなりかるかゆへに世間の有樣をまなひたるものなれはれんほゆうけんのかつらをするなり

一　四番に鬼能を定むる事これも鬼なれはとてたゝの鬼能にあらすめいとの鬼を本とす其子細は此まへの能ゆうけんのかつらなり脇能に神祇をまなひ二番に悪魔がうふくの脩羅かくのことく代を治めて榮花つもつてゆうけんになるときは又めいとのところへゆくなりかくのことくたのしみをきはめ榮花さかんにてもあれ人間の一期は一すいのゆめ電光朝露いしの火まほろしのあひたの世なれはたのしみもたのまれす只菩提心の心をれこし後世をねかはん事本意なり然によつてけふはあれともあすを期せさる浮世なれは因果むくひのめい

このすかたをあらはしたのしみ榮花も菩提のたよりにはならさるとのこゝろをしらさんとの儀によつて四番にめいとの鬼をするなりまたはやうやくなかはもすきぬれは四はんめの時分は諸人もねふる頃なれは一つは万人のねふりをもさまし氣をもつけん爲に一座のうちにかた〳〵もつて鬼をもちゆる也これ能組の秘事也かくのとくおもしろきあそひのうちにものちの世の躰を此世にてつくりしつみとかにひかれてそれ〳〵の罪にくるしみをうくる躰をみて後世をたもひ出し候へは我人の發心をおこし候へは佛法の能にあり說法の場にまいるも同前なりさるによつてうたひを無盡經といふも此儀なり

一　五番に義理をさたむる事世間は仁義禮智信の五常をそむかすしてきりを本とする事本意なり右一番に神能とさため二番に脩羅をさため三番にかつらをさため四番に鬼を定むめいとの有樣をあらはす事義理をあらはす五常にはつれたるものはかくのとくなりゆくとの

とはりもきりをれもはんかためも志かるによつて五番に義理をさたむる也

一　六番に祝言をまたする事これは一座のわさめなれは君をいはゐ身をいはゐ所をいはゐ花ははるすきつれともまたたちかへり春きぬれはすきにし春のとくにはなさきさかふるとそれを表しさきかへりぬる春に又あふとたのしみをいはゐかさねておさめ六番にはしめ有つる祝言をまたする也

右如此一日の能にありとあらゆる世間の有樣をこと〳〵くあらはし万民にこれを見する能なれはなにとして智恵なきもの〻かやうの事をしらんや能組の條々如此さりなからこれは初日の能組なり二日目よりまたかへ候てもくるしからすかくかくらなとを入番かすあるへしまへ日の能に似たる能をせぬなり

一　翁たちの條々是にあらはすこれ申樂の奥々秘事なりひみつをこれにきはまりたる儀也これはおそろしき子細ともおほし神道より出たる儀なれはこれをとりさたする時は七日のしやうしんなくはかりそめにも申もいたさすしろとなとにはつたふへからす

一　樂拍子の舞は緊那羅王糸竹之調迦葉尊者の舞給ひし也佛の大樹緊那羅をときましませし時の事なり大衆舞といふなり

一　男舞は世親菩薩のつくりたまへる倶舍論の倶舍の舞の手なり

一　髮は上界の月宮月のみや人まひたまへるは霓裳羽衣の曲なり唐土にては玄宗皇帝毎夜月宮に昇り習て下て楊貴妃にをしへ給ひし手なり

一　鬼かたの舞は流砂住除砂大王と伯太王舞の手なり

一　神能の手は天照太神のあまの岩戸のうちに籠居し給ひ引出し上爲八百万諸神等舞給ひし曲舞なり催馬樂や加持なんとなり

一　式三番の大事を信に認給ふ秘曲也

一　翁の太夫は天照太神宮也
一　千歳經歴は春日大明神也
一　三番申稚久はすみよし大明神也
右此三番法花經の序分正宗分流道分の三段也
一　鼓々吒囉哩々々々囉
吒囉哩囉稚唎囉々唎皷々
一　底哩耶吒囉哩吒囉哩囉
吒嘿哩囉稚哩囉々哩皷々
所千代まて御座我等千秋候
鶴と亀との齡にて幸祐意に住たり
とふ〳〵たらり〻〻らかりら〻りとふ
ちりやたらり〻〻らりらかりら〻りとふ
總角耶頓々耶比盧婆賀唎耶頓々耶

座して居たれと參蓮花利耶頓々耶
千磐破神の彦佐の久しかれとそ祝
驚破す理智耶以上
凡諸千年の鵠は萬歳樂とうたふたり
又万代の池の龜は甲に三玉を備たり
渚の沙颯々と敷て朝の日の色朧々し
瀧の水冷〻と落夜の月鮮に浮たり
天下泰平國土安穩の今日の御祈禱なり
ありはらや耶何所の翁共
あれは何處の翁共そや何の翁共そよや
千秋万歳の祝の舞なれは一舞まはふ万歳樂々々々御兒耶
御願は何處小官者殿釋迦牟尼佛の小官者殿父をは淨飯大王と曰母は
是摩耶婦人善學長者の娘也生所は忉利天一所は花園御座つれ父の尉

守久の神天照太神宮の御もりたり其後わき能の次第あつて是はよきもり哉とほめたりしゆへにのふと云なり

一　たうのみねの小つゝみはいつれにはやく打出すよしさいへり上手下手によらすとなり

一　さかり松の小鼓の事大鳥井の方より笛をひいとふくとこれ日吉といふ字なり小鼓たつと〳〵三度打事九曜の星をひようす其によつて大つゝみはぬり候はねとも小鼓はいとめをまるくぬる事ほしをかたとる其子細なり又中をそとあけそうをくろくぬりたるをほしといふもこの儀なり笛に日吉と吹やりてほしとうつ事日むまるゝとかきて星とよめり天より彼松さかりたる時さかひこさかひめ二人くたりてけふひよしと聲を立てよはゝりしゆへ也九つのほし下て松の枝にさかりしゆへに星下のまつともいへりされは松の下にてうつたきつゝみの事天長地久御願圓滿とかやうにうつ口傳あり笛もかくのこと

くの手あり委かきかたし口傳有祝言に彼手をさためて御まつりにうち笛もふくなり十一月二十七日なり同二十八日に馬場にて四座のたちあひあり弓矢のうたひなり觀世ほうしやうは船のたちあひ也されは能に出て拍子の位この二つの位をむねにもち候事ならひなりこつゝみをかいこに打事此さかり松の心をまなふされは彼松は天より天照太神宮はすのいとをもつてつり給へりかるかゆへに笛小鼓天長とは彼神の御名をかたこれりみかさ山もとは木もなく葉山なりし時かの松はふれり其後神護御宇二年二月六日に河内國ひらをかより春日大明神はみかさやまへとひうつらせ給ふそのかれいをもつて二月六日より木をうへしは此かれいによつてたきゝの御まつりあり則二月六日に四座のをさとの翁猿澤のまへにてつとめ申なり芝のうへなり同七日より立合あり芝を舞臺とさためのふをする事子細あり春日をはいみ名をたすしとのと申いまの大明神三千七百人の神のかしらた

り是をすしとのといへり右にかきをくとくこれは春日大明神の御守の神なりいまそのあと人間にわたりてかくのことしとなり同御守神守久神とて春日にましますすしの御をと〻二番に連主との舞といふて今に春日にあり三十六人の社家のかしらたり是は二月六日に春日の御前にて舞あり六人つ〻にて舞ありかくのはやししやうひちりき琴琵琶あり是をもつてまつりことをおさむまたすしはしるとと云事ありしはのうへを式三番さるかくなきとき丑の刻に出て彼猿澤の池のうへを三度はしる事有第三番におと〻猿樂とて連ぬしの舞の後にのふありさんはさるかくと云申樂これ也日よみさるなりかくらと云字をかたとれり三人の兄弟の流れなるによつて今に和國においてすし舞申樂と傳りまたあふみさるかくを猿樂とこの字を書く其子細は日吉のし〻やたるによりてひえの山より猿樂といふ字をかくのことくに出たり近江さるかくは日吉の神事をつとむるによりかくのこと

きの儀なり惣して申樂とあらんものはこのみちをいたつらになせは春日の御はつをかうむるあかめても猶大事と思ひ諸藝を心づけ道たへぬやうにせいを入候て春日の御内證にかなふなり

一　夫式三番座付の次第の事

第二　翁　第一　千歳
第三　三番　第四　笛
第五　小皷　第六　大皷
第七　太皷　第八　謠衆
第九　狂言

一　まくをあけ千歳二間はかりいつるとき太夫出へし其次に右のとくいつれも出へし扨翁せんさいは座付の間としてはしらのきはよりはし一はいにひとへならひに各々つくはうさてせんさいふたいのまんなかにて面箱を目八分にかまへてもちてかしこまるおきなせんさい

の右のかたにて禮をして座付その時袖をあら〳〵さなをすそのをさ
をき〻千歳面箱をれきなのまへにもちてゆくおきなのまへに面箱を
きてひほをさきおきなの面をさり、いたしめんはこのふたにすへたゆ
ふのかたへむけてをくたちあかりわきの座になをるさんはさうはし
てはしらのわきになをるその時いつれも座につくしてはしらのきは
にて座付衆正面へ一禮あり扨をの〳〵みな座付候てよりふゑやかて
座つきをふく小つ〻みうちつ〻みおけのひほをさきつ〻みをさりい
たしもさのこさくにふたをして左のかたよりよりてこしをかけすわ
うのそてをひたりよりぬきつ〻みをひたりにもちひさにのせふゑの
ひしくをまち小つ〻み打いたすれきな座してゐたれさもさいふ時立
あかりつ〻みうちのまへにてひろけさいふありさてさま〳〵の祝言
のうたひおきなのまいありつねのとく舞をさめてふたいのまん中に
て謹て禮をしてさてたちあかりいかにもしつかにかくやへいりおき

なの舞のうちにむの段さいふ事ありこれおほきにならひあり秘事也
一　せんさいのまいなかはたきのみつさうたひ左りより左右のつゆ
をさりつ〻み打のそはより舞臺のなかへいてたゐすさふたりつねに
さふたりさいひてしさる拍子ありたつはいをしてあふきに目を付逆
にまはるさてあふきをさしあけきみのちさせをへん事はあまつをさ
めの羽ころもよはんせいましませいはふかうへ亀やすむなりらりう
さふ〳〵〳〵さいふ時あし拍子三つあり舞出しつねのさくに舞つ
〻み打のまへにてつ〻み打のかたへむき又ひたりへあふきをさり舞
さむるあし拍子ありさてもさの座になをる
一　さんはさう大つ〻みもみ出しうちいてき〻あはせよきころにた
ちあかり橋かゝりにてさんはのうたひうたひいたしやかてまふ也さ
んはさうのまいすきてせんさい鈴をさりいたしさんはにもんたう色
々あつてす〻をわたすさんは鈴さつてふたひ中ほさへ出しさりてあ

ふきも鈴もあくる是にも五所拍子ありさてつねのことくまふおほつゝみのまへにてあし拍子こまかにふみ三度まはるたひことかほをなつる事子細ある事なりまいこめて面をぬきやかてかくやへかへる

一　おきなふゑの吹やうの事座つき三つあり初日は眞二日は草三日は行四日はひしき計なり但翁の笛は初日のことくにかへる座付吹てひしき高音のゆりをふくとふ〳〵たらりとうたひいたすさいはひこゝろにまかせたりとふ〳〵うちに高音のゆりあり扨このつきの舞の段まてせんさいうたひのまへにひしきありなるは瀧の水とうたひてつゝみのかしらをうけて高音よりゆりかけの笛せんさい一めくり正面にむかひ君のちとせをへん事はとうたひいたすかめやすむなりらりうとふ〳〵〳〵とうたひてまふ又ふゑありこれはまへの舞よりはやしひしきありさて翁座してゐたれともまいらふとうたひれちあかり候時笛のならひのふきやうありひさしかれこいはゐそふよやとうたはせてまた笛あり今日の御きたうなりこれよりも吹やうありそやいつくのわきな共とうたひ一めくりの舞ありこゝにてもふゑ六下を吹そふよやとうたひ舞あり笛ふき樣ありさて翁かへるもみ出しの笛ひしきて小つゝみ打いたす高音のゆりをふくまたひしく事もありもみ出しのうちの事なりさんはさうの段々ふゑけいこにあり京かゝりは子細有てすこしつかなり

一　小皷打いたしの事初日はれつよりうち出す二日ささみより打出す三日かしらよりうち出す四日はたつとかへすやかてなるは瀧の水といふつゝみの手はせんさいのこゝろなりわきなのうたひ候ときしつかに打てよし地うたひ候ときはかろく音をもつよくうつへしせんきいなるは瀧の水の時まへにたつとゝうちあけていひ出すへきなりたつとゝは二度也後のたつは替る舞の手なり其後うちあくるおきなにかしら二つつゝうつてあけまきいはせんとてかゝへてしつむる座し

てゐたれともまいらふのときおこなひのことくにこつ〳〵みちやう〳〵こうつ事これきたうのこゝろなり今日の御きたうの時ときみかゝゆるそよやの時舞なり二つ三つませあはせてかしらをはうつ袖をかへしてかしらをすて〳〵きさむれもての時分に本の打てかしらうつ也それよりこなたへは二つつ〳〵うち舞あしらふへきなり翁のならひはた〳〵しつかに三色の舞と心得へきなり能ふゐこつ〳〵み三いろの口傳有へきか又さしきにて翁たちあらはかしら二つにて打いたすこれ座敷能のならひなり又やこゐの事うちいたしは花やかにこゐをかけまた太夫謠をいひ出すときはひきくいかにもしんに口傳

一式三番の打出し同勸進のうち出の數の事

初日は　こつほ　ほほ　 　かしら

二日は　 　かしら

三日は　かしら　

四日は　たつと　かへすやかてなるは瀧の水といふつ〳〵みの手はせんさいふりうのこゝろなり

かくのことくにうちわくるなりたいふの身かまへを見あはせてれろし候れきなの舞すき候は〳〵大夫かくやへ入候時はしか〳〵り半分はかり入候時つ〳〵みもをくへし此後ちかひかしらの時小皷よりうちいたし候て大つ〳〵み打いたしちかひかしらをうつへし此ことく心かけうち出すへし

一　舞初てのちたつとつと〳〵ちかひかしらのまへれきなまくやへ入候はとうつなりさんは大つ〳〵みよりかしら五つうちいたす小つ〳〵み二つかしらありこれ子細あり鈴の段五段目よりかろし翁たち大形かくのことしこまやかなる事は筆に及かたし口傳

以上三十七ヶ條此卷にかきあらはす所の條々は能のはしまる處翁立大形うけ給りつたへ候通かきたて候このまきには神道とも

つはらとかき候間しやうしなき時はれうしに取あつかふ事有間敷事なり無沙汰に取さたすれは御はつをかふむる也おきなの地は法花經たらにほんをもつて作り神道をましへしなり

一　大事にしてよく〳〵あかむへし抑花傳書となつくる事よろつ此世界にありとあらゆるもの〻中に花にましたるれもしろく見ことなるものはなし又色々のれもしろきあそひ曲には能にこしたる事はなししかれは能ををしへならひ大事をつたふる所ははなを傳るなりとて花傳書とこれをかいたり能の極意この傳書に殘る事はなしよくよく秘書すへしかりそめにさたすれはならひあさくなりて花傳書はほうくになり候也いかにも大事にして家を繼子より外人にみする事なかれ大事は秘書する所を以てのこるなり

せ　あ　み

調子の次第の事先調子といつは天地ひらけしより此かた何事も調子にもる〻事はなしとりわけこのけいこにかきりて調子をきはめすしてうたひなり物をとりあつかふ事なりかたしよく〳〵心得へし此まきにれほかたかきしるすところの條々

五調子の次第の事

一　双調といつはめてたき調子なり則春三月の調子に定　方かくにとる時は東なり人の五臓にとる時は肝の臓也　其色あをき也味はすきあち也　木性とこれをさため眼に通るてうしなり

一　黄鐘と云は　夏三月の調子　方かくにとる時は南也　五臓に取時は心の臓なり　其色あかしあちはひにかし　火性と是をさため舌に通るてうし也

一　平調と云は　秋三月の調子也　方かくにとる時は西也　五臓に取時は肺臓也　其色しろし　味はからき也　金性と是をさためはな

に通る調子也

一 盤渉と云は 冬三月の調子也 方角にとる時は北也 五臓にとる時は腎臓也 其いろくろし 味は醎なり 水性とこれをさため耳に通るてうしなり

一 一越といつは 土用の調子なり 方かくにとる時は中央也 五臓にとる時は脾の臓也 其色黄なり 味はあまし 土性と是を定む口に通る調子也此土用の調子につゐて色々さま〳〵の子細の段々多し委は此まきのすゑにかきしるすなり閏月も土用とおなし調子也又土用の間日は調子ちかふ事あり

一 一越よりいつるは 断吟なり

一 平調よりいつるは 勝絶下無調也

一 双調よりいつるは 鳧鐘なり

一 黄鐘よりいつるは 鸞鏡なり

一 盤渉よりいつるは 神仙上無調也

十二天の調子の事

一 一越十一 断吟十二 平調正 勝絶二 下無調三 双調四
鳧鐘五 黄鐘六 鸞鐘七 盤渉八 神仙九 上無調十

時の調子の事

子 呂 盤渉 陽冬 定 呂律 丑 神仙 陰
寅 呂律 鸞鏡 陽 卯 呂律 双調 陰 春を定
辰 律 鳧鐘 陽 巳 律 上無調 陰
午 律 黄鐘 陽夏定 未 呂 一越調 陰 土用定
申 律呂 断吟 陽 酉 律呂 平調 陰 秋定
戌 呂 下無調 陽 亥 呂 勝絶 陰
一 断 平 勝 下双調 黄 鸞 盤 神 上

平調秋也白ひるなりからし

一越　申　西酉　戌　下無
赤　未　亥　勝絶醎冬也
苦也

午黄鐘南中央　一越　土用　北　盤涉子中夜黑也

白中巳　丑　神仙
夏也　辰　東卯　寅　鸞鏡
上無

右方かく五調子如此　双調春也青酸目度

甘辛酸苦醎五味五色五時五季共如此

一雨は　双調　一波は　盤涉
一川は　盤涉　一竹は　盤涉
一木は　双調　一石は　盤涉
一鳥は　盤涉　一鐘は　黄鐘
一雷電は　盤涉　一魚は　平調
一風は　平調　一土は　一越調
一双調は　發心の　調子也
一黄鐘　偖行の　調子也
一平調　菩提の　調子也
一盤涉　涅槃の　調子也
一一越　方便の　調子也
一五調子を宮、商、角、徵、羽　五音

引合する事

一　宮ははなにあて〳〵いきをつきいたし調子にあへは一越なり土川にもちゆる也

一　商はのこにあて〳〵いきをつきいたせは平調なり秋にもちゆる也

一　角は口にあていきをつきいたせは双調也春にもちゆる也

一　徵は舌にいきをあて〳〵調子にあへは盤渉なり冬にもちゆる也

一　羽は右の人さしゆひにてきんする時はなへあて〳〵ひらけは黃鐘也夏にもゆる也

十二調子を吟する樣の事

一　一越より二調子下を吟する事たいふいきといふ也口傳あり

一　一越より二重に吟しあけて調子にあて〳〵吟し次第〳〵に何も此こ〳〵ろにあけて其當調子を一斷平勝下双鳧黃盤神上と心得へし

一　祝言の調子の事

呂はしうけんよりいつるいきなり生るいきと云律はうれへなりひきいるいき也これはしにいきといふ也

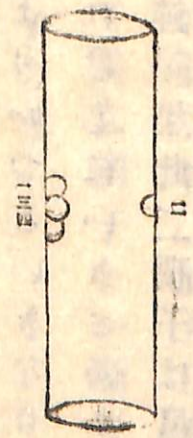
一　双調は黃鐘一越此二調子は呂の音ときためしうけんにもちゆる也

一　双調上無調子を父とす下無調子を母とす天地陰陽和合のてうしと是を言双調はならひと〳〵のほるとよむ也かるかゆへに諸願成就のてうしとなつけたり

一　五音相通の事

あいうをを　かきくけこ
さしすせそ　たちつてと
なにぬねの　はひふへほ
まみむめも　やいゆをよ
らりるれろ　わゐうゑを

一　喉内　かきくけこ
あいうえを
やいゆえよ
一　唇　まみむめも
はひふへを
わゐうゑれ
一　舌　たちつてと
さしすせそ
なにぬねの　らりるれろ
一　四穴吹様の事



三四二三斷四穴寒平
一下二双一二鳧三黄一二鸞
四盤一四神仙二四上

一	一越	●	●	●	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	一断
一	平	●	●	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	一勝
一	下	●	○	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	一双
一	鳧	●	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	一鸞
一	黄	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	一盤
一	神	○	●	●	●	○	○	○	●	●	●	●	●	●	一上

一　座敷にてうたひの調子の事小座敷にては平調よりうたひいたし双調にあけてうたひとむるなり
一　ひろまにては双調より黄鐘にうたひあけてとむるなりもしはやしなかくあらは十番目ほとには盤渉にあけて可然候さりなから是は

當座のさしきの相應の調子ありこれを時の調子といふ四季の調子土用の調子右のとりあひ口傳にあり

一　春は　双調
一　夏は　黄鐘
一　秋は　平調さりなから平調はあまりひくき調子なれは平調よりうたひいたしてやかて双調にうつしてよしこれならひ也惣別秋はあまりにたかき調子をはきらふ也其子細は秋はものあはれにしてこゝろすこき物なれはあまり調子たかきはおりに相應せす五音にとるときは秋をれんほにとるも此儀なり

一　冬は盤渉なりさりあから其季の調子なれはとてはしめよりはや盤渉を謠候へは座敷に相應せすこゝもつゝかすかしましき物に候あひたこれも双調か黄鐘にてうたひいたし一座のすきに盤渉にとむる事是ならひなりとかく冬は秋にちかひてうしひくき事をきらふ也そ

の子細は冬になり候へはかせのをとも調子たかくすきましく吹たち時雨のこゑ松風まとうつあられのこゑまても調子たかきものなりその相應吟をするによつて調子ひくき事をきらふなり冬座敷の笛まつはんしきをそこいろへ扨双調になをすへし

一　土用の調子は一越なり同閏月も一越なり但土用の内なりとも間日の調子はちかふへしまひには春ならは春夏ならは夏秋ならは秋冬ならは冬季の調子をうたふへし右の子細はむかし天竺にはんこ大王と中王あり御子五人ましまし一番は太郎の王子二番は二郎の王子三番は三郎の王子と是をなつけ四番は四郎の王子なり五番は五郎の王子と申也彼御あにたち四人には四季を一季つゝわけたまふ五郎の王子にしよむわけなししかるによつて御母君より五郎の王子大ほうけんとのつるきをえ給ふかるかゆへによつて七さいの御時御あに四人の王子たち彼つるきをとらむためいくさをはしめ給ふ其時五郎の王子は

天竺こうか川の水上にめつの池と申池ありかのにめつの池の中に城をこしらへ給ひ彼城にこもり御いくさをはしめ給ふ御あに四人の王子たちさま〳〵せめたゝかひたまふ彼大ほうけんとのつるきをぬきかたきのかたへむきてふり給へは四人の王子はこと〳〵くきりまけたまひ血の川七日七夜なかれける其時大王よりもんせんはかせを勅使にたてられけれはさあらは五郎の王子にもしよむ御わけあれとの給ふ其時春三月より十八日夏三月より十八日秋三月より十八日冬三月より十八日合七十二日を五郎の王子に參らせけれはそれにても御ふそくとてまたいかりをなしたまへはめつ日もつ日たいはい日をもつて三年に一度の閏月をつくりいたし土用七十二日にそへてまいらせたまひけれは五郎の王子は御よろこひかきりなしその時御ほうひとてもんせんはかせに土用のうちにまひとい日をくたしたまふ其子細にてとようのうちにもまひの調子はちかふなり又四季に土用の調子のちかふも此儀なりさてこそこの御代今にはんしやうなり

一　五調子きんする様の事右の手のひとさしゆひにてきんする時鼻へひゝけは黄鐘也

一　はなすちへひゝけは平調なり

一　ひたいにひゝけは盤渉なり

一　耳へひゝけは一越調なりつねに物いふ聲は双調なり大方如此

一　わたましの調子双調也むかしははんしきをもちひつれ共盤渉も水性なれはわたましに水をもちいるなり火事の道具に似たりとて双調にさたむとさら双調は木性也かるかゆへによつていゑは木をもつて出來すれは木性は相應の調子なり又いはく双調は春の調子也春は四季のはしめなれは家のはしめ猶以めてたき調子也

一　狂言の調子の事第一の調子一大事なりまへのなかいりのてうしをよく吟して相應していひいたし中頃よりちと調子をあけてかたり

またおさめの時分にもとのてうしになをしこゝむへし

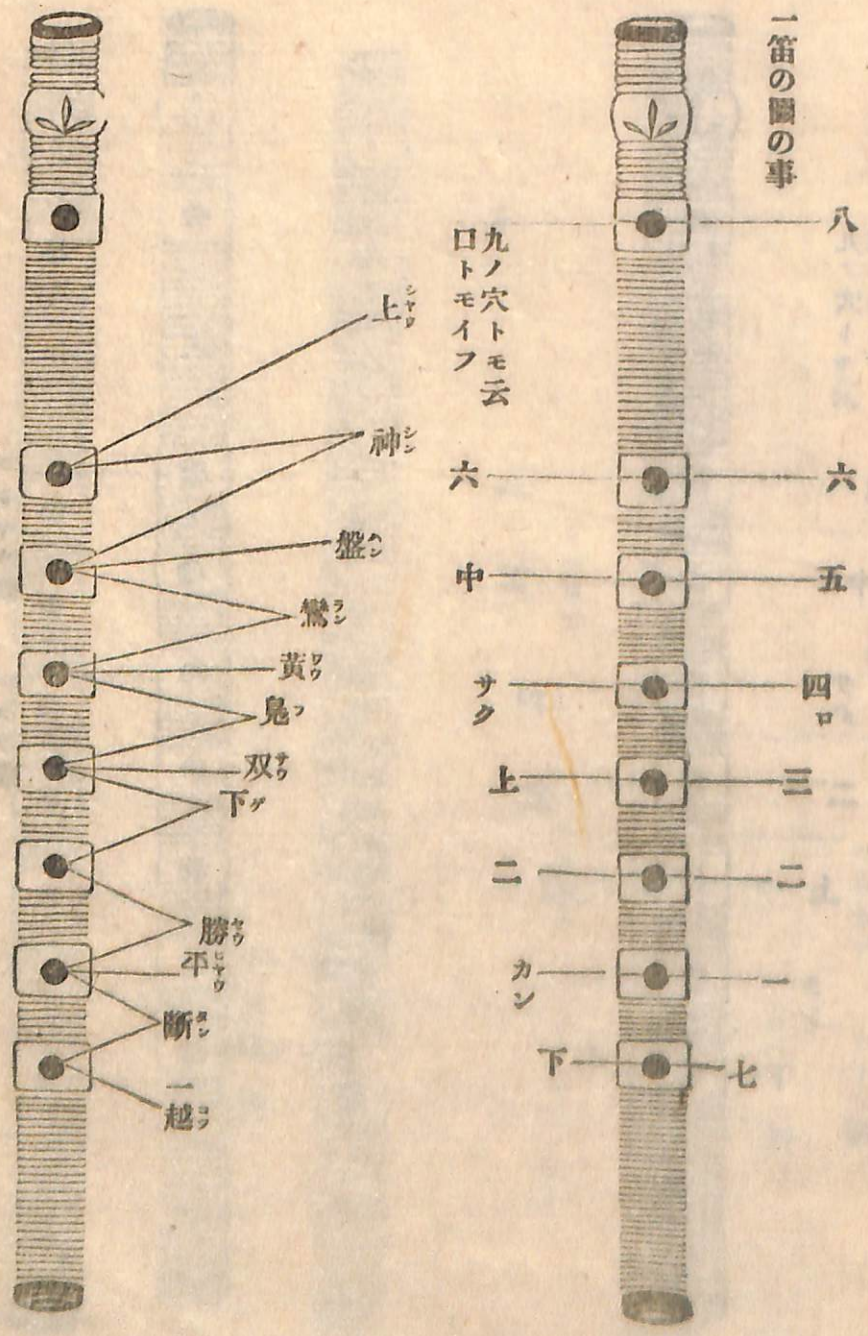
一　はやうちのふるい竹の雪なこのあひしらひ道成寺のあひしらひかやうのたくひはいかにも〳〵てうしたかにいひてよしいかにもあらあらこいふあひしらひなりうたひの調子より一調子高くいふあひしらひ也あふひのうへのあいしらひ同前

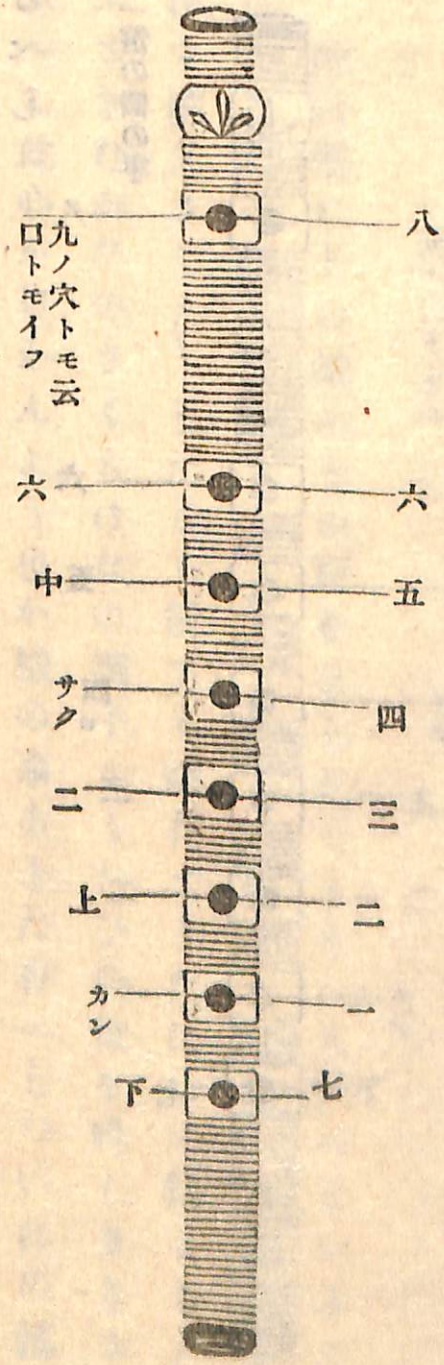
一　かなわかんたん江口松風かやうのたくひは調子たかきをきらふなり其うたひのてうし尤に候か様のたくひおほし是をもつて分別あるへし

一　西行櫻にあの柴かきの戸をひらきてうちへ入候へこいふこころ狂言こなたへ御入候へさら〳〵と云調子めり候へは櫻花こうたはれす候又さら〳〵したるく候ても櫻花こうたはれす候さら〳〵といふこきむかひのさくらはなの調子こうたひの位を吟しさらさらこいふへし此心かけかんよう也か様の事あまた有へしついれの謠にも

渡るべし

一笛の圖の事



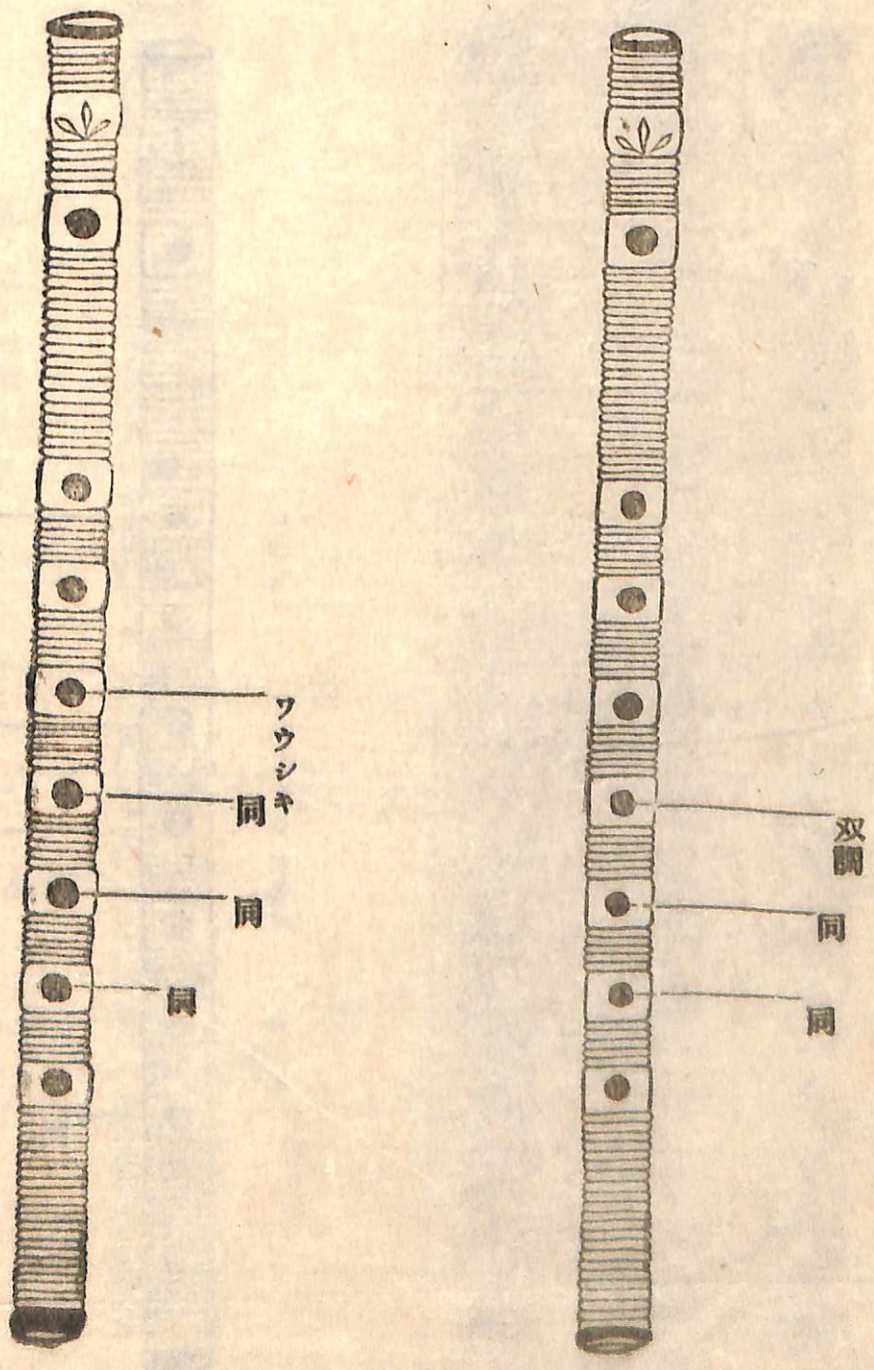

八
九ノ穴トモ云
ロトモイフ
六
六
中
五
サク
四
二
三
上
二
カン
一
下
七

フシャウ調
一コツ調
シャウセツ調
平調
平調

フシャウ調
一コツ
セウセツ
ヒャウ調
同

シンセツ
シンセツ
タンキシンセツ

下無
同



右ふゑの圖にほかたかくのことしこれを以十二調子吹分てうつり音色呂律分別なるへしさりなから笛にかきりかき物にてかつてんゆきかたし大かたのこゝろまてなりよく〳〵口傳かんようなり

一　御前のはやし小座敷あとにてのはやしまたわたましなとのはやしの時双調の舞には吹はらはぬならひあり

一　わたましの笛まつ〳〵座付を吹へしやかて座付といふ儀なり座付の後つねのふにはひしくわたましの座付のまへにはひしかぬものなり秘書なるならひなりひしく事家にさしあひなりかへす〳〵心得へし

一　調子は双調可然候盤渉も水のてうしなれはよく候へともたなしくは木性を本ともちひ双調尤に候

一　わきの方より大夫へうたひかけ候て調子の其わかこゑいつるとて我調子をはちやうきにせましき也大夫のめりかりをきゝ合せその

相應尤に候もし大夫の調子たかく出し候はゝひろき庭の能はしき候事有間敷候其時にわきの調子のならひ大夫よりうけさる處は相應の調子うけとつてさてよき調子にあけまた大夫へうたひ候處調子をめらしてわたす事ならひなりまたこゝろよくいて候大夫ならはわきより大夫へ調子ちかひ候事第一のわきのちしよくたるへし

一　うたひにきやうけんのあひしらひのてうしをんしやうの事うたひのしうけん哀傷のこわいろをよく吟し相應にあひしらふへし

一　時の調子をきんするやうの事口をふさきはなのいきはかりにてひとのみゝにいらぬ程にうなり候へは其さうおうの調子は通る物なり其調子にやかてうたひいたす物なりこれを時の調子座敷相應の調子といへり笛なきときの事也さりなからふき物ありとも其吹物の跡にてやかて右のことく吟すれは吹物の調子通るもの也

右調子の沙汰九十一ヶ條書しるすなり何も天地の間にはてうしにもるゝ事はなし取分此藝の肝要也調子をうかへすして諸なり物あつかひ及ひかたしよく〳〵十二調子のさたたんれん稽古肝要也

せあみ

抑謠といつは歌道より出るなりまづ難波津淺香山のことの葉によそへて長歌をつゝけそれにふしをつけてうたひさ號せり然るによつて謠をうたはんとおもはんひさは歌道なくてはかなふまじよく〳〵歌道を心かけ候事肝要なり歌道なき人のうたひはみなそはつらなるとをいひかたとおほくてかたはらいたけなる事のみまてなり先歌道むねにあれは月花をみても雨のふるも風のふくにもむしの音のすたくをきゝてもあらおもしろやとこゝろを付候へは思ひあはせてうたひ一しほ面白きなりさやうに心かけ候へは何時によらす貴人高人の御所望のときも俄うたひつまらすをりにふれたる謠口にいつる物なり第一に字章かいかふ文字うつりのへちゝめゆるふるほるはつすいるくるあけさけ一字つめ二字つめ三字あかり三字さかり三つひき文字をくりならふふしたつみあかりほと拍子きつてきらすふしなまりあたるはる其外次第道行付ふしせれふかゝるふしさしこゑさしと一せ

い小うたひいろ言葉曲舞上はろんき入はあひのうたひ出はきりかく
のをくのうたひわけみな人つねに是をうたふさいへともこゝろをし
りてうたふ人なしそれ〳〵のこはいろをうたひわけ五音たゝしくう
たふ事第一のならひなり又十躰といふ事あり是あまりいらさる物な
り高上のまへにてうたひわけきかせ候はては筆には書かたしたゝ五
音といふ事謠わけねは面白きといふ事なし謠やうの事あら〳〵これ
にあらはすところの條々如此

一　五せつくのうたひの事

正月は高砂なにはをほんとせり高砂は松をいはゐたろうたひなり初
春に子日の松とてこれをいはゐたまふ万人の家には松を門にいはゐ
さため候事まつはちとせのよはひをたもつ其うへ常盤木にて枝葉の
かるゝ事もなけれは飛花落葉のさかひもなしさすかにこたちもつよ
く雨風にまくる事もなく雪霜もいたます雪中にはゆきまよりあをは

をわか〳〵と若やき見するか樣に松は諸木のうちにて目出度名木な
りかるかゆゑによつて正月に万人門に松をいはゐ御しめをひきてと
しとくの神を勸請し人間も松のよはひをたもつやうにと年のはしめ
にこれをいはふ然るによりて高砂は松のめてたき威德をつくりたる
のふなれは初春にこれをうたひそめとかうす此外色々のいさくはつ
はるの松にれほし難波のみこうちの皇子の御位あらそひ有し時百濟
國より王仁といへる相人この國にわたり難波の御子に御代をゆつり
給はゝ我朝いよ〳〵安全なるへきよし奏聞申に付て則難波の御子御
くらゐにつき給ふ其時御即位あつてかのなにはの梅冬こもりしてさ
かさりしはなのいまをさかりとさきみたれ候かやうにむめは心ある
名木也歌道にも花のあにと申て梅は諸木のはなの惣領なれはかたか
た以初春に是をもちひ候そのうへうたひは歌道よりいてたるによつ
て難波つのうたをもちひ難波のむめをうたひそめにうたふなり

一　三月三日桃をいはふ祝言なれは西王母東方朔なりいつれも春の調子は双調也

五月五日かきつはたなり

一　七月七日七夕あさかほの曲舞をうたふへし

其子細はむかしもろこしに遊子伯陽といふ夫婦の人あり彼夫婦月をれもしろくおもひゆふへには月のいつるを待かねあかつきはいりかたの月ををしみてたかき所にあかりかなしみをなしかくしうしんをふかく月をおもしろくおもひし一念により二人のもの此世をさりて後二つの星となり天にむまるゝ二つの七夕これ也今も七月七日の夜こしに一度ちきりをなしたまふといへりかるかゆゑに七月七日にはうたをよみ詩をつくり色々にたなはたへ手向をなす日なり然によつてうたひも七夕をうたふ又あさかほの曲舞も遊子伯陽の事也さるによりてあさかほの曲舞をうたふ也

一　九月九日には慈童をうたふ也これもろこし周の穆王の御時慈童といふ人ありさる子細ありてつけんさんに流されし時彼しさう觀音經の二句の偈をあさゆふ讀誦するくりきにより藥の水谷に出來りこの水をふくし七百歳をたもつそのみなかみをたつぬれは菊のもとよりなかれいつる此水不老不死の藥となり目出度佳例なり九月九日はきくをいはふせつくなりかるかゆゑに菊のめてたきいとくなれはとてしとうをうたふなり

一　かさいてのうたひはうたひかへす也つゝみもうちかへす也みしかくうちかへす也やかて歸るといふ儀なり

一　船中むことりよめ入のうたひはうたひかへすへからす門出のうたひとはうられもて也これはかへすといふ事をきらふ也むことりよめとりのうたひは第一の祝言なり高砂のうたひを本とせりこれあひれひといふ儀也

一　わたましの謠の事ならひといつは火事をいむ也されは其心かけかんよう也うたひのうち火事のたくひのある事よくかんかへ其謠をうたふましきなり調子も双調を用る也むかしは盤渉水性なれはもちひ侍りしか當代は是も火をけし候へは火事の道具とてこれを略し双調に定む双調は春の調子なり春は四季のはしめとしのはしめなれはこれ第一の祝言なりかるかゆゑに家のはしめにもちゆまたいはく双調は木性なりかた〳〵もつて家に相應の調子と是をかうせり

一　船中のまひの祝言は自然居士の曲舞養老のきりなり

一　歌の會連歌の後なとに謠ひ是あらは蟻とをしの曲舞是可然候其いはれは紀貫之は世にかくれなき歌の名人にて御書所をうけたまはりいにしへいまゝてのうたのしなをゑらひ古今集をつくりたりこれも八代集のかしらなりさるによつてうたのみなかみは古今集にこえたる事はなしかるかゆへに歌道のあそひの後は此曲舞をうたへとあり

一　五音のまきうたひの大事是にきはむる處の條々先五音とは祝言幽玄戀慕哀傷乱曲この五つのこゝろのわかち也よく心得へし世間に謠手おほくありといふ共五音に謠わけ候人はまれ也五音たゝしくうたはすはうたひ面白きといふ事有間敷なり万事をすてゝ五音のたんれん心かけ肝要也先そうたひれほえ候へははや身にまんし本の道をわするゝ事在り其子細は人に物をとへは我けいあきと心得とふ事なけれは一期のあひた物はしらてはて候なりわか藝ををしさけ初心にかへり下手にものをとふこゝこれ上手のわさ也古今にいはく下手こそは上手のうへのかさりなれ返々もそしりはしすなされはなり物は手の打度をやまひとすうたひは音曲のうたひたき事をやまひとせり然はいましめのために謠とは先大竹のことにてまつすくにふしすくなかれ惣して道なとも直なる道をよき道といひ山坂あるゆかみ

たる道はあしき道といへはうたひも道にたとへ直なるか本意たるへし第一文字大きなれは謠したるし文字ちいさけれはうたひ必かろしはやきとかろきとしつかなるとこれおほきなるちかひ也惣別うたひやうものにたとへは糸のほそきはうつくしけれは染色もよしいかにもんをいろ〳〵にこのみ候てもも下地あしけれは染色うつくしからす候されは古人のかきをかれ候書物にうたひとはたものと御かき候もかくのとくの儀なりまつうたひにこゝろかけんとたもはゝ歌道の心なくはうたひに面白きといふ事をしりかたしとみゐたり其子細はうたひつねにこゝろに持て風の吹にも雨のふるにもこゝろをかけあらたもしろやと念し月花をみてもおもひあはせうたひをむねに持候へは俄に人の御所望の時もれのつから時に似合たるうたひ口にいつる物也古今の序にも和歌はその根をしんにつけその花を詞林にひらくとありかやうのこと葉もこのうたひの心得たるへしたゝ一つより

十にいたらんとたもふ心常にもちつゝ二つよりはやく百千にいたらんと思ふ心にてけいこさかり候物なり惣別うたひは梅の花の樣にうたひたき物にて候なり梅は一段と木こひ候て枝つきもさらによはき所なし花はまたこまやかにさすかにうつくしく匂ひすくれたる物にて候へはか樣にうたふへき事たる大形にてはなりかたく候かやうの事をきくにつけても少々の稽古にては如何に候のふはよきもあしきも我しらさるものにて人のよしあしといふ事にてさら〳〵其身しらす候又うたひは分別ゆき候へはうたひ返し〳〵てきたい候へはまたありやすく候又五音に五つのうたひはさたまりたる義に候へとも五つの聲をさためす候へは五音に五つのこゝの道理はなし是こうしやのまへにてこまかにうたひわけきかせ候はてはなりかたく候但末世は五音しりたるものも有間敷候あひた五音謠わけ候てもいらさる事に候か

一　第一祝言この曲味はたゞへはゞしのはしめの御よろこひといへるかゞゝしこれはこま〳〵しき事もなくたゞ祝言と一禮するのみなりされは曲にいりほかなることなくこゝろには祝言をふくみいらりゞ字性たゞ敷する〳〵ゞうたふなり

古歌　萬代を松にゞきみをいはゐける
　　ちゞせのかけにすまんゞおもへは

夫ひさかたの神代よりあめつちひらけし國のおこりあまのみほこのすくなるや名もふたはしらの神ゞゝにはまたやしまの國を作りきおすへらきなれや大君のみかけ長閑き時ゞかやあをによしならの葉守の神慮神慮すゑくらからぬみやゞちのすくなるへきかすか原やふしみのさゞの宮つくりおほうち山のかけたかく雲のうへなる玉殿のつきもひかりやみかくらむ

右此大小いつれもれなし

一　第二幽玄此曲味はよせいを本とす幽玄と言ゞを人毎によしはみたるゞ心得候也これれほきなるひか事なり花山に入て日をくらし黄林にいたりて家路を忘るゞゝに似たり幽玄にこの心あるへし一つ玄一つ遊この心をよく〳〵分別すへし此等はまた口傳なくては耳ゞをなるへし幽玄ゞいへはゞて引はへてなか〳〵敷ゆふ〳〵ゞうたふにはあらす心のうちにゆうをもちうたふゞいへり只しうけんの長閑かなる儀なり殊に幽玄はものつよきを本ゞすかへす〳〵ゆうけんの二字よく分別有へし

古歌　またやみんかた野のみのゞゝ櫻かり
　　はなの雪ちる春のあけほの

さなきたに物のさひしさ秋の夜の人目まれなる古寺の庭の松かせ更過て月もかたふく軒はの草わすれて過しいにしへを忍ふかほにていつまてかまつ事なくてなからへんけに何事も思ひての人には殘る世

の中哉たゝいつことなく一すちに賴む佛の御手の糸みちひき給へ法の聲まよひをもてらさせたまふ御ちかひ〳〵けにもと見ゐて有明のゆくゑは西の山なれとなかめは四方の秋のそらまつのこゑのみきこゆれともあらしはいつく共さためなき世のゆめこゝろなにのをとにかさめてまし〳〵

一　第三れんほ此曲味は以前の幽玄のふかくなりたる也よせいを思ふ曲味切なりたとへは宮女の心はよしありなから姿はすゝやかにおほとかなるかをしいやしき女のひとにやさしくれもはれんとて俄にひきつくろひ候へともきはめてつたなしこの戀慕の曲風相似たり心の切なる事はやるかたもなけれとも風姿は何とおく有へしかやうになにとなくする〳〵とあるうちにこゝろの修行あらはれてかならす此風の本意と成なりうへを色とりかさりたるはかりにてはものよはくかたはらいたきことありこれ當流の用心也以前ゆうけんのよせいには春の曙のこゝくこの戀慕には秋のゆふへをのそむかことしかやうの事はみゝとをきやうに候へともよく〳〵うたひしれはきはめてものちかくやすき事なり

古歌

しのふれと色にいてにけりわか戀は
物やおもふとひとのとふまて

夕のあらしあしたの雲いつれかおもひのつまならぬさひしき夜半の鐘のをとけいろうの山にひゝきつゝ明なんとしてわかれをもよほしせめてねやもる月たにもしはし枕にのこらすして又ひとりねになりぬるそや翠帳紅閨にまくらならふる床のうへなれしふすまのよすからも同穴のあとゆめもなしよしそれもおなし世の命のみをさりともといつまて草の露のまも比翼連理のかたらひそのりさんきうのさゝめことたれかきゝつたへていまの世までもらすらん去にても我妻の秋よりさきにかならすと夕のかすはかさなれとあたしこと葉の人

こゝろたのめてこぬ夜はつもれども欄干にたちつくしてそなたの空よとなかむれは夕くれの秋風あらし山おろし野分もあの松をこそはをとつるれ我まつ人よりのをとつれをいつきかましせめてものかたみのあふき手にふれて風のたよりと思へ共夏もはやすきの窓の秋風ひやゝかにふきたちて團雪のあふきも雪なれは名をきくもすさましくてしうふうらみありよしやれもへは是もけにあふはわかれなるへし其むくひなれは今更世をも人をもうらむましたゝもはれぬ身の程を思ひつゝけてひとりゐのはんちよかねやそさひしきかへす〳〵れんほは一大事なりむかしの名人たちもこのうたひなとをようかましく申され候殘りの四音はまきるゝかた候へ共れんほの儀はまきらかされす其子細は思ひいり過し候へはかならす無常のこゐに成てさらにきかれす候れもひ候はねは又こひの道理うすく成なりされは連歌なとにも戀の句なとの面白きは成かたしと連歌したちも申さゐ候如此の時分よく〳〵分別有へき物也此曲は亂曲あり秘事也

一第四哀傷

此曲味は春の花もみなちり〳〵に成はてゝ野山も風の物すこき木々のこすゐあさちかはらのけしきを見るかことしそめ〳〵つる色をつくしはてゝはうをくのあれたるにむしのこゐかすかなるこゝろなるへしされは戀慕哀傷の二つは心得一圓に別なるを人ことに同し聲にうたふ事これをかしき事なりよく〳〵分別すへし

古歌　淺茅生や袖にくちにし秋の霜
わすれぬゆめをとふあらし哉

さうちう露に聲しほれ〳〵たつぬるにかたちなく老松すてに風たゝてとへともまつはこたへすけにや何事も思ひたゝなん色も香もつゐにはそはぬはなもみちいつをいつとかさためん〳〵一生は風の前の

雲夢のあひたにさんしやすく三界は水のうへの泡光りの前にきえんとすいらむてんの内には有爲のかなしひをつけひすいのちやうのうちにはうろのくわんりき有とかや榮花はこれ春の花きのふはきかんなれともけふはたちろふわんりきのあきのひかりあしたにそうしゆふへにけんすとか春さり秋來つて花さんし葉落時うつり時へんしてたのしひ既にさつてかなしひはやく來れりあき顏の花のうへなる露よりもはかなきものはかけろふのあるかなきかの心ちして世を秋風のうちなひきむれゐる田鶴の音を鳴て四手の田長の一こゑもたかよみちをかしらすらん哀れなりける人界をいつかははなれはつへき

一　第五亂曲

此曲はたけたる曲なりうたひいまたいたらさるにわれとたけさせてうたふはさらにきかれすたとへはこのすかたは庭の松なとをれもしろからせてちゝみひきのへてまたすくなるを引ちゝめなとするをものに心得さる人是をたもしろしとれもふこれこのみちのひたうなりたゝかやうなるはつくりものと心得候へは更に面白からす二葉より自然にそたちたる松の年をへて色々こひたるこそ誠にたもしろく候へ是もまへ〳〵の四音をすくれてうたひ候はてはいかてか此亂曲となるへき當時のうたひはしうけんよりはや亂曲になり候間古人の申をかれ候事とも皆ほゝくくになり候たゝし世上如此候とて此道をすつる事も有間敷事に候よく〳〵分別かんようなり

古歌　いつしかと神さひにけりかこ山の
　　むすきかもとにこけのむすまて

山はきやうろさんにてから桃れほしうらはたうりのなしもとを家とさためて木かけにすめりつかれにのそむ折々はろ山のもゝを食すれは西王母をもうらやます又より外に主なきなしの木のもとなれはかふりをなをすに人とかめすかくて三とせの春の花〳〵ふた秋の月く

もらぬ御代とたのしみその世むなしき〻しかは御わかれのかなし
さにいそ山の花をもみすうらの月をもなかめす死なんいのちのまつ
かけの草の庵にあしすたれあくる事なくをきふして人目もしらすす
けきしなり〳〵

右此五音の事くわしくかきしるし候なり又祝言のうたひのふしに大
小とつけたるはわうしゆの二字なりわうしゆの字はわうはよこ也し
ゆの字はたて也されは彼二字心持肝要也横の聲をはふとく竪の聲を
はほそくうたひ候也如此謠候へは聲をたすけいきをたすけ候也此横
竪の心にていつれの謠にも尤也又こゑあやをなすといふ事ありこれ
も横竪也其いはれは聲の色をもつてうたひにもんをつくる也織物を
りすちは色々の色ををる物也あやの文といふは白き上に文ををりあさ
きのうへにれなしあさきにて文ををりからちやの色にてまた其上に
同しいろにて文をつくりたれは此謠もおなし聲を二つにわけてたて

よこをうたひ候へは文をつくるゆゑにこゑあやをなすといへり此こ
〻ろをよく分別してつねに心かけ謠つけ候はねはうたはれぬ物にて
候あさゆふ心かけ肝用なり

一　うたひのゆりに上下と云事あり是連歌の上の句下の句のこ〻ろ
なりはしめをなかくゆり後をつむる事十七字十四字のつもりなり惣
別うたひは歌道より出たるによりて諸事にうたを引也ゆりを十七十
四を合三十一の數のこ〻ろをゆるとみえたりあなかちに其數をゆる
にてはなけれともこれたとへ也

一　ふしにかねの位と云事あり右の上下の心也又字うつりに前をな
かく引はのちをつむるまへをよすれはのちを長く引を四寸六寸とい
へり之は字つもりの心のかねなるによりてかねの位といふたとへは
六寸と六寸とあはせ候へは尺にはつれ候謠もまへをひきまたおもし
ろからせてのちをもひけは六寸と六寸になり候てうたひしたるしこ

の用心のかねなり然によりて六寸四寸に謠候へは尺にあふはかるかゆゑによつてなりなかきを陽ごしみしかきを陰ごさため陰陽和合の心なりたとへは春の日なかけれは冬の日みしかし世間を一年のうちになかき季とみしかき季とあはせて陰陽和合と見えたりまたいはく此ふしを長短のふし共いふ也

一　つれにたち候もの謠ひやうの事大夫より調子をめらせてうたふへしつけあひして謠ひいたすをきゝ文字一つ半分程をそく付るなり大夫とたなしやうにうたひいたし候はんと思ひ候へはうたひいたしそろはぬ物也つけあひいかにもそく〳〵になきやうに一つ口にてうたふ樣にきこゆ候樣にたしなむへし大夫のうたひよく吟しうかかふてうたふへしもし大夫よりはやくうたひ出す事なごさたのかきりちしよくなりたごひたいふ下手にてつれ上手なり共大夫へ付へし惣別つれにかきらす諸役者共に何ごと上手のよりあひにて大夫一人下手なども大夫をうかかふへし是上手のわさなり仕舞なごもつれと大夫と二人してする仕舞ある時大夫忘れて文句にはつれをそく候共つれのかたよりせましき也

一　うたひのいきつきの事女能なごにあら〳〵ごいきをつく事見くるしきもの也いきのつきやういかにもしつかにつきてよし

一　地謠をうたひ候時扇をはさかてに持かなめにてそこ〳〵ろの拍子をうつへし拍子高くうつこと有へからす

一　うたひに一字つめ二字つめごいふ事は一字つめて二字のふるを一字つめごいふ又二字つめて一字のふるを二字つめごいへり三つなからのふる事寸にのひ心のかねにはつる〳〵によりうたひしたるし返々きらふ也

一　文字をくりごいふ事なかき字二つつゝき候時にまへのなかき字をうたひけしさきへはやくごりつけはうたひかろしこれを文字をく

りこいへり

一　あけは二つある曲舞これを二段曲舞こいふなかき曲舞にあるものなり其子細はなかき曲舞は謠にむらあり其むらをあらせましきためにあけはを二つさためそれをちやうきにして曲舞の位をきためはしめのあけはをもしのちのあけははかろくあくるこれも陰陽のこゝろ也惣別あけはの位はしめ字二つ三つほこしつ〳〵こあけ後の字引はなしをかろく地へわたす事是ならひなりあけはしたるけれは地まてもしたるくなるもの也其心かけ肝要なり但もし地うたひむきこはやくなり候はゝ又上はにてをさへ候へし上は一大事也あけはあしく候へは惣別の位にそむきむさこしたる物に成也

一　和歌のうたひやうはしめを何こなく拍子にかまはすかる〳〵こ尤に候まひのうちよりのるこゝろ有て和歌うたひいたし後二つ三つにてのするをよしこいへりあまりにむまくのするは初心なる物也

一　うたひすへ打きらする所の事謠するゑても若つゝこ初心にてうちきらぬ事あり其時はうたひかへさすすくにつきへこりつきうたふものなりこれならひ也

一　うたひそこなひ候こころの事人つけ候はゝすゑへ取付へしまへのわすれ候分をうたひなをさぬ物也謠うたひそこなひ候こて氣をうしなふましきなり當座のけかこれもひてさきをたしなむへしけかをわすれす候へは後まてふてきなる物也

一　四月朔日たなしく四月八日なこの謠賀茂の小うたひ尤に候

一　小謠のうたひ樣あゆみをはこふ宮寺のよりうたひ出し松たかきこうたふてよし其まゝ松高きこはしきしやうの時にはうたはぬなりいつれの小うたひも同前なり

一　音曲聲出口傳　一調　二機　三聲

調子をは機かもつ也吹物の調子をねこりて機にあはすまして目をふ

さきていきを内へひきて扱こゐを出せはこはさき調子のなかより出る也調子はかりをねこりてきにあはすして聲をいたせはこはさき調子にあふ事さうなく調子をは機にこめてこゑをいたすゆゑに一調二機三聲こはさたむる也また三調子をはきにてもち聲をは調子にて出し文字をはくちひるにてわかつへし文字にもかゝはらぬほとの曲をはかほのふりやうをもつてあひしらふへし　毛詩曰　情發　吟聲

聲成　又謂之音

一　大夫うたひ候うたひ自然わすれゝことあり其時思ひいたし次第に地よりつけ其つけやうの事一人はやく思ひいたしたる人ひけ候はこゝかしこより口々につけぬ物なり一人付候人も調子のちかひ候はぬやうにすかしてつくへし當聲にてつけぬものなりか様の事目の前におほき事なれともよく心得てつけ候人はまれに候か様の事肝用也あしく付候へは大夫も氣をうしなひさきを又忘るゝ事ありまた聞てもきゝにくき物也

一　曲になまる事ふしなまりはくるしからす文字なまりはわろしふしは大略てにはにあるものなりなまりといふ事音曲のうちにて第一のきゝにくき物なりよく〳〵不斷こゝろかけてたしなむへし

一　うたひに祝言わうおくの聲のわかちをしる事呂律二つより出たる也呂と云はよろこふこゑいつるいきのこゑ也律と云はかなしむ聲入いきといふ也まつ根本を心得へきやうかくの如く祝言の聲は機を躰にしてきにこゑをつけていたす聲なり是つよき言聲也是は呂のしやうね也きをはかりてつよき聲はいきをいたす儀にあたるへしこれ呂の聲悦聲なり然は祝言第一なりわうたくの聲といつはこゑを躰にして機をゆるくもつこれやはらかによわきこゝろ也きをゆるくもつは入いきのこゝろ也是律の儀あはれなるしやうね也然はわうおくとなつく去程にしうけんの聲には機をはるゆゑに調子のかる事をくせ

とこしてわうおくは機をゆるくもつゆゑに調子のめるをくせとす

一　謠に曲舞と申は一道よりいてたるゆへたゝうたひには黒白の書りめあり然は文字にも曲にも舞をそへたり惣名を謠といふに曲舞といひたるを以前に曲ありとしるへし此かはりと言は曲舞は拍子か躰を持也たゝ謠は聲か躰を持て拍子をは用いにそへたり然れは曲舞は拍子か躰を持ゆへにまひといふ文字を曲にはそへたりさる程に曲舞といへりたちてうたふわさ也風躰よりいつる音聲なり然は時は各別の事にて曲舞は曲舞の當道にてあまねく謠ふ事はなかりしを近代曲舞をやはらけて小謠にふしを付けてうたへは殊にれもしろくきこゆるゆゑに當時は殊更曲舞のかゝり第一のもてあそひとなれり是は已父申樂の能に曲舞をうたひいたしたるによりてこの曲あまねくもてあそひし也しらひけの曲舞の最初なり去程に曲舞かゝりのくせを大和うたひと侍りかゝるほとに曲舞のふしのこわさきをやはらけうたふ地になりゆくところに曲のみち少つゝちかふ事をしらす曲舞のかゝりあり然共面白き事かんようなれは是をひか事とは申さぬ也さりなから此かはりめをしらされは理るへき道を理るへき導師はたゐたるに成へき事本意に背くなり抑曲舞謠のかはりめといふは曲舞拍子を躰にうたふ曲なれは文字をは拍子かもつによりて文字も句うつりもかろし又拍子に引ひかるゝによりて所々なまる章ありされ共ひとかかりきこゐて面白き風聞これ拍子のおもしろきしやうね也さるによつて少なまるところも一躰のかゝりにきこゆる也是を曲舞かゝりの風聞とすたゝうたひと申は拍子にてかさることもなくたゝありのまゝにうたふゆゑに文字の章まきれす去程に謠のすいさうあらはれてさしことたゝ言はりして一句一曲にいたるまてみゝにすましてこゝろをしつめうたふ人もきく人も同心に一曲のかんに應す則たゝしき感なり　毛詩曰

正得矢動天感鬼神莫近捨詩

かくといへるもこの感なり然は直かんなるかゆゑにはくしつをあらはすといふ身心をおごろかすかんも天地うごかすといひ敵をやはらくる所を鬼神をかんせしむるといへり然は誠の正風をはあらはさす候ゆゑ文字も句うつりも正也其うちに上手のわざと云は此正をよく色取也正はむもん也されはこゑあやをおすと言事是也

一　うたひに句つきいきつきといふ事一字をいはていきにする事あり句つきと云はうちきるときいきをつかてうつといひてうたひいたすを句つきと言なり

一　大臣わき只今參詣仕候下にて山伏わきひく同次第道行の事上より

一　僧わき思ひ候上より同次第道行下より

一　男わき中にて同次第道行中にて

し

して男只今急候下にて同次第道行中より

一　ほうか僧して男誰にて渡り候そ上より

一　せうして中より

一　かへして上より

一　山伏して上より

一　物狂上より

一　もの字けすことく也しほへゆく當時の事

一　ゑんさんの五ゑんと申は

一　さんは中なる物語

一　のはしゆの下

一　五はかいこゑんより上にて

一　くせの戸聲心をたしやかに持へし

地氣を上て
音曲氣を上て
俄に下へて
文字こまやかにとひらり
しほ氣を面白く
はなへ入て聲
出やう二重なり

一　きつくつくつよくかたる

一　しゆはさんの下

一　仕手のかたりはうつくしくかたるへし脇のかたりはつよくかたるへし仕手のかたりに色々ありわきのかたりにも色々あり條〻

一　女のかたりはいかにもしなやかにうつくしくかたるへし但物狂ならは心もちちかふへし

一　男のかたり是もうつくしくかたるへしさなからよはきはあしく是も物狂はちかふべし

一　ひた面のかゝり第一かほくせなきやうにたしなむへし

一　せうなこのかたりはいかにもこひてあまくなきやうにかたる也

一　いくさ物語なこはいかにもうつくしからせすにつよみを本こかたるへしこゑなこも呂を本こしかんをすくなくかたる也

一　神秘なこ佛法なこはいかにも眞に殊勝にかたるへし

一　つき物なこ人にかさより ていにしへを語る物かたりありこれなはこいかにもよは〳〵こ執心をなしこゝろをむねにもちてあはれにかたるなり又いはく物狂もつまやをつこにはなれ子をうしなひなこしたる物おもひのきやうらんは右こ同前なり但佛神のこかめまゑんのものなこみ入て事にくるふは各別なりこれ又いかにもあら〳〵こつよみを本こしすさましくかたるなりいつれもかたりのしな〳〵心得かんようなり

一　わきしてにうたひかけやうの事女のふるい兒童のふるいなこをいかにもしこやかにあら〳〵しき事をさりしたふこゝろにうたひかけ候なり

一　上人なこのわきにしてしつのをならはわきへのこひかけ其心得有へし

一　貴人高人へのこひかけ候こころ常の世間のこほうのこくこゝろに持へしいつれもにせ物なれはさあつへしよくしにせ候事肝要なりたゝし又あまりにせすくせはしほからきもの也しほあひかけんか

んよう也

一　鬼神にものいふ事これいかにもよはみなくつよ〳〵さおもしろからせすにたしやかにさひかくへし神にはしんに謹而言葉をかはすへし鬼へはさくる心なり

一　菩薩なさのしてにわきよりの謠かけいかにも直にこゝろをすましてたつさく謠かくへし

一　大内女らふなさのしてにわき常の人ならはうたひのいひかけらかふへしいつれも能さいふは世間の物まねなれさもすちのちかひ候はぬやうに其躰有へし

一　家人うちの者なさにものいはする事是また世上につねにあるさほうのこさし去なから其躰能にてあらは分別有へし

一　まほろし夢中の人なさへこと葉をかはす事大事也分別口傳あり

一　關守なさのわきいかにもしほれぬこゝろをせちつよ〳〵さうたふへし

一　人あき人これもいかにもしほれぬ心をもちつよくあら〳〵さうたふへし

一　いやしき木こりすみやきやまかつなさのしてにわき貴僧高僧雲の上人ならはいかにもけたかくむかひををしさけてものさふへし是こゝろ持なり

一　物狂の仕手にさひかけ樣うつくしからせすしてたしやかにさふへし眞に問かけ候へは似合ぬ物にて候さやうに候へはさてむささふにあらす是は心持也

一　大夫のうたひ樣右の脇のそれ〳〵のしてにうたひかけやうの心持同前

一　曲になまる事ふしなまりはくるしからす文字なまりはわろし文字なまりと申すは一切の文字は章かちかひ候へはなまるなりふしな

まりと申はてにはのかなの字の正也てにはの字の正はいひなかす言葉のなひきによりて正にちかへともふしたにもよけれはくるしからす候よく〳〵心得わけて口傳すへしてにをはのもしのことてにはのをかけもしかやうのをはり假名の正はちかへともふしかゝりよけれはくるしからす候ふしと申は大略てにはの文字の聲なり惣して謠をはいろはよみにうたはぬなりまなの文字の内をいひてつめひらきをはてにはの文字にて色取へしふしは大略てにはにあるものなり

一　せれふの事たいふのせれふわきのせれふちかふへしきやうけんへのあひしらひ同前なり大夫はものあさにあひしらひてよしわきはいかにもこまやかに云てよし

一　鬼の大夫のさきはいかにもつよみを本といかれるこゝろにうたふへし

一　女の大夫の謠いかにもしなやかにうたふへし

一　せうのうたひいかにもこひてうたふへし

一　物くるひの大夫いかにも音曲にかまはすする〳〵こうたふへしうたひ眞にうたふは本意にあらす

一　歌舞の菩薩なこの大夫いかにも眞にこゝろを殊勝にもちてうたふへし是うたひやうこゝろもちのならひ也よく〳〵それ〳〵の能のかんようなり

一　惣別のわきしてへうたはせ樣いかにもれもしろからせす音曲かましき事もなく只する〳〵こうたふへしわき能したるくおもしろからせうたひかけ候へはしてのきよくをなすへきやうなく候いかにもわきのうたひねはきはあしき第一なりさく〳〵さかろく謠かけ候事肝要也大夫こわきこのうたひ水きはたちきらりこ別にわわりてきこゆる事第一の上手のわさ也よく〳〵心得かんようなり

一　一字しほり二字しほりこいふ事あり一字しほりは二字目をしほ

るを一字しほりとてくるふしの本也二字しほりと申は二字續て三字目をくるを二字しほりと申て第一あしきふしなり

一　三字さかり三字あかり三つひきと申もみあならふふしの事にて候三字あかりと申は三つつゝひてくりあくるを申なり聲いり候てうたひにくう候てより第一きゝにくき物也是大きにきらふ事也三字さかりと申はさくるふしの三つならへてさけたるを三字さかりと申也これおほきにきらふふしなり三つ引と申はひくふしを三つならひたるを三つひきと申なりうたひのねはくしたるきすいさう也こゝさらきらふふし也いつれも似たる事のならふはきゝ候ても同名にて聞にくし其うへうたひしたるく候て囃のおもにこなり候よく心かくへし

一　うたひとめはのてにはの事にけりそけるこそけれやらんと留る也

一　座敷うたつひゝみなき時のうたひやうの事うたひすへ候處大略のところうたひすへ候かよく候也

一　同音のつけあひの事祝言のはつよく付へしれんほ哀傷述懐なとのはいかにもよはゝくとつくへしとりわけくときのすゑなと付やうかんしん也いかにもにあはせうつくしくつくへし脩羅鬼かたのつけあひいかにもつよくたしやかに付へしいつれもそれゝのつけあひの心もちかんようなり

一　女郎花源氏供養なとはわきのうたひをきゝちかへはやくいたす事あり此時のうたひ樣わきやかてこゝろへてうたひをさきへとひ大夫へ謠かくへしこれならひなりかやうの事いつれへもわたるへしこのたくひの能れほし

一　音曲をうたはんとれもはゝ其まへをいかにもするりとうたひはつれに音曲をうたふへし惣たゝいのふしかましき事をうたひ候へは音曲の威光なきもの也めつらしくきよくをうたはんとおもはゝ其ま

へをろくにうたふ事ならひ也

以上うたひの極意八十五ヶ條此卷にあらはす所大形是より奥ふかき事有間敷候かさりなから百様をしりて一様をわけかたしといふ時はおくのをはりはなきときこえ候か様の事も人あまたしり候てこり〳〵に我も〳〵と沙汰仕へは右の傳書はいたつらになり候とかく秘書と申はいかにもおくふかくかくすをもつてたくさす

せあみ

凡つゝみといつは天地陰陽をかたとり大つゝみ小つゝみとかふせり小鼓は陰也大鼓は陽也つゝみにあなを六つあくる事六曜のほしをひようせり大つゝみは月にたとへ笛は日をかたとる胎藏界金剛界といへり笛といつは天竺にては藥王大唐にては馬融の作り給ふ極樂にては藥王菩薩といへり龍のすかたをまなひ水中に龍のなくこゑをきゝ竹に八つのあなをあけ八葉の蓮花と觀念して此こゑをまなふ太鼓といつはをはりのくにあつたの宮に住たまふ源太夫の神かの岩戸の時はしめ給ふいつれも其いはれあまたありと雖とも大形これにかき侍る拍子のこゝろもち口傳おほしならひを本として序破急陰陽のわかちをたゝし文字つもり句うつり謠のめりかりを吟して面白くたしなみはやし候事かんようなり拍子にさへあはゝと思ひうち候をはめくらうちと申也とかくけいこわたくしにしてはなり難し岩尾に花の咲たるやうに御はやしあるへく候たもしろからすることはかりをほんに

するは第一のあしき事にて候よろつはやしのこゝろもちこのまき上下にあらはす條々

四日の能の囃やうの事

一　初日は二日の手を殘しいろよき花のつほみたるやうにはやすへし

一　二日めには三日めの手をのこしきのふまてさかきりし花のけふやうやくかつさきたるやうにはやすへし

一　三日目には四日の手をのこしきのふまてかつさきし花のけふはさかりとみゆる樣にはやすへし

一　四日目には春ををしみてさき殘る花のみな咲みたれ木々の木すゑ四方の山々も色めきわたり人のこゝろもうきたつやうにをしますのこす手をつくし囃へし四日のはやしやうれほかた如此はやすへし五日めもあらは其人の手から次第に囃すへしかくいへはとて道にゆるさゝる事は第一のひか事也五日の能といふ事は一切なき事にて候四日の能も近代さたまり候昔は三日より外はなく候

一　よろつのなり物身なり肝要也身なりかまへあしけれはみにくきものにて候第一のたしなみとは身なりの事にて候

一　ねいろをわすれてあちをしれ

一　身なりを忘れてひやうしをしれもろ〳〵のくせのなき樣に第一のたしなみ也

一　御前のはやしの事調子は双調なりうたひ手はかうへをさけて謹てうたふ大小いかにもしんにはやすへしやこゑかくへからす大鼓貴人の御前をすこしそはたてゝうつへしあまりにきさみたかくうつへからすいつれもよく祝言をふくみはやすへし

一　太夫かんある仕舞ある時大鼓太鼓によらす手をうたぬもの也これまきるゝ手といひておほきにきらふ事也

一　當座の花つゐの花といふ事あり當座の花と申はほめられたきことはかりをおもひて謠の文字のくさりやうをもしらすもとよりのへちゝめをも心かけすめくら打にたくさんにうち候へはしるもしらぬも是をほむるこれ當座の花といひて下手のしわさなりつゐのはなと申はしる人まれ也ならひをほんとし道をみちにたゝし其うたひの文字に取あひたるこゝくにつよくするりと打候へは當座は物さひしきやうに候へともとりよりて聞はとけておもしろし當座の花ははしめ面白く聞ゆれともとりよりておもしろからすこれ上手下手のわかち也

一　しらぬうたひをはやすへからす人ことにしりたるふりをして御はやし候みなひか事おほしうたひのこうあん有へく候但しらぬうたひをはやしやうのならひはすくの拍子を心得はやすへし口傳ありひをはやしやうのならひはすくの拍子を心得はやすへし口傳あり

一　つゝみの手にきらふこゝろもちの事しいさりやむ二ついへをかたちうほつゝみにさはらすたふときのち

一　もんある能むもんの能といふ事ありはやしよく口傳すへし無文なる能はみところなし去間はやしまてなり手をくたきはやす也文あるのは見所に候あひた能を本に囃也

一　つゝみの手の打樣聲をかくれはかしらの位になるものなり手にはこゑかけぬ物なり手といふは事謠の文字くさりのへちゝめをきゝあはせて打へしこゝに手ありとはかり思ひうかゝ〳〵こうち候へは手しなにのり候はぬ物なりよく〳〵うたひをを吟し相應したる手をうつへしうたひの呂よりうつ手はおつより打いたすへしうたひのかんより打手はきさみよりうちいたすへし呂かんに相應かんよう也

一　座敷のはやしの事ひゝきなとなきこゝろにては手もとを本と思ひ音の事をわすれはやすへしひゝきある所にてはうきゝはやすへし惣別ひゝきの座敷ひゝかぬさしきことの外ちかひなりけいこの

ときそのさしきのくふうを分別してたしなみ候へはよく候ひゝきなきところにて手かましき事打ましきなり

一　しつかなる事はやき事心得ありはやき事には手をはやくこゝろをしつむるしつかなる事には手をしつめ心をいさむか樣の心持をも大和かゝりには女はかせ男はかせの位といへり陰陽の事也こゝろもちと手とを二つにわくる儀なり

一　出はの位にくつかふりの位といふ事ありならひに云さきのうたひをむねにふくみ心のうちに吟して其くらゐをかんかへうち出すへしまへの一聲次第いつれも同前なり笛のひしぎ同心持なり大小太鼓打出のならひ大形如此心もち候はねはわきのうたひくらゐにそむく也あひの謠のすゑの位をわきさきの出はのくらゐにうたひれさむるその位をうけさきの太夫の出はの位を吟しうつゆゑにくつかふりの位といへり

一　舞のおろすところ能にては太夫の身かまへあしもとを見合せてれろす座敷にては笛にしたかふへしことに序のうちにつゝみ大事なりおろし所笛と大小ともにおろす也舞の間かんしんなれはよく心かくへし

一　皷にきらふ事第一くせをしまんする事をよく〳〵たしなむへしいかにも〳〵ほけ〳〵こうち候へは可然候まんする所一せいのこしより外はあるましく候

一　眼は腰にあれ勢はかたさきむねにきをもつ事第一秘事也

一　おもひわすれて打違心持の事まへのけかをとりはついて後にする事をこゝろかくへしまへの心をうしなはすしてはやし候へは後のするわさかならすあしきものなり是をしたふはやししたはぬ囃ていへり上手下手のわかち也れもしろき心持なり

一　諸藝たしなみの事手にあはぬ道具にてすへからす藝は半分にき

こゆるもの也かたく斟酌すへし

一　おつとこねとは陰陽也阿吽の二字にも是をたとへたりおつきさみを取あはせ陰陽和合と是をいふ大和かゝりにはめはかせはかせといふ能なれはとて陰とはかり心得てはやし候へは能なりかたし陰には陽の心をましへ手には陰を打心に陽をふくむ又陽の能なれはとて陽の心もちはかりをはやし候へはつゝみつよ過ていやしく候手には陽のこゝろをもちむねに陰をふくむこれならひ也女はかせの中の男はかせはかせの中のめはかせと云心持と同前に候

一　もとる拍子とは次第の事也上略中略下略本のかしらを打何さてもとる拍子といふにうちかへすによりもとる拍子となつけたり本の次第の事下卷に是をあらはす地はつきいたす心かしらはれす　こゝろ口傳

一　舞は一聲のみたれなり口傳有之

一　かつこはさかりはのみたれなり

一　らんひやうしはれきつゝみのみたれよりつなかぬ囃ともいへり

一　いろのはやしと申事あり赤黑これははやしこいあさきも囃也むらさきうすあさき白はしつか也うす色もしつかなり此こゝろしらさる太夫はのうのくらゐちかいはやしなりかたしとむかしより申傳

一　いろゐの舞といふ事あり是は源氏供養ゆや關寺の事也たゝし關寺は老女の舞なれは心得あるへし

一　つゝみは本拍子をもつてよろつの囃を仕出ほん拍子と申は數四つ也一拍子と申は聲にありしらへの拍子といふ事あり

一　萬のなり物その座敷によりて手をもろつへしせはきところにてこゐをたかくかけおほきにうてはいやしくてさらにきかれす候其時はさしきに似合候やうにいかにもしんしやうにいろよき花のつほみたることくにはやすへしまたまひろきさしきにて候はゝれほきには

やすへし其さしき相應尤に候調子もひき〻調子は大座敷にてはあしく候其座敷相應かんよう也

一　むかしは舞のうちつまりすくるをれさへ中候きりも同前に候つる近代はこれあしき儀也こておさへす候はやくなせるを俄におきへ候へはわけもなき物になるなり惣別上手のはやしに左樣の事はなきものに候下手のはやしにかならすある物に候あひた其まゝつまりすきさせこめ候はましにて候はやしはかりならはさやうにのらぬ囃はやく宮ちあけ候事習ひ也能ならは大夫心持有へし

一　藝は心よりいづることに候こゝろやはらかなる人のするわさは藝もほけてやはらか也心のかいなる人のするわさは必けいもきつしさるによつてけいあかり候へは其こゝろもなをる物也するわさ下手なれはかならす其人の心あしき事れほし我心をゆるさゝる事ありてはけいさかる物なり少おほゝ候て人もよきなこゝほめ候へは其身にし

まんし稽古ふさたなりとかくみやうもんを打すて稽古を本とすへしとかくよろつくふう分別よりいつる物なり但けいこなくては分別はみなひか事也けいこよりいてたる思案也上手とあひ手になりもみあひはやし候へはするしわさあかるものにて候下手と出あひはやし候へはさかる物にて候其時の心もち只わかするわさをろくにすへし相手の下手なれはとてゐい聲をかけむさとしたる事をしかけおどし候事第一の僻事なり諸藝習をはすて拍手にあはゝと思ひわかまゝに色々の事をするを拍手きゝとは申也それは上手とはいはれさる也習を本として太夫の位をわきまへかしましくなきやうに面白くはやすを上手とはいへりかくはいへ共いまたいたらさるに上手をまね候へはけいよはくちいさくなりてあからぬ物なり初心のときはいかにもつよくならひのことく囃へしされは上手をはまねてまねへからすとはかくのことくの心もちによつて也太夫も上中の拍子をふみならひを

本として面白き仕舞をするを上手と云ふむましきこころにてひやうしをふみふむへき所にて拍手を落しむさとすちなき事をこのむ太夫を拍手きゝとは申也是本意にあらす

一 笛のいろゑの事つゝみなきこころなさに吹く太夫の仕舞あらはかならすいろゑへしたとへは定家なさにけふはこゝろさす日にあたり候墓所にまいり候御供申候はん心得申候こなたへ御入候へさいひて二足三あし物もいはていつるかやうの所はつし候はていろゑ候もの也同しく狂言の心得肝要なりか様の事ゆやにしきゝ宇治頼政なさにもあり其外いつれの能にもたほき事なり笛ぬかすましきなり笛なく候へは太夫てにはなき物なり返々かんよう也

一 女はかせ男はかせ女中の男はかせ男はかせの中の女はかせさいふ事あり當家には陰陽とこれをいふ謠にて分別あるへし陰の能は女也かるかゆゑによは〳〵とたをやかに囃すへし但あまり陰に心かけ

候へはやしよはく候こゝろに陽をふくむへし手をは陰にこゝろへ候へはさなから手とこゝろ陰陽和合するによりてはやしにより同し陽の能是をもつて分別すへし

一 皷きさみの事はる字はめるめる字ははる

一 小皷みつ地はる字はきさみめる字はおつ

一 男の幽靈は陰の中の陽なり

一 女のゆうれいはかしらは陰地は陽也

一 現在の男陽のはやしなり

一 草木の精はやしの事大略は陰なり但陽もまたもしありうたいにより所によりて陽をまするもあり

一 序の舞はうけて手をしつむる

一 破の舞は手はうけてこゝろをしつむる

一 陰の中の陽ゆや千壽の舞なり是によく分別あるへし

一　鬼のはやしの事りきたうさいたうさて二流ありりきたうの鬼はちからをはたらくさいたうの鬼はよせいはかりをはたらく是をりきたうさいたうとなつけたり鬼の女鬼の男と云事もおなし心もちこれにて分別あるへし鬼にめいとの鬼現在の鬼のはやしこゝろもちかふへしやまうはなとはさいたう善界あふひのうへはりきたう山はやしこれをもつて心得へし又怨靈の鬼とて人なとの悪念にて鬼になるものありかやうにいくいろも鬼のわかちあり大夫囃のこゝろもちそれそれにちかふへしよく〳〵けいこすへし

一　小つゝみ送るはしたるきかいしきなりそことなきならひにて候されとも上手のつゝみのほけ候は中々天下一にて候下手のほけ候はしたるきかいしき也

一　音曲にはしらへのひやうしをしれ

一　さしきにてこうたひ御所望あらは大小によらすうたひの地を三つはかりのこしておくへしならひ也

一　よるのはやしの事大事也いつれも陰なりさるによつて囃うれひになるものにて候何も陰のはやしなれは陽のこゝろをもつてねふりをもさまし候やうに囃すへし

一　鬼の靈の事錦木かよひこまち船橋三番か上々にて候其外かやうのたくひ是にて分別あるへし

一　龍をいたゝき候能のはやしやうならひあり油斷をしてむさとはやし候へは靈いきほひぬけ大夫是をきらふいかにも靈のいき〳〵とみゑ候樣にはやすへし

一　早舞の心もちはやき能にはよろつのてうしかりたかりいとゝ能のはやきに調子もかりつゝみもきをかけてうち候へはたていたに水をなかすかことしよくのり候へ共くらゐちかふ事あり調子をふくませうたひも調子もかろく大小もこゝろに陰をもち手には陽をうち候

へはおのれとよきかけんにはやくなり本位にゆく物也

一　つゝみにところゑうちごいふことあり口傳

一　ときりうちごいふ事あり口傳

一　右のはやしはこまやかに笛も鼓も手をうつ

一　左のはやしははんしきはやすなり

一　本の序ごいふは江口にきはまり平調返しごいふは序なり又くまたきごいふ事あり但近代三番にさたむ

一　山婆のかけりは盤渉なるへしらかけり也

一　猩々のみたれ大事也みたれ足を見あはせみたれかゝるならひたほしはやしの下卷にこれをあらはす

一　一日のうちに道成寺あらは其まへおきつゝみうつへからす笛はしんのねとりをふくへからす

一　はちの木の出は笛ならひあり口傳

一　大夫二人三人して舞事ありつれ大夫にかまはす其うちの上手をめかけほんとしてはやすへし

一　はや笛又さかりはを笛二人して吹事あり是さい〳〵はなき事也あいにかやうのこともめつらしくありてよし

一　きりの舞は其かへし身もちを見へし習ひの外にしてによる事なれは聲の出しところかんようなり氣をしつめてこゑをうくる事第一のならひ也

一　第一きらふ事まへをし也

一　ねんしゆかしらゑにちかしらの手の中にならひあり口傳有へし

一　はつるとめかしらきるこゝろ也

一　くあひのかしら二つなから同しあち也

一　とめかしらは二つめをつむへし

一　拍子の跡をうつごいふは謠をやりうちにするによつて也

一　一ちやうつゝみの打やう大事なりいかにもこまやかにかろく文字のあゝをうつへしひゝりうたひならはうたひかろくあるへし文字くさりきゝあはせ打へしうたひてあまたにてつゝみあいて有時は何ゝもまきれよく候一ちやうつゝみにてひゝりうたひはやす事たゝおほかたにてはなりかたしあひ手ある時のつゝみのくさりにひきかへ謠のふしを聞わけさひしくなき様に地つもりを面白くいろゝ候事かんよう也

一　あゝへゆくきゝみの事そゝる地には跡へ行

一　前へ行きゝみの事のる地の事但うたひによつてしたるくつまつたるきゝつくろひてうつへし

一　諸藝者共にむねに油斷なくうたひをもつ事第一の秘事也

一　たち曲舞心をうきゝ〳〵ところゝるへしはやきおそきはへたて有へし心はいつれも此心也

一　きゝみの事しこしはすきありこしはれはるゝ一二にましるかしちつきいたす十に四つ三つ大略はをすこゝろこれは金春かゝりなり當流は大略つきいたすこゝろなり

一　次第の地をところ又つゝみをすへるまへ手をうつ時こゝをかけぬ物なり

一　陰の囃の事かしらきゝみ共に出す心也

一　陽のはやしの事かしらきゝみともにつきいたす心也たゝし曲舞一つの中に二いろにわかる心得あり右に申候つる陽の中の陰の事なり

一　天子の舞のれろす所に三段あり三拍子ふみておろすへし

一　舞のはやしに序破急あり舞とむる時俄にとむれは拍子しろなりそりかへす手より拍子をよせてつめてとむればしほよき也

一　舞のうち笛のふきゝめはうたひうつりへなかくひしきかけてよ

しみしかきはしやつきやくなる物なりそのうへ笛どうたひどのうつりそく〳〵なるものなり

一　破の舞きりのうちにまひなんどをはかゝりも有まし破急にてどむる間みあはせて留る也

一　女まひの事ふのちんの事第一のならひ也

一　作り物あり次第一聲の事作り物ふたいへいてさる間はかしらかすをうたす一聲はこしをどさすこれ口傳おほし

一　大へしみ小へしみのはやしの心もちの事大へしみはゆる〳〵どゆたかにはやすへし小へしみはこまやかにはやくはやすへし是はやき鬼なり

一　あくせうはのりてはやすへし

一　つゝみに我ものどいふ事あり人ごとに一聲をわかはやあど御さた候是はひか事なり大夫今いて候か今いつるかのこゝろつくし候へはさらにわか物にてはあるましく候わかものどはやし候は居曲舞の事也大夫仕舞もなくうたひまてにて候間つゝみの曲よりほかはなし居曲舞をわか物どさためたり

一　笛の位調子のふきいたしはうくひすのなきいたすこゝちに似たるをよしどいへり松にしら玉つはきをそへたるやうに御たしなみかんようにに候松はさすか木はこひ候て面白くつよしつはきの花はさすかうつくしくつよしいきつかひの心もちしやつくわくのむしのはこふにたどへたり第一かしましくなき様に吹度よし申傳候

一　一せいにひしく一せいひしかぬ一せいかたひしきもろひしきどいふ事ありしやう出陣さかりはこれらはかたひしきなりひしきのくらゐをもつて其能の序破急をしるへし

一　うたひのうちにいろゐの事呂かんの心持を分別すへし

一　しらはやしは三番にあり

一　はやき一せいはあしかり
一　中の一せいは角田川
一　しつかなる一聲はまつかせ
一　しんの一聲は定家
一　かろき次第は錦木の大夫出侯次第なり
一　脩羅の一せいになかしあるましき事也
一　脩羅のおきつゝみはかしらより打出すへし
一　やこゑのくらゐやつこいふ聲はしたをうちつくるあつと云聲はしたを引入候ゑいと聲はむねよりいつるやこゑはこうより出るいきなりいきこみかんより也いきこみによりやこゑにたよりある物也いきこみ肝要也今はやこゑあまりにたかきはかしましきこてきさみやこゑもひきくかくる也但うたひの調子こころによるへし一せい次第なことはや聲はつきこせねはうたひにくきものに候間たよりゑく候か大

夫のうたひ候所こゑをもひきく音をもひかゆる也
一　おもてによりはやしこいふ事あり其子細は大夫上手なれは不慮にめつらしきたもてをかくる事あり其時は習ひを引かへおもてをはやすへしこれ上手のわさなり
一　むかしは小つゝみここゑおもくありける間よつてしたるし但當世はかろし大夫こしよりぬれはこれをこのますされ共むかしのにつき傳書にははやしをれもく小つゝみもこゑしけし老たる時諸事撰せられたるゆゑにこゝろの相應にまかせしりにたもし少わかき時の囃はこしによつて心にかろくしたかふにより當世ははやしかろきこ申へきいまは世間もかろし歌わかんもかろしあつかひもやすしそれにしたかひ囃もかろし如此侍共今も上手ありてしつかにみちをみちこせはつくへきか當世も上手の手よりいつる事なれは初心にしてふしんをかくへからす金春せんちく觀世音阿彌金剛そうせつほうしやう

連阿彌如此さためをくうへはわろしとも花傳書のおもてにそむくへからす諸藝其人のごしによりてゆする事あり年よりぬれはよろづのけいたもし分別にいはく年よりたるごこゝろかけ藝をかろくすわかきときは藝れもくすへしかくのごとく心得肝要也

一　貴人の御前にて笛御所望あらは呂よりふきいたしねごりをふくへし中人のまへにてはさうのねごりをふく〳〵し但しきをへたて〳〵御所望あらは中の高音より吹へし下めなる人のまへにてはいかにもさうに吹へしつねの御所望にはかならすきれを吹なり

一　小つゝみはかりにて御所望あらはおきつゝみをうつなり

一　大つゝみはかりにて御所望あらは次第をうつなり

一　太鼓はかりにて御所望あらはきさみより打出しうちあけ候也これはうたひなきときの一色御所望の時の事なり

一　うたひは小謠そのけいきさしきに似合たる祝言をうたふなりつねのこゝろかけなくして俄に御所望の時は似合たるこうたひうたはれさるものにて候常に心かけかんようなり貴人の御所望の時はさしこゝをいたすへし

一　舞は祝言のきりをまふへしさしき舞は手をすくなく拍子ふみまはる事なき事也

一　大つゝみこうはいの人御所望からはかしらよりうち出てうちあくる也

一　兒若衆のまへにてはいかにも花やかにうつへし

一　女房衆の御前にてはいかにもけたかく打へし

一　知識長老能化のまへにてはいかにもほけて殊勝に打へし

一　うたひのきりの心持まへの位をれふていかにも手をすくなく打へしきりにはあまりに手はなきものなり

一　大つゝみに二段かへしこいふ事ありあまこ當麻にあり

一　うかひの大つゝみ大事のなかしありならひある事口傳

一　ひやうてう返しの笛三番より外ふかぬなりむかしは江口に吹たり近代如此

一　時によりひかきに乱拍子ある事あり

一　ほうゐの舞の事乱拍子の乗物なり口傳

一　なかす事女の舞に一つ物狂の二句に一つ入はに一つ三ところにはしかし

一　當代のつゝみは我位をしらてあられぬ手をうちむくうにたくみてうつ二三番まてはまきれぬれともつめてはこゝしけゝれはせわしなしせわしなけれはかしましかしましけれはきゝにくしけいこを肝要にすへし

一　くれはの大つゝみに三つかしらといふ事あり口傳

一　舞は五段にさたむさしきにては可然候昔は三段に是をさたむ當代あまりみしかきとて五段にこれをさため五七五七とて五せつの舞あり是を九つにわけて九十のはやしともいへり九つといへは序に序破急あり破に序破急あり急に序破急あり如此なれは九つなりかやうにくつして打へしたゝきのふはうすき四方のもみちはと定家のくちすさひ給ふことくこれを九品の淨土にかたとりて菩薩の舞あそひたまふ事五節とて五段也かけこゐはさつ〳〵也極樂のらくの字也

一　あひ手よりむつかしき事をうちかけは本順をうつへし順にはつれはひたう也

一　遠近の心もち見物のことをきをえんといふ又ちかきをきんといふことをきをちかきやうにはやすへしちかきをことをきやうに囃すへしこれならひ也

一　かく屋よりわき大夫にても天女龍神にてもいつるをしる事はしかゝりを見候ては曲なし見物衆いろめくかほをみてこれをしれ

さりなから衣裝おもてをみねはくらゐをしりかたし一度そこ見へき也

一　ふみこむる一せいふみこめぬ一せいこいふこゝありにもしろや月海上にうかんてなこゝいふはふみこむるなりか樣のたくひれほかるへし是をもつて分別すへし

一　笛小つゝみ大つゝみ太鼓うたひいつれにても其内の上手を目かけて位をしれ

一　殘りの役者われほこなくしための人ならはわか位にまかせ殘りをひきたつへし

一　われよりしための役者ありこいふこもうちかさむやうには無益也笛大鼓いつれも同前

一　兩座のつゐの能の事うきふねこ玉かつら弓八幡こ高砂しらひけこねさめの床錦木こまつむし

一　祝言のうたひのやこゐはりよかんかけへし

一　物きの中舞にもあらす一せいにも次第にもあらすみつ〳〵このらてうつ也むすふ手をうたすをしへのかしらこいふ事あり口傳是にも眞草あり能により心もちはいろ〳〵かはるへし

一　天氣よき時は笛なこ調子かりめになり囃も少はやくなりたかり候又天氣あしきこきは調子もめる人のこゝろもしめりあたりうきたつこゝろなしつゝみにてうきたつやうにはやすへし天氣よしあしきの心持なり

一　つゝみうちきるあひたに仕舞あらはつゝみのその心得をなすへしつゝみのうちきりの間に大夫立ここおほきもの也もしなにこそこりまきれ大夫をそくたつ事あらはつゝみまたうちかへすへしなかきみしかきは仕舞によりみあはすへし同しく二三人いつるわきなこ又あいのうたひの時たちあはるこころそのうちになにこそこりまきれ

をそくたちまはるつれあらはをそきをほんに待あはせうちきるへし
ゆいのうたひなとはつゝみより打かけ候うちにたちならふその時み
あはせうちきりてうたひいたさするなりこれにも又立ならひをそく
たちまはらはまた打かへすへしかやうの見あはせかんようなり
一　七騎落盛久元服曾我こうほくいつれも同前これいつれへもわた
るへし
一　をしほ西行櫻次第のこゝろ此類は何も同意也
一　太鼓大つゝみ小つゝみに身のよしこゝろのよしこいふこゝあり
手をうちあちあるこゝろによしあり右のよしなく候へはしほにのら
ぬ物なり又あまりよしすき候へはくせこゝみへ候物也かやうの心かけ
かんよう也よしのなきつゝみは佛つゝみと申てきらふ事也其うへき
かなきもの也よしすくれはしほからく候かけんか樣の心かけ肝要な
り

一　れんほの祝言はあしかり戀の物狂うき船班女花かたみなり是い
つれへもわたるへしまたものくるひに候て百萬三井寺のやうなる
こゝには中々あらす是は心もちをあまりしんに心得ぬ習ひまて也但
又右の内に花かたみはこゝろもちかはり候なり
一　哀傷の中の哀傷と申は角田川水無瀨昭君のまへ松の山かゝみの
まへこれらのたくひの能にて分別すへし
一　哀傷の中の祝言の能竹のゆき谷行熊野參あゐそめ川なり此類の
能是をもつて心得へし
一　しんの乱曲と申は東國下西國下隱岐院島廻なり此等の類のうた
ひ是をもつて心得へし
一　幽玄の能をしほ西行櫻ゆやこれを以幽玄のたくひの能心得へし
一　さうの亂曲老松の曲舞東岸居士の曲舞なり是を以このたくひの
囃分別すへし

一　きやうのらん曲しらひけの曲きさきそろへ先帝の身なけ此たくひ也是を以此くらゐのゝう分別あるへし

一　祝言の能相生難波の梅也是をもつて祝言ののう此類分別有へし

しうけんの第一と申は聲をもいらりと祝言をふくみきほふてかくへしいかにもはなやかにたくさんにうつへし去なからおもしろからせするりこうつへし

一　幽玄は物にたとへは花山を出て家路をわすれ廣林珍景に至て日をくらすこゝしいかにもゆうにはなやかにはやすへし祝言に少かわり候はきほふてものつよきこころをやはらけれもしろき曲をなすへしこれ幽玄の本意也よく心得へし

一　れんほのはやしの事以前の幽玄のふかくなりたる也たとへはゆうけんは春のあけほのに似たり此戀慕は秋のゆふへをのそむかこと月の夜のくまもなきに草中に蟲のこゑかすかに物すこくきこえ深

窓にもり入月影まてもいとすこきやうなる心持なりいかにもこゑなともつよくかけすれもしろく心持の相應にはやすへし手なとをこまやかにうつくしき手をうつへしうたひにたもしろき曲は此れんほに有へしよく心得難へし

一　哀傷のはやしの事たとへは春の花の秋の紅葉みなちり〳〵になりはて〻野山のかせ物すこきこゝろ也いかにもうれへをほんにむねにあてはやすへしやこゑの位うたひのきんに相應して哀傷にかけへし手なとをもかしらたくさんにつよき手又花やかなる手はうたぬ位は陰のくらゐ也よく心得へし

一　蘭曲此曲は大事のはやし也いつれもと申なからとりわき謠を流通すへしつねの謠にふし音聲吟文字うつり句つきこと〳〵く替りのへちゝめの寸むつかしくよくこゝろもちてうつへし乱曲によりてほん地にゆき候はぬ所多しよく心かくへしあとさきをひつとり中をひ

をもうたす大鼓しつめかしら落すへし笛吹しつむ事を吹へからす

一　わたましの笛は調子双調ひの聲をいめは太鼓はなかす手をうつへし口傳ならひあり小つゝみおつの手を打へし笛ひしくへからす

一　たきつゝみの事名乗る人の位によりうつへし能々心得へし公家殿上人平家の一門源氏の一門なとはかしら三つ四つもくるしからす又御代官の御奉行のなとは二つすみやき舟人きこりなとは一つなるへし

一　一せいの笛に四日に一度吹手ありわきのうのまへの一せいにあり口傳

一　江口のふねのあひしらひとい事あり口傳

一　吹返しといふ事笛にあり是はたきゝの御まつりの時立あひの能あり其ふきかへしに似候なり口傳

一　笛舞のうちの手初心なる大夫の舞のときはたんを打切やかて吹へし上手の大夫ならは大夫のふりを見合手の吹所あるへし

八拍子　次第三に分たりしたるきはまつさきたつ」

○　第一のはしたるし先立也

●　おちつかぬなり

○　第二たましゐのなきかことし

●　無味なり

●　第三はかろしおちつくいきたる物のことしはたらく拍子なり第三のひやうしもこもりたるあひた三拍子そろひたる上手の拍子也

●　かろきにあらす

●　さきたつ也

○　中ひやし

●　取なしおち

○　つくひやうし

○　かろきひやうし

●　はつめひやうし

○　つき出ひやうし

○　ともも

一　のうの位の事いかにきうの能なりとも大夫とこしよりならはは

しのこゝろもちなるへしいかにならす此分なりとてもならひのこと
くにははやさぬ物也いつれの事もあらひはむねにあて當座のきてん
かんよう也

一　貴人の御うたひなとはやす事あり其時は貴人のうたひ下手なり
ともそれにつくへし又拍子かたなとなき人なりともこなたより初心
と見かけをし申やうにははやしかけぬ物なり貴人の御謠のはやしや
うなり又一座の大夫も其分也座よりあてかふことなし惣別すこしは
やうたひをもうたひ候人につゝみよりをしへ候やうに打事殊外のふ
しつけ也

一　つゝみをかゝゆる事は上手の名をとりたる人はかゝへてもうつ
へし是はかへりみて初心をわすれぬなりたもしろしかゝへもせす手
をうたすつよくほけて打事成かたきもの也

一　藤戸是は色々有此体を心得て囃すへし口傳

一　大臣のなのりかいこと似たり

一　山伏の名乗は半俗なれは心得てさうのなのりしとけなしかしら

一つ

一　いつれの能も大夫の舞處はかろくさく〳〵とはやすへし地うた
ふへしさしきにつゝみはかりのはやしやうには囃うたはぬ物なりな
らひに大夫きり〳〵と舞候所うたひの内うたひすゑには打きりなと
せぬもの也大夫きうにまふ所はつね二つ打きり候所ならひ一つ又一
つ打きり候所習ひうちきらす一拍子にてやり候て尤に候か様の心か
け地うたひはやしてかんよう也又いはく大夫きうにつめて舞候て舞
とめいかにもしつむる能ありあふひのうへのうちのせかくれゆかふ
よ〳〵かやうの所うたひしつまられは大夫の中入あらす地うたひの
肝要也同しく八島のいそのなみ松風はかりのをとさひしくそなりに
けるか様の所前かと大夫きり〳〵とはたらき俄に靜むる仕舞あり此

能にかきらすかやうのたくひおほし是をもつて分別すへし何時も大夫に目をはなさす心かけ候へは大夫の身のふりに有物にて候はやし地うたひの見合せかんよう也たとひつねにしつめぬ所なりとも大夫の仕舞俄にしつめは囃うたひおほきにつよくしつめ候物か樣のこゝろかけ肝要也

一　唐船はしめは義理かくは祝言きりも祝言
一　女の龍の事破のはやしなり
一　天皷これは破の急なり
一　さほ山祝言はの破のはやし也
一　西王母祝言なり破の能なり
一　道明寺しとやかにはやすへしきりは破なり序破急のはやし也
一　岩舟玉つ島序の能なり
一　小つゝみ大つゝみはりたる皮にてうつ時の心持たるみたる皮にて打時の心もちの事まつはりたる皮ならは小つゝみはきさみかちにうつへし惣樣のたくいかならすはりたる皮にては必ききたつもの也のる事有間敷候其心得かんよう也したるくなる物なりかやうのこゝろかけまへかとより分別候てあしき道具にて俄に人の御所望あり共其心得有へし手かましき事をうつへからすまたたるみたる皮にてはなり物かならすしたるき物也其心得有へし又よき比の皮も夏と冬とにてかはる物也おなしく雨の日天氣よきときかはりありかやうの事よく心かけ肝要なり又ふるき皮なとをいたはり候てはつしなとしてをきいれ候時俄にとりいたしかけなとすれはよき音は出ぬ物也とかくよき音いつる時をうしなはしとせう〳〵にてはつし候はぬ事最に候音の出さる時はつし候て色々にてうはうをして見る物にて候とかく我かゑ道具にいろ〳〵心をつけたしなむへし手にあはぬ道具にて稽古をすれは手前つねの半分もきこえぬ物也返々なり物のたしな

み肝要也

一　太鼓のはちかろきはちれもきはちの事かろきはちにてはほんの音いつましきなり其上拍子さきたつへししかるによつてきりの本なことはあしき也またおもきはちにてねいろかたかるへし

一　ふみこむる一せい眞の一聲さうの一聲行の一せいのる一せいのらぬ一せい中の一せいしつかなる一せいかた一せいか樣にいくいろも一聲の數ありいつれも出ものにより鬼のいつる神の御いて佛の御いてあるひは天人公家上臈中の女いやしき女物狂木こりすみやき船頭さふらひ公家それ〳〵の一せい心持によりてちかふへし心得へしよく〳〵口傳けいこ候てこまやかにはやしわくへし祝言の一聲れんほの一聲ゆうけんの一せいあいしやうの一せい亂曲右のこゝろつけ候てそれ〳〵にこゝろをはやし分へしやこゑの音聲まてそれ〳〵に分へし

一　戀のおもに　右　武文　右　一　楊貴妃左

一　あやのつゝみ右　一　たかやす右　一　羽衣　左

一　誓願寺　左　一　二人靜　右　一　吉野靜左

一　うねめ　右

一　陽の中の陰はゆや千壽の舞也

一　小つゝみ大鼓にかしらあまりちからをいれてたかくつけぬ物なり小つゝみはかりのかしらはきこうつへし

一　大夫のうたひのうちかしましき事わろき也おつをひかへてきさみひきくしんにいれてこゝろをいさめかる〳〵と囃すへし音曲をはやすにうたひの文字くさりのへちゝめを心かけてよせうたはて音曲いふへしと心得又のへてうたはてつゝみをよすへしとおもひ少のうちにも序破急の心をかけて囃へし

一　作り物出は作り物の舞臺へおさまり候はぬ間は骨をもおらす手

をうたす候いかにも〳〵心かけて打へし油斷のかたにて皷したるく
なる物也むねにならひたる坊主の姿を思ひ出し候へはたよりあるも
のなりいかなる物の上手にもくせは少あるもの也そのくせをはにせ
へからす候くせはやくにる物なり但くせを思ひ出し候へはそのた
より有物也くせをは似せへからす

一　破の能はのふはしまるより心に破の心をもちていさむこゝろ
にて囃へし

一　うたひの拍子にものらすしてうはかふきにゆき候はゝ手にては
しめぬ也心にてしめ候なり又したるきうたひをも心をいさめ手にて
急候へはつゐにおもしろき事あるましく候いかにも〳〵こゝろをは
こひ候か肝要也はやき事をはこゝろをゆうにしつかなる事をはこゝ
ろをいさめはやすなりはやき事と思ひてはやくうち候へはうはかふ
きといふものになり候物也かた拍子ともいへりしつかなる事しつか

なるこはかり思ひしつかにはやし候へはたるむ拍子にて候哀傷こい
ふ拍子なりかりそめに油斷なふけいこ有へしけいこをはれこしはれ
を稽古にと云事候へはいつもたしなみかんようなり

一　うたひのうちはやす事文字の跡を囃すへしいかにも文字にさは
らぬやうに囃事肝要也

一　下手の謠はやすへし是も一つの習ひのうちまへかこの用心手か
ましきことをうたすろくにはやして其相應にして置へしいたらさる
つゝみうちのむりにのせたかりしほにものらぬ手を打たかり候事第
一のひか事也

一　一さいのはやしにうちあけ舞こめかけりなと大夫も舞留さるに
つゝみうち見そこなひ留ることあり笛功者ならは吹こをすへし又大
夫舞こめ候にみそこなひ打あけぬ事ありその時は笛より吹こむへし
もし笛もゆたんして吹こめすは謠よりうたひいたすへし

一　物狂のはやしさうにたくさんにはやすへし但物狂によるへしたつこにわかれ子をうしなひなこしたる物思ひの狂人はあはれにはやすへし

一　中入に大夫はしかゝりをもこる時はやしも謠もすきてかへりにくき物也これを笛にていろゐ大夫をかく屋へもこすへし中入の笛相應のねこりふくへしかんようなり

一　おつかちにうつもみゝかしましき物也乙をひかへ時々らんもんに打へしいかにも〳〵なかき手はきらふ也大つゝみの手のうちよきやうに心かけ手をうつへし爰に手ありこて大つゝみのくさりやうをも心かけすしてわれひこりこゝろをかけてきをゆるしうちてはうたぬにおこるなりおつかちに囃きさみのたかきも能によつてはやすへしたこへは鬼ののう又はおここ舞或はかつこのわきの能の舞のうちなこ乙かちにきさみ高きもくるしからす候かやうのたくひ心かけかんようにて候女能なこにもさのみかしらにここをいれす尋常にはけ〳〵こうつへし

一　れもてはよはきふりをしてけい能のつよき事をほむる也をもてをはまんしをなしするわきのよはき事返々もほめさる事なりかへす〳〵もしたるき事はまんするこころにより油斷出來候によりしたるくなる物なり手のうちたき事は當座にれもひ候により手をうちたきもの也當座の花をもちてしるにもしらぬにもほめられたき物也去なから道をしるものはきゝわくる物也當座の花はあれこもつゐの花なき人はつゝいてのうしあるましきなりよく〳〵こうあんあつてすゐこけて人のほめ候やうにたしなみ肝要なりけいこしれほえてうたひの文字のくさりに似あひたる手はれなし手なれこもそたちてれもしろく感あるものなり

一　乱拍子の事拍子をつなかぬはやしにて候あひた乱拍子こもいへ

り和歌をとるまへは序也あけはよりはちん拍子也拍子の名をはたく
あるつゝみ共いへり如此打也

ナ○ナ○○●○ナ○○ナ○○●ナ○○

これをくりかへし打なり乱拍子數の事に候道成寺次第あり花の外に
は松はかりといふよりしてこゝろをいかにも〳〵しんに乱拍子の心
をもつへし同音に次第をとる時につゝみらん拍子なり大夫の一めく
りまはりて後はあふきをとりあけ候時うちあけ候也道成寺とはなつ
けたりと云所にて本に打あけ候也またやまふしいのりのうちいかに
もつよくたくさんにはやすへしいかにもたそろしく物すさましくは
やすへし序破急のいのりなりきんせい東方のうちあけうたひ出しわ
きの仕舞よくこゝろをつけへし

右以上二百三ヶ條の極意此卷にかきしるすなり末世にならひと
なへうしなひ人々の申度まゝに諸藝のみたれ候はん時のせうも

んのため此傳書をかきしるされ候いかにも秘密して家を繼子の
外は見する事なかれかやうの秘書ど申は人をよはさるをもつて
秘書とす古今の名人の申つたへ候ならひ大事おほかに如此

せあみ

それ能といふ事大夫を花のしんにたとへ役者を下草にかたどる也
大夫は一座の大將花のしんなれはいかにも〳〵下草より威勢のある
やうにもてなすへしまた大夫より下草へ相應するやうに心得へし大
夫諸藝をうかへすして一道はかりにては花のしんとは成かたしよく
よくよろつのみちくらくなき樣に心かけへしまつ能といふ本意はれ
もしろきを本とすしたてみくるしけれは見ところなし衣裳のきやう
ゑもんあしけれは其姿みられぬ物也たとひ上手たりといふ共したて
あしけれは身躰に花さきかたし上中下序破急の能の位をほんとして
似合たるやうに出立候事かんようなり
一　天子の御事は申に及すみやたち公家の御うはさを作りたる能の
出立いかにも〳〵けたかくいてたつへき事かんようなり
一　女御かういの其外公家上臈の御風情作りたる能出立の事いかにも
〳〵け高くうつくしく花やかにいろかさねに念を入出立へしまつう

はきはからたりを本とせり大内上臈なりともうねめなとは又位さかりたる宮女なり心得へしからおりなとは無用也揚貴妃取分からたり本也大夫三十のうちくるしからす年よりたるしてはこれを斟酌すへしその子細は年よりぬれはつまはつれ見入身なりすかたかゝりまてわかき時にちかひいやしき物なりかたく斟酌尤に候付若き大夫もころなとにはつれ身なりあしき大夫はこの能斟酌尤に候

一　物狂の出立ちかきところよりきたる物狂遠國より來る物狂ちかふへし遠國の物狂のいてたちはちとふるき小袖然へしちかき物狂の出立はあたらしきいしやうくるしからす候惣別左樣の人は衣裝を色とりかさりはきとしたて目にたつ小袖無用なり

一　舞候老人の出立いかにも〳〵くすみたるいろなしの小袖もつともに候さりなから上いろなくはしたきは少色とるへし小袖の色によりはゐあひ候やうに出たつへし但上の裝束によるへし能によるへし

一　ひた面の出立の事いかにも〳〵下を色々と出たち候て上をくすみ下かさねに取あひ候やうにいてたち候事肝要也去なから人により其身に似合たる小袖あり又にあはぬこそてあり事みあはせかんよう也又大夫のとしのほとらひにもよるへし

一　旅僧ひやくゑにてすこしほれたる水衣に候

一　一夏をむすふ僧或は住所の僧みやこかたの僧はいかにも〳〵引つくろひゑもんたゝしく水衣小袖はきとしたるをちやくすへし

一　僧都法印阿闍梨上人なとの僧はいかにもけたかく尋常にひきつくろひいかにも水衣もはきとしたるを着すへし時により大口きる事あり

一　草のせい木のせい其外へんけの物のふるひ出立何と出たち候てもくるしからす

一　鬼の出立いかにも〳〵ゑりおほくかさねをもあつく出立候事か

んようなりいかにも〳〵あかくいろ〳〵と出立候なり

一　神のうかりきぬあかくはうわきいろなし下かさねはいかにもいかにも色々と取あひはえあひ候やうにいてたち肝要なりかりきぬ色なしならはうはきはいかにも色々しき小袖尤に候花傳第七囃の巻にもいろのはやしとかきつくるも此理りなり

一　面のかけやう高砂弓八幡なとはしめは尉の面後は日にかねの入たるはやき男の面なりさりなからよきはやしそろひたる時はすちのめんなときる事ありすちおとこのときはくらゐなを急なるへし

一　天冠いた〳〵く能はそうのおもてなり但菩薩の能ならはていかんの女面なるべし付うたひの位によりて又ていかんきぬ菩薩あり

一　通小町藤戸あこきうとふにしき〳〵いつれも靈のやせ男なり但右の内にて通小町は面の心もちかひ候其子細は公家也深草の少將戀にやつれたるかほなれは面けたかきをもちいる也殘りはいやしきれ

うしなとのうき世のわさにやつれ死たるかほなれは面に其心得有へし是はれほきなるちかひ也いつれの能も位を分別し上臈下臈をわきまへ其年比まても分別をとけ似合たる面可然也衣裳のきやうも同前なりまた錦木はすこしちかふ是はあまり下らうにあらすそのうへ戀路にて死たれはかよひこまちうとふのあひた也

一　定家ひかきそとはこまちあまのち何もやせ女なり去なから定家は式子内親王ひめみやにてまします間かほはゐけたかくやせたる面なり卒都婆小町ひかきは少いやしくやせたる面しかるへく候何もいやしき能にはあらねとも式子内親王にはくらへかたしひかきは白拍子也其上とこしよりなり小町ははしめは宮女なれ共年老て狂亂となり乞食になれる女なり海士の後は龍をいたゝき候へはつねのやせ女にてはとりあひ候はす候いかにも物すさましく目かね入たる女可然候此心もちいつれもへわたるへし

一　草木のせい其外はけ物のふるひごきによりいしやうによりはやしてによりおもてかはるへしさたまらす

一　道成寺本なりのしやめん鐵輪なまなり可然候あふひの上は中なりのしや面尤に候

一　せうの面の舞能はいつれもいしわうひやうゑしかるへし

一　ゆやはこおもて也

一　松風はふかいれもて也

一　鞍馬天狗後へしみ也またあくせうきる事大へしみ大あくせうのはやしわけ大事也出立まてちかふへし

一　うかひ照君後大天神なりまたこへしみきる事もありさいたうの鬼なり大夫の心もちせうくんにすこしかはる也

一　龍神のふるひくろひけ也

一　ふちとの前にやせ女きる事あり又うはの面きる時もあり大夫のこゝろもちそこちかふへし出立もすこしちかふなり

一　かなわの前あふひの上の前の面のやせたる女の物おもふけしき有て其さますさましけにて目もとすこき女面をきる也

一　物狂のふるひ能によりてちかふへし大方のことりは女物狂なら

は少としふけたるかほの少やつれたる面尤に候

一　難波の梅京かゝりはやおとこにて候たうかむりにて破の舞なり余の座はあくせうをかくるもありあくせうの時はかくにまふ也出立ちかふへし

一　さねもり前せうなり後わらひせうなり

一　とほる前わらひせう也後中將也

一　たむら前童子なり後はやおとこか三ヶ月也平太はかけぬ也田村は祝言の脩羅なり平太は祝言にかけぬ面也わき能なとにかけ候事大きなるひかことなり

一たゝのり前わらひせう也後中將なり
一女郎花同前也わかおこくるしからす
一八島みちもり前はわらひせうもよし小尉もくるしからす後はい
つれもはやおこなり平太くるしからす
一つねまさ中將也わかおこくるしからす
一よりまさはしめはわらひせう後は入道の面
一うねめ前はふかひめん後こおもてなり
一あつもりちこのめん也
一春日龍神前小せう也又ひた面にてする事もあり小せうにさたま
らす後くろひけなり
一せうくんの前小もう後はいしわう兵衛
一遊行柳前は小せう後はいしわうなり
一御惱楊貴妃前は小せう後は大天神なりへしみきる事もありあく

せうもよし
一しらひけ前はあこふせう後はあくせう也
一あらし山前わらひせう也後大へしみ大天神も可然候
一竹の雪ふかい面也哀傷の祝言なり
一善界の後大へしみ後大會同前
一定家の後ふかひ面なり
一三輪前ふかひめん後こおもて
一唐船わらひせうなり
一あこきの前小せうなり後やせおこ也
一夕かほ前あふみの女後はふかひめん也
一籠太鼓ふかいめんなり
一東方朔前わらひせう後あくせう也
一うきふね前あふみの女後ふかい面なり

一 玉かつら前あふみの女後小おもて也
一 野のみや前あふみの女後ふかい面なり
一 江口まへふかい面のちはさう也
一 紅葉かり女面ならは何にてもくるしからす但ていかんますかみ
女は無用也のち鬼
一 ぬい前はやせおとこのちさるとひて也
一 やたて賀茂前は女後大天神くろひけ大とひてくるしからす
一 舟弁慶前こおもて後はあくりやうの面也
一 あさかほさうのめんなり
一 うの羽前はこおもて後はていかん也れうをいたくくときは目かねなき面にては龍いたたかれすはやしもちかふへしすこしすさまし
きめんよし
一 あまの前ふかいめんなり

一 張良前もせう後大あくせう也
一 當麻前はうは後ていかんなり
ゐつゝますかみの面なり
一 はころもそうなり
一 寢覺のとこ前あこふせう後大あくせうみもすそ同前
一 うとこふの前小せう後やせおとこ也
一 をはすて前はあふみの女後は老女のやせ女也
一 佐藤次信平太なり
一 かねひら前はわらひせうのちは平太
一 軒端の梅はしめはあふみの女後小おもて也
一 自然居士東岸居士大喝食也
一 花月はこかつしきなり
一 千壽ふかい面なり

一　はせを女面いつれもくるしからす

一　源氏供養前これもて後も小れもて也是は面かへすれなし面前後きるゝ子細ありならひありその面影はきのふみしすかたにいまもかはらねはさいふ儀なり

一　御前能の事大都貴人の御前のけいはまつ萬人の御かたへ心をよくつけ候へはかならすしそこなひなしたゝへはわかおほきみのくになれはいつまても君か代になゝいふ所は貴人をうやまひたるふせいを心にもちまた手向をなしてかへりけりいたはしの御ありさまやなゝいふ所はつねには上面のかたへむきする仕舞ありさいふゝも御前なゝは是をよけ候也か様の分別よろつに渡るへし是第一御前の能の心持也足拍子たくさんにふむ事慮外なり貴人のかたへうしろをむけ候事同前也惣別つねの能にも上面へはうしろをせす又御前の能にも大夫舞臺をおりて御前ちかくまふゝとあり其時の囃一大事なり

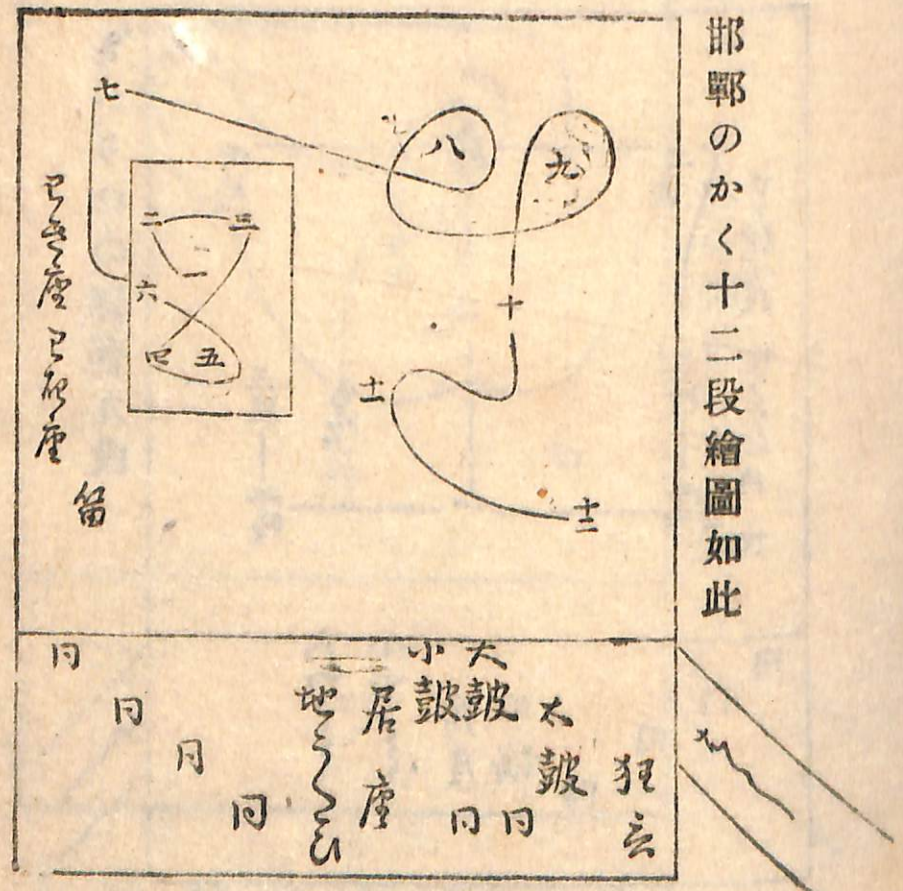
大夫のゝをさかり舞ゆく程たくさんにはやすへし位ちかふへし能口傳あるへし万御前の能諸事心をつけ候へは時にいたりて出來かんある物なりわきつれにいたるまて右のゝろかけ御前にて肝要なり其うへさしあひのなきのうをよく組合候はん事せん也二日も三日もまへよりそのうを吟しくり返し〳〵くふうしてさしあひなきやうにゝろかけ肝要なり御前の能にかきらすいつかたにても所へさしあひ亭主へのさし合を能くみの時油斷なくかんかへかんしん也

一　郡鄲のまくらにふしにけりといふゝろ枕にふすなりねすかたねいりたる風情大事なりその時も目をふさかされは寐姿わろし目をふさく事ならひ也

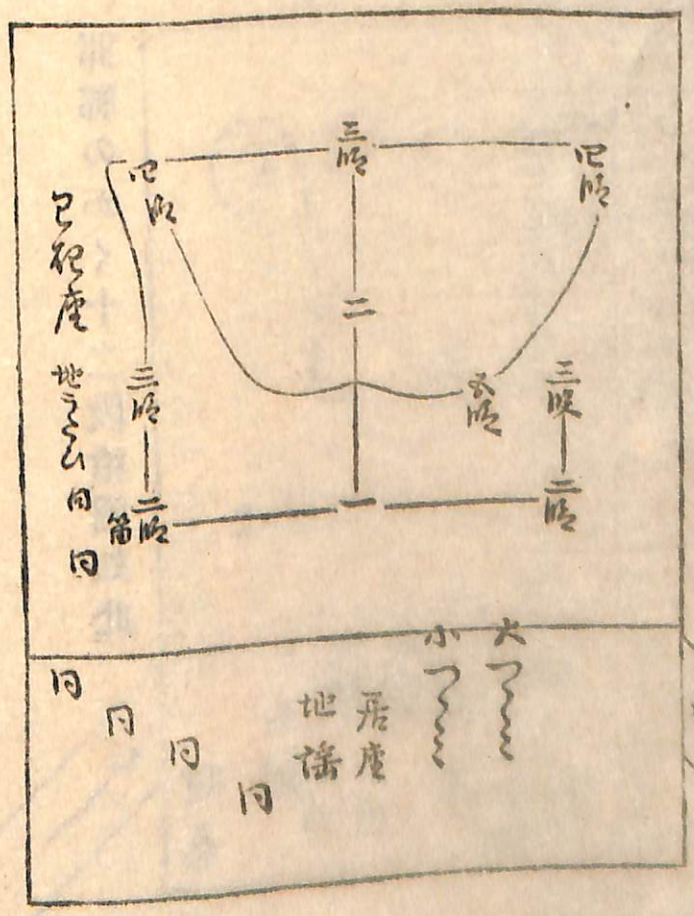
一　かんたんのかくの事くわらをゝり候ゝき笛の序ありたゝみの臺のうへにて序破ゝ舞たいををりて破急ゝ舞ろせい舞の姿をしらさる也三段を二段にかへし笛のならひあり大夫も其心得あるへし十二段

のかくのまひどころ繪圖大かたかくのことしいつれもこのかくなら
ひおほし大事のかく也よく稽古肝要なり第一なかきかくなれはまへ
かと其心得なくはすゑたるみ候か又つまりすき候事あり其こゝろか
け舞出し候時より分別してまふことかんよう也井屋臺の内にての舞
大事也ちいさく舞ては曲なしたほきに舞候へは作り物につかへ候其
分別肝要也

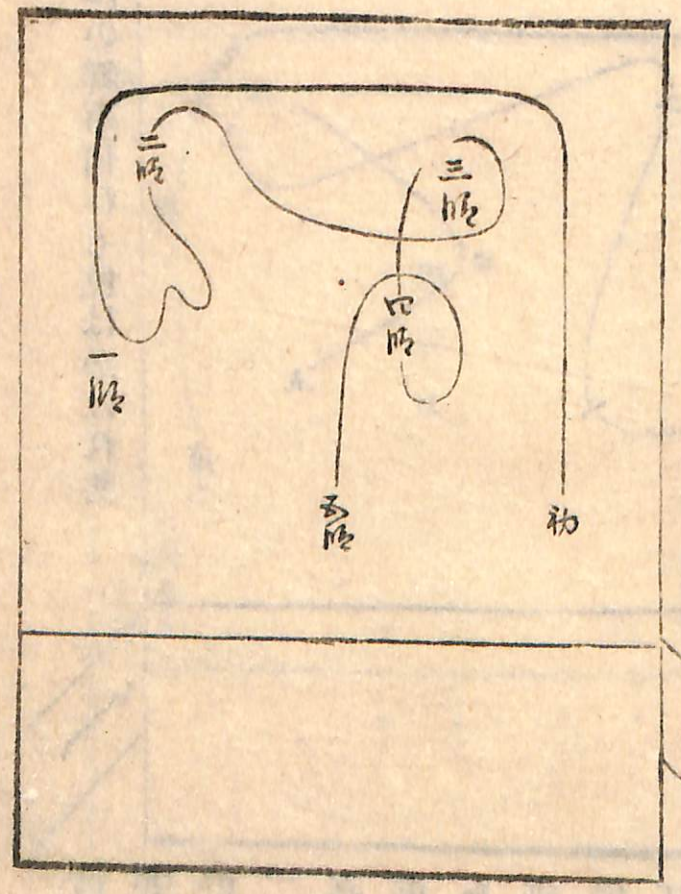
邯鄲のかく十二段繪圖如此



さかりはの舞合九段

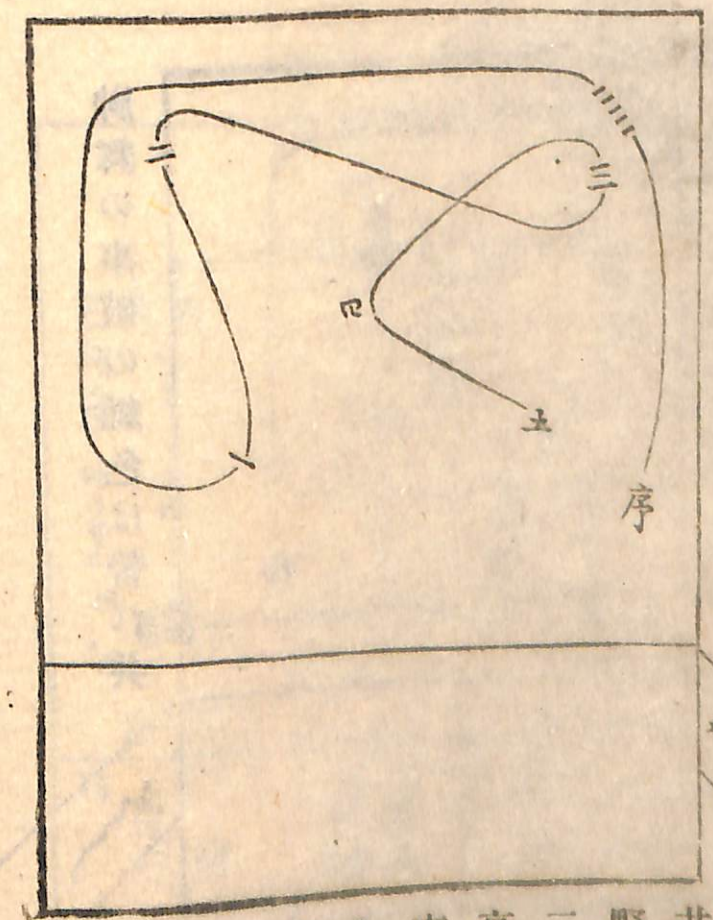


神舞の事破の舞色は替れ共



高砂
くれは
難波
弓八幡
ふし山
鵜羽
姫小松
ふしみ

序の舞事何れも色はかはれ共



芭蕉
井筒
野の宮
二人靜
高安
東北
をしほ
班女
定家
江口
朝かほ
うねめ
誓願寺
夕かほ

八 三段きう

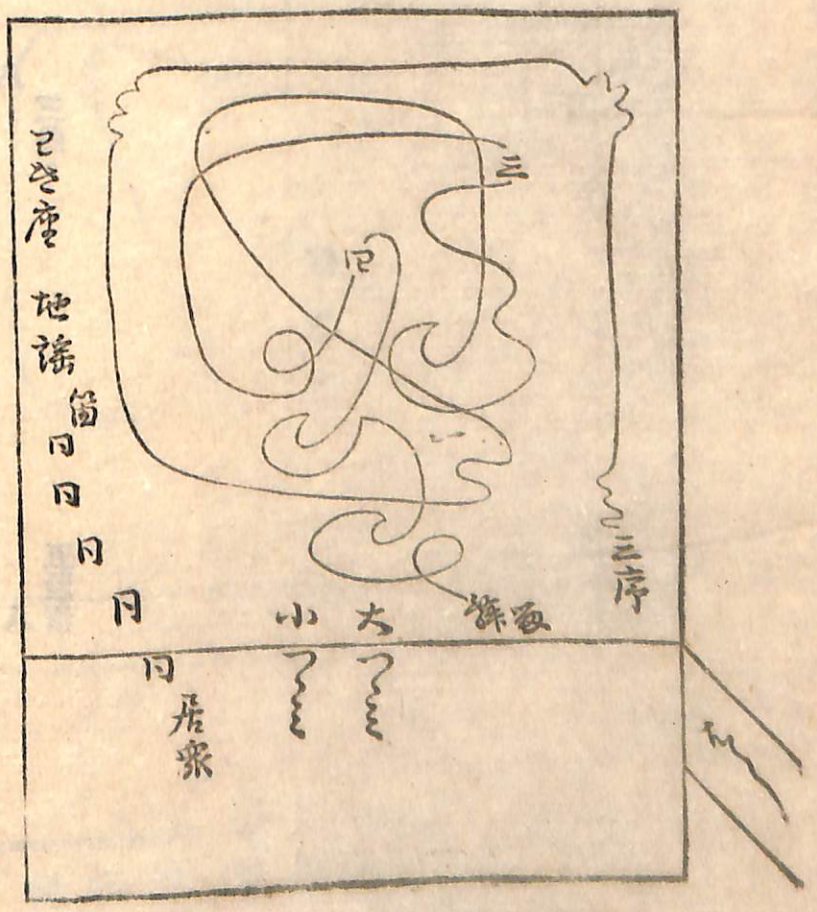
八 五段留

八 二段

八 一段之よ

四段は

錦木
松むし
小河
正つら
安宅
但あた
かは大
聖舞と
て舞の
心少ち
かふ段
は同物也

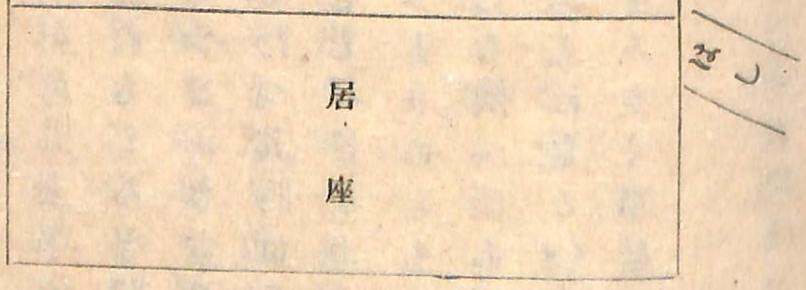


つねのさうの破の舞

三段　舞出所能による一段

二段

四段



一　舞のうちにそらたちといふ事ありこれはけいこにて成かたし自然のこう深く行たる大夫の上手こうをこうむらさらん人はなり候はぬ事也其うへ囃なと下手にて中々なりかたし上手のそろひにてはやしものり仕舞も折にふれたりと大夫心れもしろき時たつ物なりたさへは楊柳の春の風に一もみもまれてさつとふきなひけたるとくにいかにもたをやかにさすかしなをあらせたつ其時はやしも大夫のふりを見てせいを入猶のり立ていと心おもしろけなるおりふしまなこをふさく物なり目をふさきぬれは心しつまりあしもこさたまりすかたたをやかなる物也まためをあけ候てたち候へはあしもこさたまらすこしすはらす心しつまらすすかたもふしほなる物也其うへたちていらぬ物にて候そら立にのりたるこめをふさく事是一大事の秘事なりならひなり

一　まくきはの習ひ女の類はまくきはより五尺ほこもへたていて候

ふかき上らうほこまくきはをへたつへし狂女はまくをへたつへからす序破急によるへし

一　はやをこと三尺はかりへたて候

一　鬼むきはまくをあけ候こやかていつる也

一　いつれにても序と申はまくきは遠し破と申は中頃急と申はまくちかき也

一　まくのうちといふ事ならひあり是出る時のかほのもちやう也出さまあさまなれはその能はてゝまてふてきなる能也出さまさつつへけれはのうしんにしてのちまて能出來候ものなり是第一のならひ也先まくきはにのそみてさて身なりをなをしかほもちをさためこしをすへこうつくりをかまへてゐもんをひきつくろひさてまくをあけさせて出候こき天地和合左右の目つかひこいふ事あり出る時こを〳〵と見渡し候へはしはゐうちみへ候なりまたあしもこをそこみさてや

かて左右をみて目つかひをしかほもちをさためていつるなり鬼なさはなをあら〳〵さまくのうちをするなり一せいにてもあれ次第にてもあれ何ほさゆきいつくにてうたひいたすへしさ其時はうしさしさころむねにさためて出てうたひ候へはしそこなひなき物なりよく心得へしみしかき橋かゝりなかきはしかゝりの心持つもりかんよう也

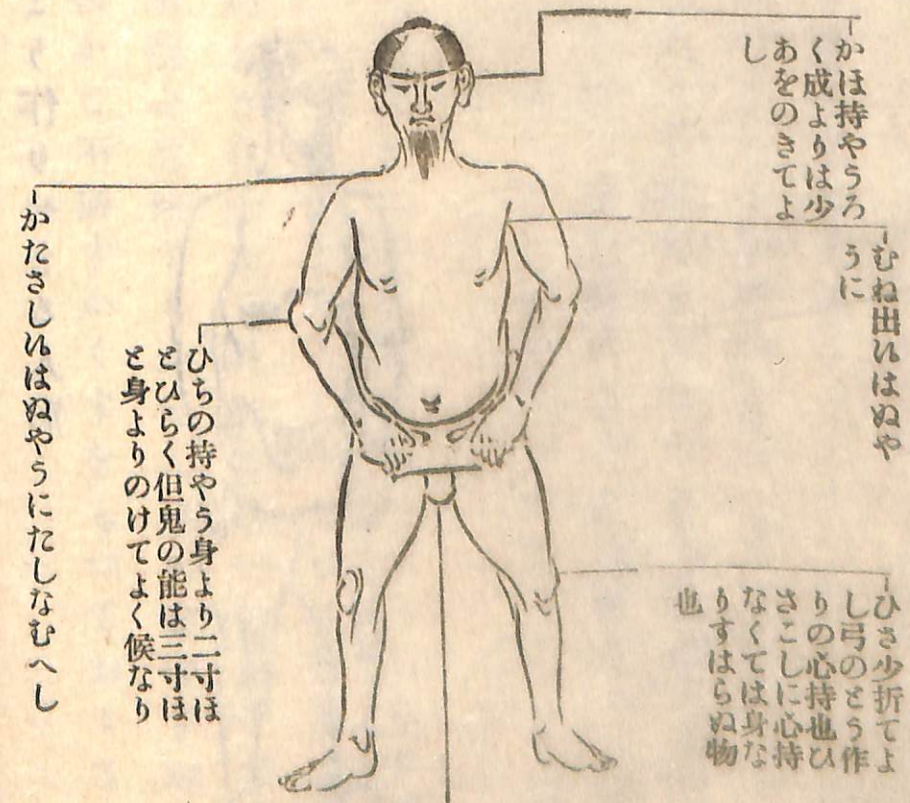
一　一聲次第なしに出る能つかひぬけ候はぬやうにこゝろかけかんよう也

一　此繪圖共いつれもはたかにすかたをあらはしふしのつめやうこしひさのおりやうくひの持やうを〳〵くあらゆる身かまへさうつくりかきしるし侍る也此まき我子より外たさひ一の弟子たりさいふさもみすへからすとに繪圖を見候てもかてんゆき候はすかへつてみくるしく候へは是か秘書かさ不審すかくすをもつておくさすいつれも目の前の事也

さう作りせさる人形

如此さう作りせす候へはこしうきひ
さもすはらす候によりひやうしふむ
音もわろくかうかみはりこしうきて
身なりあしく候なり

此こう作りにては身
なりよく拍子ふみよ
くこしすわりあしも
と定尤に候こう作り
の次第かくのごとし



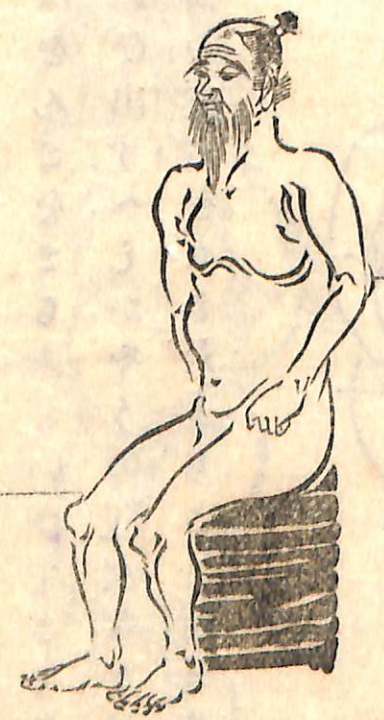
三輪
楊貴妃
かやうの類の能何れも
此こう作り可然候

此人形定家の後のつかの内より出たる姿也
此こう作りひしよ也いかにもすんほりと見
たてなきやうに心得尤に候定家かつらに身
をとちられてこいふこゝろもちなり

鬼又はあくせうへしみくろひけ大
こひてさわうなこかくる能こしの
かけやうこう作り如此いかにもひ
さをふみはたけひちをいらりこか
まへ候へはかり衣にいせひあり

男能こしのかけよう

せうのたくいこしのかけやう
こうつくりかくのをし



百万のごう作り其外女物狂の身なりかくのをしいかにも引つくろはすこしすへすひさも定めす身なりをつくろはぬ所物狂の本意也かくのこゝくさゝの葉を左に持て出きやうけんのうしろよりあらわるの念佛のひやうしやわらはをんこをこらふこいひてさゝの葉を右へ取なをし南無阿彌陀佛こいひ出すへしかやうの狂女なこは身なりにもまくきはにもかまはす物の左右をもさたまらさる所きやう人の本意也

鬼の類あくせうの類つえのつきやうかくのをしふこきつえをさきを跡へしてつかみを本につくへしつかまへ候所はいかにもつよくてもちを本に持へし能によりかせつえつく有たゝのをつく有又右の手に扇にても羽うちわにても持物あらは左にかくのをくつくへし是はつえ斗の躰也

老女つゑのつきやうかくのをしゆふれいのつえはろくにつく目くらのつえはさきをさきへおす老女は其間也是はつえ斗の躰あふきにても花にても持物あらは左にかくのをくつくへし

老人右の老女と同前

目くらのつえのつきやうかくのをしつえのさきをさきへつく也但扇にても何にても右の手に持物あらは左にかくのをくつくへし是は杖はかりの時の躰也

つえつくゆうれいかくのをしいかにもほそきつねをろくにつくへし
是はつえはかりの時の躰也あふきにてもしゆすにても右の手に持物
あらは左に如此つくへし

せうのたくひひた面のをこ
つくはひやうかくのをし但ひ
た面はすこしかはるへしせう
の身なりはれひたるすかたな
れはその心得あるへし

女房のしたにゐるとうつくり如此左の手をはたてたる方のひさの内へ入て袖を持てゐるなり右のてはおりたるひさのうへにをくなりいかにも〳〵前をせはくあき候ぬやうにつくはうへし

とをるの後まくをあけ出る時かやうに扇をたてに持しやくの心にし又左の手をは前のたゝみ上たるかり衣のもすそこし帶のうへをさらへ此ゐつのをくに出さて謠出し候はん少前にしてはしらのきわにてあふきをなをし出はうたふ是さい〳〵めつらしからす時によりめつらしくせんとおもふ時の義也又しやくの舞あらん時は猶以かくのをくにかまへて出る也

此人形同しこう作り但そは
さまに見せたる繪圖也中の
はまむきのかまへ也

いつれもひやくゑにて出候
女房のこう作りかくのとし

此繪圖ともおほかた身なりを書しるすなり然共口傳なくてはかてん
ゆきかたし只不斷よくこゝろかけ候へはをのつからそれ〳〵の身な
り自然と出來るものなりかりそめにもしもにゐるともかほもちなと
のかたふき候はぬやうにせほねなとおれ候はぬやうに心かけ候て常
の座敷にも居候へはさなから能の時も身なりよしまたつねにも見よ
き物なりよく心得へし

一　仕舞にうへを見るといふ事あらは先下をみさて上をみれはきらりと仕舞によせいある物也又右をみん時は左へひらきかほをやり扨右を見る左を見る時は右をみる様によせいをして左右をみる又下をみるときは上を見る様にかほをもち下をみれはめつかひによせいありた〻其ま〻うへをみるといふ時うへを見下を見るといふ時下を見わきを見るといふ時其ま〻わきを見候へはしまひによせいなき物也其上めんにいきほひおくしまひはきとせすして見ところなきもの也是ならひなり惣別のうと申はめつかひにきしたる事也いつれも目つかひしほらしくみん事かんよう也よく〳〵不斷心かくハし目つかひのさた大形如此

一　まはる仕舞これもめつかひの心にひたりへまはる時は右へひらき右へまはる時はひたりへひらきまはり候へは仕舞しほらしく廻るによせいあり右へまはるといふ時其ま〻まはり左へまはるといふ仕舞に其ま〻まはり候へは仕舞もうたひあまりよせいもなくしまひ見くるしき物也

一　いつれの仕舞にも其文句にてするは文句にあはぬ物なり字二つ三つほとまへにすれは本のもんくの時仕舞あふもの也なくときも二字三字ほとまへになき候へはなくといふ時目に手あたる物なりなくとうたひにいふ時目に手をあてなき候へは文句すきてめに手あたるものなり月を見て花をみてといふ時も其字にあたりみれは跡を見る也字二つ三つまへかとにみれはよきころにうたひにあひ候物なり是ならひなり秘事也

一　女能に拍子をふむ事たかくふまぬ物也何の能も拍子はきひすにてふむ也わきのう其分なりこしよりうへのうこき候はぬやうに身なりのくつれ候はぬ様にふむへし惣身をゆりかけあらくなとふむを女に似合す候これ第一きらふなり心得へし

一つくわきつかぬわきと云事これいつれも道行の文句に有へしわきの仕舞心得肝要也

目つけの條々是一大事の秘事なり

一花を見るめいかにもれもしろく執心をなしてこゝろをとめてみるへしれんほの人を見るめつかひ同前

一庭の花まかきの花なとはちかく見るへしみこしの花遠き花其心得あるへし口傳

一つほみたる花さかりなる花ちりたるあとの見やう心つけちかふへし口傳

一月をみるめの事秋の月はいかにもふかくおもしろく見るなり冬の月はあまりこゝろをつけ執心をなすへからす物すさましきこゝろなり山の端の月いかにもとを〳〵しなかむるまちえてうれしくめつらしけなる心はへ也

一入月はいかにものこりおほくしたふたる風情こゝろかけかんよう也

一忍ふ夜の月なとは右の心もちにちかひうらめしく月を思ひたる心付也

一朧の月雲間の月三日月有明の月のこれる月いつれも心付有口傳

一くもりたる月はいつくやらんと定めすしてうかゝひみるへし

一海上にうかふ月水にうつる月まつ水を見てさて月を見る事ならひ也つきをみて水をは見ぬものなり

月花の見やう大形如此

一鬼神のめつかひいかにもつよく見てよし人のめつかひちかふへし女なとはいかにもゆふにしんに見る事ならひ也遠き里ちかきさと海よりやまを見る山より海を見るいつれもめつかひ口傳

一ゆやのあけゆくあとの山見へてといふ所の仕舞人とに明行と東

をみる是ひか事也あけゆく跡こいふせんなし西をみれば明行あとのせんありまた經書堂はこれかこよの見やういつれの時も上面はいつかたへもあれかし左を見るなり清水へまいり候へはひたりなり如此のたくひおほし能を心かくる人は名所舊跡なこの方角ちかひ候はぬやうにこゝろつけみるこころをはよくおほえまたみぬこころは人にたつねよくこゝろかけ肝要也老松にひたりにくわゑんのりんたうありこいふ所大夫の右をみる右にこしの舊跡ありこいふ所は大夫のひたりをみる事ならひなり子細は社壇の左右のをなれは大夫の右は社壇のひたり大夫のひたりは社壇の右なりならひ也山婆のみねにかけりと云所はしたを見谷にひゝきこいふ所はうへを見る皆人をに嶺こいへは上をみる谷こいへは下を見るならひゆかさる人のする事なり谷にては又下をみる所なし嶺をみるにては下を見るにより て此見やう也か樣のたくひ能をにいつれにもあれこも左樣にかきたて候へは

はてもなく候間これをもつて百番二百番をも分別すへしよろつにわたるへし

一　あつき龍神帝釋なこは面かけぬたさなき物なこにさせぬものなりまをしからてのうあしやらなる物なり天女楊貴妃なこはめんかけぬ若衆なこもくるしからす

一　道成寺出立の事前は何にてもしやめんに相應したる小袖つほをるへし後はつほおりをこり面をかけかへ當流はおほひかつらのひんをみたしなかかもし尤に候大和かゝりはしやくまをかつくなり

一　大臣わき男わき僧わき山伏脇陰陽師なこのわき人あき人船頭山賤なこいろ〳〵のわきありそれ〳〵のこゝろもちかんよう也つねの心かけそれ〳〵の大躰を思ひ出てかならすよくしよするもの也但又いはくあまりにすきたるも見にくき物なり其かけん肝要也けいこ油斷にしてはなりかたしけいこ常のたしなみにあり

一　いのりわき山ふしのいのりちかふへし陰陽貴僧高僧などの祈り
ちかふへし陰陽の祈り俗躰なれはそのこゝろへあるへし山ふしのい
のりはつよくあら〳〵これそろしけに祈るへし貴僧高僧のいのりは
いかにも眞にいのるへし是ならひなり

一　僧わきの心持座主阿闍梨僧都などゝひらの僧ちかふへし出立心
もちそれ〳〵の位により分別有へし

一　つねの僧わきいろ〳〵あり旅僧住所の僧のほりくたりの僧各〻
心もちちかふ取分はしめてみやこにつく僧心持色〻たほし口傳

一　男わさ鎌倉殿の御代官御奉行なゝ名乘わき又何のなにかしな
ゝ名乘わき又船頭木こりすみやき山かつ里人かやうのたくひいつ
れも心持れほきにかはる也勿論したて大きに替へし御代官なゝな
のるはまくのうちしつかに橋かゝりをも〳〵しくあゆみけたかく名
乘へし何のなにかしなゝ名乘脇御代官御奉行よりすこし淺く心得

へし里人などおほきにちかふへしまくきは淺くかる〳〵こいつるな
り舟人木こりすみやきなどはしかゝりまくきはのかまひもなし名
乘あさく名乘れきつゝみ打わけ其くらゐ〳〵にちかふべしいやしき
物の名乘はかしら一つにてうちあけ候事つゝみのならひ也上たかき
人貴僧高僧のなのりなどかしられほくはきゝ眞に打あけ候其時狂言
のこゝろありてやかてなのるへし

一　俄の御能御所望ありとも我身に相應したる道具もちあはせすひ
とのかり道具にて小袖にてもあれ裝束にてもあれ其大夫のころに似
合さるたうくにて藝をする事かたく斟酌すへし其身の藝半分に見ゆ
る物なりかたく斟酌すへしさりなから貴人の御意ならは不及是非候
左樣のところものをしらさる人そと見て今の能ふてきなゝ申事物を
しらぬ人の批判也なり物猶以わか道具もちあはすかり道具のあはぬ
にてうち候はゝ藝は半分にもきこえましきなり

一　定家の後の出立の事むかしはつたかつらの色を表しもえきのちやうけんをきたりけるを此花傳書をつくられしよりこのかたむらさきのちやうけんにさたむ其子細は定家の大夫は式子内親王にてまします謠の儀に云ありし雲井の花の袖むかしをいまにかへすなるこいふ謠の儀なり式子内親王いにしへ禁中に御入候時のありさまをは僧に亡霊とかりにへんけしてまなふて御みせ候すかたなれはむらさきの御衣可然候

一　あつもりのめんちこめんをかくると右にかきたり世間には中將の面かくるこれひか事なりあつもりはいまた元服したまはさるゆへにむくわんの大夫と號せりかるかゆへによりて兒面をもちいる也

一　笛ひしき候てより次第を打いたし候てその能過るまて一番のあひた舞臺よりもかくやよりも一切出入せぬ物なりかくやへふたいより出入狂言の間にする物なりたゝし大夫中入を作り物の中へ入かくやへかへらぬ能おほし其時は大夫のきかゆる面いしやうなとかくやよりうたひのうちに持て狂言大夫のきたる事ありそれはくるしからす其外は一切座衆あるかぬ物也かりそめのはやしにもはやしはしまりてすくるまて物いはす湯茶をものますよるならはらうそくのしんを取ともし火をかきたつる事まてはやし以前にきはめはやしの時は謹てしんになり藝する人もきく人もそれに心をつけ候へはとりわき諸藝にかんあるもの也

右いつれも此とかきえらひあつむ所百五十ヶ條なり其外ふたいの繪圖はたか人形ありとあらゆる仕舞習ひ大事れほかたこの卷にかきしるす所は觀世音阿彌今春善竹ほうしやう連阿彌金剛そうせつ右四人のさため置は末代にをゐて其花傳書のほかは皆わたくし藝たるへし後の世に諸藝名人たえてわれわれの申度まゝになり候はん間いましめのために大形かくのをし

物まねのしな〳〵筆につくしかたし去なから此道のかんようなれは其しな〳〵をいかにもたしなむへし凡何事をものこさすにあらせんか本意なり然とも又をによりて深き淺きをしるへしたとひ木こりすみやき塩汲なとの風情にもなりつへきわさをはすへきかそれよりくわしからんしよくをはにすましきなり上の目にみゆへからすもしみへはいやしくておもしろき所有へからすこれらをよく心得へし

一　女躰凡かゝりはわかきしてのたしなみにて似合候事也さりなからは是一大事也まつしたて見くるしけれは見所なく女御かういなさの其御ふるまひ見る事なけれはよく〳〵きぬはかまきやうはならひ尋へしたゝよのつねのかゝりはつねにみなるゝ事なれは實はたやすかるへしたゝきぬ小袖のいてたちはおほかたのすかたよしとあるまてなりしら拍子には物狂なとのかゝりあふきにてもあれかさしにてもあれいかにもよは〳〵と持さためすしてもつくしきぬはかまなとは

なか〳〵ことふみくゝみてこしひさすくに身はたをやかに成へしかほのもちやうあをのけはみめわろく見ゆうつふけはまたうしろ姿わるくさてくひもちをつよくもてはをんなに似すいかにも〳〵袖のなかき物をきて手さきをも見すへからす帶なともよは〳〵とすへしこれは中帶の時の事也されはしたてをたしなめとはかゝりをよく〳〵みせんとなり何のものまねなりとも殊更女かゝりはしたてをもつて本とす

一　老人の物まね此道の奥儀なり能の位やかて餘所目にあらはるゝをなれはこれ第一の大事也几能をよきほとに究めたる仕手も老たるすかたはゐぬ人れほく候たとへは木こりしほくみなとのわきもの翁すかたをはにせぬれはやかて上手と申事是せはき批判なりかふりゐほしかりきぬ老人のすかたえたらむ人ならては似合へからす稽古のこう入其物に似すへしかほけしきをはいかにも〳〵をのれなりにつくろひてすくにもつへし

一　物狂此道の第一の面白き藝能也物くるひのしな〳〵たほけれは此一道の得たらん達者は十方へわたるへしくりかへし〳〵こう案の入へきたしなみなり似合つき物のしな〳〵神佛のとかめ生靈死靈なとは其つき物の躰をまなへはたより有へし親子の別れ子をたつね男にすてられつまにをくるゝか樣の思ひに狂人する物狂一大事也かやうのおもひのしても心にわけすしてたゝ一通にはたらくほとに見る人のかんもなし思ひゆへのものくるひをはいかにも〳〵物たもふけしきを本意にあてゝくるふ所を花にあてゝこゝろに入てくるへは其かんありて見所定て有へき也かやうなる手からにてあはれなる所あらは無極の上手とこしるへし是をよく〳〵思ひわくへし凡物狂の出立にあひたるやうに出たつへき事せいなしさりなから物狂にとよせて時によりて何とも花やかに出たつへし時の花をかさしにさすへし又

云物まねなれども可心得事あり物狂はつき物の本意をくるふさいへ共女物狂などの或はしせうたうしやうきしんなどのつく事何よりもわろき事なりつき物の本意をせんとて女かゝりにていかりぬれは見所にあはす女かゝりを本意にすれはつき物の道理なし又男かゝりに女などのよらむ事も同し料簡なるへし能つくる人に料簡なき事也然は此みちにちやうしたらん書手のさやうに似あはぬ事をはかくをあるまし此こうあんをも心事能作人の秘事也ひた面のものくるひ能をきはめならひては十分にあるましき也かんしよくをそれになさぬは物狂に似すゐたるところなくてはかほけしきをかゆれはみられぬ所あり物まねの奥儀とも申つへし大事の申樂などには初心の人は斟酌すへしひた面の大事物狂の一大事二色を一つになしてれもしろき所の花にあてん事如何程の大事そやよく〳〵稽古あるへし

一 脩羅これ一躰の物也よく責れ共おもしろきところまれなりさの

みにすましきなり但源平などの名のある人の事を花鳥風月に作りよせてわきよけれは何よりも又おもしろく是とに花やかなる所ありたゝし是ていなる脩羅のくるひ度ゝもすれは鬼の振舞になるなり又舞のてにも曲舞かゝりあらはすこし舞かゝりの手つかひよろしかるへしゆみやなくひをたつさへてうち物をもつてかさりとすその持やうつかひやうよく〳〵たつねてわきまへはたらくへしあひかまへて何のはたらきまた舞の手になるところを用心すへし

一 神凡此物まねは鬼かゝり也何となくいかれるよそほひあれは神躰によりて鬼かゝりにならんもくるしかるまし但はたとかはれる本意あり神にはまひのかゝりの風躰よろし鬼には更に舞かゝりのたより有まし神をはいかにも神躰によろしきようにたち出てけたかく殊更出物にならては神といふせん有ましければ衣裝をかさりてゑもんをつくろひてすへし

一　鬼是又とさら大和の物なり大事なり凡幽靈つき物なとの鬼は面白くたよりあれはやすしあひしらひをめかけてこまかに手をつかひてはたらけはおもしろきたよりありまとのめいとの鬼をよくまなへはおそろしきあひた面白きところさらになしまことは大事のわさなれはこれをつよくおそろしかるへしつよきおそろしきと心にかはれり抑鬼の物まね大きなる大事也よくせんにつきて面白かるましき道理ありれそろしき所本意なりれそろしきこゝろ心と面白きとは黑白のちかひなりされは鬼のおもしろき所あらんしてはきはめたる上手とも申へきかさりなからそれも鬼かゝりをよくせん物はとさら花をしらぬしてなるへしされはわかき仕手の鬼はよくしたりとは見ゆれ共さらにたもしろからす鬼はかりよくせん物は鬼のたもしろかるましき道理あるへきかくわしくならふへし岩ほに花のさかんかとし

一　唐の事是は凡各別の事なれはさためて稽古すへき題目なしたゝ

かんよう出立なるへし物をも同し人と申なからやうのかはりたらんをきて一やういやうしたるやうに風躰をもつへしこういりたる仕手に似あふ物なりたゝ出立をからやうにするならては手たてなし何としても音曲はたらきも唐樣といふ事誠に似せたりとも面白も有まし き風躰なれは只大夫まて也今樣したる申事なとかりそめなから諸事にわたる劫案なり何事かいやうしてよかるへきなれとも唐やうをは何とか似すへきなれはつねのふるまひに風躰かはりてなにとなくからひたるやうこそめにみなせはやかてそれになる也大形物まねの條ゝ以上九十ヶ條此外こまかなる事はのせかたし去なから凡此とをりよくゝ究めたらん人はをのつから細なる事しるへし

一　問抑申樂をはしむるに當日にのそみてまつさしきを見て吉凶をかねてしる事はいかなる事そや　答是大事なり其みちにえたらむ人ならては心得へからす先其日の庭を見るに今日はのうよく出來へき

あしく出來へきすいさう有へしこれ申かたし然共凡の了簡をもつて見るに神事又貴人の御前なとの申樂に人群集して座敷いまたしつまらすさるほとにいかにも〳〵万人の心一同にをそしとかくやを見るところに時をえて出て一聲をあくれはやかてさしきも時分の調子うつり万人のこゝろ仕手のこゝろ振舞に和合してしみ〳〵とこなれは何とするも其日の申樂ははやよしさりなから申樂は貴人の御いてを本とすれはもし早〻御出ある時はやかてはしめすしては叶はすさるほとに見物衆の座敷いまたさたまらす或はをくれはせなとにて人のたちしところにして万人の心いまた能にならすされはさうなくしみ〳〵と成事なし左樣ならん時の能には物になりて出るとも日比より色〻とふりをもつくろひたちふるまい風情を人目にたつ樣にいき〳〵とすへしこれはさしきをしつめんか爲也さやうならんにつきても殊更その貴人の御心にあひたらん風躰をすへしされはかやうなる時のわき能十分によからん事かへす〳〵あるましきなり然共貴人の御意にかなへるまてなれは肝要なり何とするもさしきはやしつまつてをのつからしみたるにわろき事なしされはさしきのきほひをくれもかんかへてみる事その道に長せさらむひとはさうなくしるましきなり又云夜の申樂ははたと替るなりよるはをそくはしまれは定てしめる也晝は二番によき能の躰をよるの脇にすへしわきの申樂しめりたちぬれはそのまゝ能はなをらすいかにも〳〵よき能をとすへし夜は人そう〳〵なれはひるの申樂はのちかよくよるの申樂はさしよりしめりたちぬれは猶時分さうなし秘儀云抑一切は陽の和するところのさかひを成就とはしるし晝の機は陽のき也されはいかにもしつめて能をせんとおもふたとへは陰機也陰陽の時分に陰陽機を賞する事陰陽和する心なり是能のよく、出來成就のはしめ也たもしろきと見るこゝろなり夜は陰なれはいかにも〳〵うき〳〵とやかてよき能をすへし人

のこゝろの花めくは陽也是夜の陰に陽機を和する成就也されは陽機に陽とし陰機に陰とせは和する所有ましけれは成就あるまし成就なくは何か面白からん又ひるのうちにても時分によりて何とやらん座敷もしめりてさひしきやうにあらはこれ陰の時と心得てしつまぬ樣に心得てすへし晝はかやうにときによりて陰きになる事あれ共夜の機の陽にならむ事は左右なく有ましき也座敷をかねて見るとは是なるへし

一　問能に序破急を何とかさたむへき　答これやすき事なり一切のことに序破急あれは申樂も是同し能の風躰を定むへし先わきの能には本說たゝしきことのしとやかなるかさのみこまかになく音曲かゝりと大かたの風躰にてする〳〵とやすくすへし第一祝言なるへしいかにもよきわきのうなりとも祝言かけてはかなふへからすたとひ能は少つきなり共祝言ならはくるしかるまし是序破急たるゆへ也二番

三番になりては得たる風躰のよき能をすへし殊更急になれはもみよせて手數を入てすへし又後日なとのわきの能にはきのふわきにかはれる風躰をすへしなくのうをは後日なとのなかほとにかんかへてすへし

一　問能の勝負のたちあひの手たてはいかに　答これ肝要なりまつ能數をもつて敵能にかはりたる風躰をちかへてすへし序に云歌道を少たしなめとはこれなり此藝能の作者まへなれはいかなる上手も心のまゝならす自作なれは言葉ふるまひ案のうちなりされは能をせんほとの物の知才あらは能を作らん事安かるへし此道の命なりされは如何成上手も能をもたさらんしては一騎當千の兵なりとも軍陣にて兵具のなからん是たなしされは手からの精靈立合にみゆへし敵方いろめきたる能をすれはしつかにもやう替りて見ところのある能をすへしか樣に歌の能にかへてすれはいかなる敵方の能よけれとものみにはまくるこるなし若出來ぬれは勝事は治定なるへし勝負口傳有

之

一　問是に大なる不審ありはや功入たるしてのしかも名人なるに只今わかき仕手の立合にかつ事是ある也不審也　答これこそさきに申つる三十以前の時分のはななれはふるき仕手のはや花うせてこやうなる時分にめつらしき花にて勝事あり眞實の目き〻は見わくへしさあらは目き〻めきかすの批判の勝負になるへき也さりなからやうあり五十以來まて花のうせさらむ仕手にはいかなるわかき花なり共かつ事あるまして〻よきほとの上手の花のうせたるゆへにまくる事ありいかなる名木なり共花の咲ぬ時の木をやみん犬櫻一重なりともはつ花色々とさけるをや見んかやうのたとへをおもふ時は一旦の花なり共たちあひに勝は理なりされは肝要此道はた〻花か能のいのちなるを花うするをもしらすもとの名望はかりをたのむ事ふるきしてのかへす〳〵あやまりなり物數をは似せたり共花の有樣をもしらさらむは花のさかね時の草木をあつめて見んかをし萬木千草にをあて花の色もみなをなれ共おもしろしと見るこ〻ろはれなし花也物數はすくなくとも一方の花を取究たらんしては一躰の名望ひさしかるへしされはぬしの心には隨分花ありとおもへとも人の目に見ゆるこうあんなからんは田舍のはなのさくらのいたつらにさきて匂はんかことしまた同し上手なりとも其うちにて重〻有へしたとひ隨分きはめたる上手名人なり共此花の大夫ならん仕手にてはとをる共のちまては有間敷なり大夫をきはめたらん上手はたとひのうはさかるとも花は殘るへし花たにのこらは面白は一期有へしされはまとの花の殘りたるしてにはいかなるわかき花なりともかつ事あるましきなり

一　問能にをて〻とてをさらにをとりたる仕手も一むきは上手にまさりたる所あり是は上手のせぬは叶はぬやらん又すましきにてせぬやらん　答云一さいの事にえてとてしやうとくえたるところある

物也位はまさりたれ共これはかなはぬ事ありさりなからこれもたゝよきほゝと上手の事にて料簡也まをに大夫のきはまりたらん上手はなとか何のむきもせさらむされはのうと大夫を究めたるして万人か中に一人もなきゆへ也大夫はなくてまんしんはありこれを見る人も主も不知上手は名をたのみ達者にかくされわろき所をもしらねはよき所のたま〳〵有ともわきまへすされは上手も下手もたかひにたつぬへし乍去能と大夫とをきはめたらんは是をしるへしいかなるをかしきしてなりともよき所ありといはゝ上手も是をまなふへし是第一の手たて也もしよき所をみたりともわれより下手をは似すましき淨識あらは其こゝろにけはくせられて我わろき所をもいか様しるましきなり下手も上手のわろき所もしみへは上手にも似ましき所ありいはんや初心のわれなれはさこそわろきこころおほかるらめと思ひてこれをおそれて人にもたつね大夫をいたさはいよ〳〵稽古になりて能

ははや〳〵あかるへしもしさはなくてあれ躰わろき所をはすましきものをと慢心あらはわかよき所をも眞實しらぬしてなるへしよれ所をしらねはわろきこころをもよしとおもふなり去程に年は行とも能はあからぬなり是則下手の心なりされは上手にたにもなり慢あらはのうはさかるへしいはんや叶はぬ淨識をや能にこうあんしてたもへ上手下手の手本也と大夫すこし下手のよき所をとりて上手の物數に入事無上至極の理なり人のよきこころをや稽古はつよかれ淨識はなかれとは是也

一　問能に位の差別をしる事いかん　答これ目き〻の重〻の事なれはふしきに十はかりの能者にもをのれとある風躰あり但けいこならむはをのれと位ありともいたつら事也まつけいこの功入て位あらんは尤名望なり又生得といふはたけ也かさいふは別の物なりれほく人たけとかさとを同しやうにれもふ也かさと申は物ものしきいきほ

ひ也かたち也云かさは一切にわたる儀也してこは前のもの也然共さらに幽玄にはなきしてのたけの有もあり是は幽玄ならぬたけなりまた初心の人思ふへしけいこに位を心かけんは返〳〵かなふまし位は彌〳〵かなはて剰けいこしける分もさかるへし所詮くらゐたけこは生得の事にて得すしては大形かなふまし又稽古の功入てあか落ぬれは此位をのれと出來事あり稽古こは音曲ははたらきものまねかやうのしなしな共きはまる方術なりよく〳〵あんしてれもふに幽の位玄は生得の物かたけたる位は功入たる所か心中に案をめくらすへし　問文字に當風流こは何事そや　答是こまかなる稽古なり能にもろ〳〵のうたひこはこれ也

一　御前にて上より御ふく大夫に下さる〳〵事あり其時は大夫ゑほし上下にてまかりいてふたいの上面にてはいりやうし謹ていた〳〵きやかて其御小袖にて祝言を中入よりする物なりこれ御前の能のさた也

一　公家男女ともに又神能女体ならはつまくれなゐの扇たるへし常の能にはつまくれなゐはもたぬなり

一　せうの類但眞のつり人木こりすみやき塩汲れうしなこのあふきのさしやうあまりあたらしくなき扇を右のわきにさきをうしろへなしかなめの方を前へしてさすへしかりそめにもつまくれなひなこは中〳〵持ぬ物也云あふきのさしやうつり人しほくみなこの類はつねのこくに前へさすへしいやしきせうの類よき人のかりにへんけたるは前にあふきさすへし

一　しほくみ桶の事銀にたひ候て下三分一ほこんしやうにてさいしき島をやりきんていにて水なこかきてよし金薄なこ結搆からせてをくへからす同桶のおの事あさきこんかちん黑茶尤に候くれなゐ紫しろきをなこ中〳〵せぬ也

一　高砂當流はくまてをもつ大和かゝり其外餘の座には〳〵きをもつ

事不審に候かけ共落葉のつきせぬはこいふ時はくまて尤に候はけ共
とは謠になしうたひにかけともと謠ふはく仕舞する事第一不審なり
とかくうたひと仕舞と別なるはひかをたるへく候か

一　錦木曲舞あふきにてまふをありにしき〻にて舞事あり本の舞様
は男はにしき〻をはこへはこいふ所より錦木にてまひいて草の戸さ
しはの時つれの前へ行夜はすてにあけけれはすこ〳〵と立かへりぬ
こいふ時に錦木を置てもとる其時に扇にて舞さて其後かこにたちよ
り錦木ともにくちぬへきこいふ所にて大夫つれのまへにゆきその
とき錦木をとる仕舞有あらつれなつれなやの時にしき〻をつれの前
にて捨うらめしさうにつれを見て錦木をすつる又云錦木をつれにな
けつけるもあり是よりあふきにてまふ也

一　三輪當流は神樂のうち五へいにてまひ五へいをすて〻舞になす
其時あふきにてまふ是今春か〻りははしめよりあふきにて舞是兩座

のわかち也中入の前女僧都へ衣所望候ときの仕舞わき衣をとりいて
大夫の前へそとなけいたす其時大夫衣のそはへより左の手より衣を
取あけ兩の手にていたゝきあら有難や候さらは御いとま申候はんと
いひてたちあかり一足二足もとる時しはらくさて〳〵御身はいつく
に住人そとわきとふ也世間に衣を手よりわたす仕舞あり是はいか〻
あるへきそや僧都の御そはへ女のよる事第一似あはす候其上しきみ
あかの水くみて參りたる女なれは明神上臈に御姿をはけ給ふとみへ
たり女此時は當僧都の御そはへ下臈のより候はん事及かたしとかく
衣なけいたす仕舞尤に候

一　うとふ大夫わきへ水衣の袖をときてわたす仕舞あり是ならひあ
り大事也袖をわきへ渡す時のわたし様習ひありおほつかなさうにあ
ゆみよりとをよそにさしいたしちやくとわたす世間に人のするはい
きたる人の言傳をし物いふやうに心得候て結句わきによりしたしき

躰あり幽靈のせんなし是物をこまかに心得さる人のわきなりおほきなるひかをなり同しくあまの御經文渡すこころ同前わたし候てたちのきなつかしさうに見する事ならひなり

一　かけの仕舞面の仕舞こいふ事ありかけの仕舞こはいにしへのうはさを聞及ひ其人のまねをする仕舞の事なり面の仕舞と申はわか身の事をわれこする仕舞の事ひこのうはさをまなふ仕舞けんさいの我身の仕舞こゝろもちちかふへしかやうの事こまかなるさたなりよく口傳すへし

一　海士の玉の段うこふのきり狂言にもこきて舞事ありか様のたくひおほし能する人の心かけにさやうの狂言に自然似たる所のなきやうにたしなむへし

一　鬼能ひやうしの事いかほも身をゆりかけあら〳〵こつよくふむへし

一　舞のうち下手のはやしにてもしつまりすきは其時の舞やうの事段を略してはやくうたひ出すへしさき立候はやしを俄におさへ候へは位ちかひたちまち猶〳〵はやしにむらいてきわけもなき物になり候也返〳〵さようのこき舞をみしかく留る事ならひ也惣別位能こもあまりのらぬ囃ははやくこめたるか尤に候

一　鬼かたの事色〳〵あり現在の鬼めいこの鬼女の鬼怨靈の鬼こて人なこの怨念にて鬼になりたるあり其外しやたいてんく是等色〳〵ちかふへしりきたうさいたうの位はいつれへもわたるへし

一　ゆや野の宮其外車にのるのうち左のあしより同しく馬に乘る左の方より足は右より

一　三輪の中入の後みかけあらたにみへたまふにて大夫作り物の中より出てくりさしの間たちて居舞本也曲舞にするもあり又つくり物の中に其まゝこしをかけて居みかけあらたに見へ給ふにてまくをこ

らせくりさしのあひたこしをかけてゐもすそにこれをこちつけてのしたこしをかけてのこ
仕舞腰かけなからありて跡をひかへてしたひゆくの時立より舞也こ
れは跡をひかへしたひゆくといふ儀に合せておもしろき心もちなり
曲舞のはしめより舞候ても別におもしろき仕舞もなく候へは舞候事
辛勞にて面白は候はていらさる事にて候か

一　面を見るやうの事まつ面のれほひをこり面のうちにあてめんの
緒をつけ候所を左の手にこりて右の手をつき見へし是は貴人の御前
にての見様也同輩ならは其心得有へし

一　大臣ゑぼし上すかけの事當流は前へ二筋うしろへ一筋みゆるや
うにかくる也大和は前へ一筋うしろへ二すちみゆるやうにかくる也

一　面のたのゆひやうかつら帶のしたへさかりたるを二すちなから
のけてゆふものあり一筋したへなりたる方のうへにゆふを本也

一　中將の面わか男の面かはりはまゆのあるとなきとのかはり也ま
ゆのあるにはまみのけかき有まし又まゆすみはかまにはまみのけか
き有へし右のかはりめなり

一　兒と童子めん年はいおなしころなれともかはり候所はちこはけ
たかきかほはせにて是もまみのけかきなしまゆすみをはくなり又童
子の面はかほはへあまりにけ高くなくみたれかみにてまみのけかき
あり

一　めんの事あまりあたらしきはきらめきてあしき物なりまたあた
らしきみにくきことてあまりふるすきてことはけたるも猶見くるしき
物也よきほとのふるき尤に候

一　面の緒の事女面はあさきせうのめんはしろし鬼の類は
いつれもあかし

一　面のかけやうの事其うたひに作りし人の年はいいくつの年比を
つくりし事よくわけ二十四五の時の事を作りたるのうにわかおとこ

なこもにあふましく候わか男は十八九かほ也か樣の事よく心得へし

一　猩〻のみたれ三つあり眞草行也眞の乱れは少〻の功にてはなり

かたきをなりひさくさす事ありさ〻ぬ事ありならひありこ〻ろもち

ある事也付みたれの舞出しの事大夫あしを右左によらすあけ候さて

順逆に急の足をふむ時みたる〻又大夫くわつして足を折る時よりみ

たる〻もありまたつくり物有時もありなき時もあり眞草行によるへ

しつほおりの小袖のうへにこし帶する事あり習ひ口傳あり

一　常の僧わきむらさきの水衣きる事有間敷候僧の位によりきすへ

きなり

一　むらさきの水衣大夫きる事同前是も能につくりし人の位により

てきるへしむさこは紫なこはきせぬ物也ちやうけん舞きぬ同前

一　物狂の出立ひやくゑにてぬきかけたるへし百萬なこにゑほしを

き候はゝくろきゑほしまへをおりてか又はしつかゑほし尤に候かさ

おりなこは中〻きぬゑほしなり

一　はせをにはしめはしろきうはき尤に候雪の内のはせをこいふ儀

なり後は紅梅のちやうけん尤に候うたひにはせをの女のきぬは薄色

のはなそめならんにこいふ儀なり

一　大臣わき本わきの名乘其人の位によりてもし大臣なこに御名乘

候公家のわきならはゑほしひたりへ折へしこれ奥の奥の大事也かや

うの事こまかなるならひ也心得へし

一　かつら帶の事當流はひこへ也大和かゝりはしたかけこいひてふ

たへするなり又つれのかつら帶はさくる所をそこへみせす但能によ

りてみするも有へし

一　大臣の出立二人は一ついのかりきぬ尤に候本わきは色をかへも

やうけたかきかりきぬ尤に候

一　僧わき三人出る能ならは二人は同し色の水衣たるへし本わき僧

の位によりていろをかへもやうこひたるいろの水衣きすへし

一　三輪の後の出立大まひきぬ大口きんのかさおりくろたれかみお
ほひかつらの上にかけへし舞きぬのいろは黄なるか白きか本なり

一　百萬のわき當流は上下にておここわきなり大和かゝり僧わき也

一　女物狂のおほひかつらのかけ様の事あまりふかき女らふのおほ
ひかつらのをくにつくろひてうつくしくかくるにはあらすおほかた
にしてかつらたひなとも少ふるしき尤に候かつらのもとひにてゆひ
たるさきつねの能には小袖の下へかくし候

能の舞臺の橋かゝりの事

一　大庭の舞臺は三間四方ひさしは其かつかう成へしゐんのたかさ
五尺也舞臺のくるりに間一間あまり置て高さ五尺あまりに垣をする
物なり左様のたかきゐんの上にての仕舞はあまりちかくみれは能あ
さはなる物也そのうへひやくゐの能なとは下より見あけ候てあしち

かのかきは第一人をよせましきため又は時のいひ事口論なとの用方
にもよしそのうへさやうにたかき舞臺にてはあまり近所は能も見へ
ぬ也かた〳〵以垣を用る也

一　中の舞臺は二間まなか四方也是もひさしは其かつかうなるへし
是も舞臺より一間置てくるりにたかさ五尺ほとのかき有へしはしか
ゝりへも人のよりつき候はぬやうに間をゆひきりて尤に候様のたか
さ四尺也

一　小庭ののうなとは二間四方の舞臺もよく候これもひさしは其か
つかう見合なるへし四間のふたいならはわきの居座はゐんをいたす
へしふたいのゐんの高さ三尺

一　橋かゝりの長さの事大庭のは十三間十一間なり中のは八九間七
間也みしかきは五間なり五けんよりみしかく候ては能なりかたし橋
かゝりに色〻のならひ心持あれはみしかくはなつきにてはならさる

事のみおほしはやしなこもまくきはより橋のあひたに段〻うちやう
ありはしか〻り能のかんよう也

右いつれも常の様子なり御前の能は少様子替るへしいたしきな
この高さ御見物所のかつかうによるへし

一　御前の御能の舞臺には正面に庭へきさはしありこれは舞のうち
に大夫御前へめす事ありその時のためなりきさ橋こをりは見物をか
ぬものなり

一　座敷の前の舞臺は敷板のかつかうすこしさしきより舞臺をたか
く板敷をはる也

一　右舞臺のか〻りの圖大方

一　ひろきふたいせはきふたいなかき橋か〻り中の橋か〻りみしか
きはしか〻りそれ〳〵のかつかう相應の仕舞のつもり心もち肝要な
り

一　あひたもなく似たる仕舞せぬものなりよくたしなみこ〻ろかく
へし

一　女能にかたなをぬき劔をぬく仕舞若あらは心もち有へし脩羅な
このよせいちかふへしよく分別有へし但女のこ〻ろもちゆきすき候
は〻又仕舞よはく有へし心得かんよう也

一　夕かほによすかといふ事ありよるのをにあらす源氏を見候は〻
かつてんゆくへし

一　うしろかみそひかる〻といふ事みちもりにあり當座の事にあら
すよく口傳有へし

一　月待ほこのうた〻ねといふ所紅葉かりにありそらを見る事ひか
をなりわきを見へし是はたこへにてて候空の月の事にてなく候か様の
たくひいつれの能にもたほき事なり書つくしかたし是を以何も分別
すへし萬へわたるへし

一　大夫つれにたつ人大夫よりせいのたかき人つれにたゝぬ物也かつかうあしきものなりつれは大夫と同しせいかすこしひくき尤候

一　おさなき人の大夫におとなわきにたつ事其時のわきのしやうの事心持ありわきのかたよりも大夫をもとき後見のふかく過たるはみにくき物也其心得肝要也又功者のわきにたちたるやうに仕候へはおさなき人はたより有ましく候其見あはせかんよう也

一　わきのいのりの事序破急有へしはしめをしつかに珠數をもすりいかにも間をとを〳〵ともみなをすへし中頃を破によせていのり後を急にいのるへし急によする時しゆすをさい〳〵もみなをし〳〵祈るへし但のうによるへし善界舟辨慶なとは祈り出より急也道成寺あふひの上大形同前序破急ある祈りなり此心持いつれへも渡るへし

よろつの能の心もちの事

一　神能心持出候て出る時我身を神と思ふへしいかにもけたかくもつくし

一　鬼わか身を鬼とれもふへしいかにもいかれるこゝろをもちいつる事ならひ也

一　脩羅のこゝろもちまくをあけ候ときいくさはへ出る時のこゝろもち同前

一　女わか身を女房とおもふへしおひなとをもゆる〳〵とこしてこゝろをもいかにもしつかにいて候へは女躰によしあるものなり

一　佛なとの能我身を佛と思ふへしいかにも心を殊勝にもちてけたかくいつへし

一　幽靈我身を幽靈と思ふへしいかにも〳〵心をよは〳〵ともつてよし

右それ〳〵の能心もち大方如此この心持なく候へは能にそれ〳〵のいきほひなし右心持肝要也此外何の能も是を以分別あ

るへしあはれなる所は心をあはれにもち物すこき處は心をすこくもちいさむ所はいさめ夫〻心もちかんようなり

一　陰の能心もちの事れもてを陰にうらを陽に心得へし左様になく候へは能しめりすき候也

一　陽の能の心持の事れもてを陽にうらを陰にあてへし左様になく候へは能つよみすきつやなく候により右の心得をましへ陰陽和合とこれをいふ但能によるへし陰の陰陽の陽と舞もあり水無瀬定家の後まつの山かゝみの幽靈のかたなとは陰の陰なり又もみちかり羅城門なとは陽の陽也かやうの事をもつて此類の能の位分別有へし、

右こまかに陰陽の位分別して其〻の仕舞わけかんよう也

一　大方能の極意七十一ヶ條此卷に書記す末代にをゐては古人の申をかれ候事も人〻にしりたる人有間敷候へはわれ〳〵の申候ま〻に口にまかせ申なしならひと云事も秘事と云事もいたつら事にすたりはてなん事をかなしひ給て觀世音阿彌今春善竹ほうしやうれんあみこんかうそうせつ此四人にれほせて昔今の諸藝のかゝみのため是をかきしるし花傳書と号しのこしをかれ候事私にあらす上意を以是を撰しるす然は天下の御大夫なるゆへにくわんせに是をくたし給はりぬ

せあみ

よろつ打囃のしな〳〵大かた此卷にかきしるすところの條〻

一　まつ囃といつは水に物のうきてなかるゝかをくにはやき瀬をはやめしつかなるせをはしつめ謠の位を分別して謠の文句に似合たるやうにはやすへし惣別謠のうちをはやすにめる字はる字をかんかへ又うたひの呂かんを聞分てそれに相應するやうにはやすへし文字うつり程よく聞分字にさはらぬやうに心かけへし又謠にかんあるふしなと打けし候ぬ樣にたしなむへし手をうたんとての前に手に似たる地をうたぬ也これを手の前をいかにもかすませ囃候て手をうてはは手に感ある物也小皷ならはおつより打手うち候はゝ其手の前は地をきさみにてやりさておつより手をうち出し候へは手にかんあり又きさみよりうつ手をうたむと思はゝ外の地をれつかちにさて手をきさみより打候へは天と地とに水きはきらりとたちてかんある物なり謠の曲ならは呂のふしは乙かむのふしはきさみ也かむのふしの所のて

はきさみより打てよし呂のふしよりうち出てはおつよりうちてよし是一大事のならひ也第一はやしと申は大夫を本とせり大夫は一座の大將花をつかさどるしんなれはかけるましき所にてかけりかけるへき所にてもかけらす舞留るとも常になき手を色〻にかへて舞留る謠のみしかきふしをなかく引なか節をみしかくつめ難曲をうたひすへ打きる所をうたひすへさうにしてすくにやり色〻様〻にわかま〻にふるまう也囃よくくめんをやり油斷なく心得へし大夫のはたらきのいかにも〳〵よきやうにはやしよりもてなす事肝要なり上手たりといふ共大夫のはたらきに合されは藝は下手と心得へし惣別役者は大小太鼓笛地うたひ狂言に至るまて花の下草にたとへたり下草は花のしんのにきほひ威勢ある様にとはかり心かくへし其心持肝要也いかにしんの振舞は面白候共下草のとりあひあしけれはいかにとしてもよき花とは申かたしか様の事稽古大方にて成かたしよく〳〵不斷の

たしなみこゝろかけゆたん候ましく候大夫たとひ下手にして名人なり共囃は大夫をうやまひ大夫につくへし惣別世間に人の申候上手と名人とはたほきなるちかひにて候を人常におなしやうに申候上手と申は其藝面白きを上手と申也名人と申は諸藝くらからすそのけいさうたらひすらりとしてはつれに諸人かんにたへ殊勝なる所あるを名人とは申也左様に万人にほめられん事少〻の稽古たんれんにてなるへきやさるによつて名人と申事出來る事まれ也是は名人のうはさ先囃の口傳と申は序破急陰陽の位をよくたんれんして囃わけ肝要なり大和かゝりは陰陽の位を女はかせ男はかせと申也名こそかはれとも同事也能一番の間に次第は序にて破に留るもあり又序の序と留るも有或は破急ことむるもあり是は謠のこうあんをよくわきまへて分別すれはきこゆるものなり

一　囃のはやきとかろきとしたるきとしつかなるとは大なるかはり

にて候かろきと申はのりてよき圖にする〳〵こゆくをかろきと申候石車にのりかた拍子にさきたつをはやきと申候しつかなるこは殘りてよき位にゆきさきたゝすあとへもさからすゆる〳〵こしんにゆふをあらせてはやすをしつかなると申候したるきと申は位うたひの跡へさかりたるをしたるきと申なりこれたほきなるかはり也

一　わき能かいこの事笛眞の呂をふきしんのねこりを吹出す其後笛かんになし候ところは小つゝみきさみより打出し候數は五つなれ共人の前にては中のおつを一つ二つ打候口傳なり五段のおきつゝみ也小皷の乙を一つ二つかけて笛吹へし何とそ取まきれ小皷はやく打出候事あり其時笛初段をすて二段こり吹へし小つゝみ打出し初はきさみよりうちいて二番目におつよりうち出し三番目はかしら打出し四番目はゆりのうちをかけてきさみれとす其後かしら二つ六下の内にそれよりうつをはあたうちこいへりうちあけのかしら二つ打つと留

る也おきつゝみ過てまくをうちあけ其時かいこの笛ありかんの音とりを吹出す天筆和合樂地福より自在樂と觀念の心もちあり小皷おきつゝみのことく打くあひはなし笛も同前也笛調子の位に習ひ口傳ありつれ大臣太皷打のそはより橋かゝりへかうへを地につけてかしこまり脇大夫舞臺のさきへ出る時笛かんのゆりかけて呂になし候處より序破急に小皷よすへし扨舞臺さき五足はかりをき謹而禮ををし袖の露をとりをきあかる其時小皷打あけかしらの數七つにてなかしあくる也但九つうつ流もあるよし候人うち候共不審すへからす笛其時ゆりかけて吹手有ゆりの數九つ九曜の星を表す小皷のかしら七つ七ようのほしを形とるふゐのゆりをうけてわきかうへをあくるこつゝみかしらにつけて立あかる笛小皷脇大夫三人のこゝろ一道の位也さてわき大夫かいこをゆいやりて名乘さて名乘すきつれわきたちあかり二つかなわになをり次第をうたふやかて道行をうたふ八幡山にも

着にけり〳〵とつゝみ打の前へつく本わきつかはつれわきも心得へし扨わき大夫二の脇にむかつてせれふをいひてさてわき座になをる

一　わき能打やうの事次第の時は本の次第也小つゝみより打いたし五段の次第也上略中略下略本のかしらをうつなり

本の頭と云　上略と云　中略と云　下略と云

○○○○　○○○○　○○○　○○○　本の頭は數四つ也

上を殘して中を殘し下を殘すを以上略中略下略とは申也笛のひしきの位をうけてうちいたすへし扨わき出てゝ三つかなわになをる時わきのふりを見合てうちきりさていまをはしめの旅衣〳〵日も行末そ久しきとうたふこゝにて名乘の笛あり名乘てつゝみきさみよするきさみより道行のうち謠一句上略のかしら打也いかにもにき〳〵と可然口傳頭にかけとかしらといふ事口傳するはる〳〵の都路をといふ所にて笛吹手あり高音の調子いくかきぬらんといふ所是もつゝみ打きり笛ありかんの調子高砂の浦に着にけり〳〵笛いかにもつよ〳〵と吹手あり六下ゆふ〳〵と祝言にふくへし

一　一聲の事笛ひしきの位を以打出すなり五段の一聲ふみ留る一せいと是をいふ大皷なかし候はては不叶儀也かく屋にてなかし候はんなとゝ大小いひあはする事初心なる事なり大皷なかし候はんとてはをしへのかしらといふ事ありをしへのかしらをきゝ小皷其かくこをなす頭を一たんうつ是を敎へのかしらと名付也なかしの後たつ六つの外にくわへの頭と云事大皷にあり大なかし五段の一せいに小皷はかしらうち候はては叶はす口傳但鈴の段になかしもしあらはわき能にはなかすへからす一聲の打あけ常のはうちあけ候わき能は打とめて本のかしらをうついつれもなかしあらはうちとめはかくのをくなるへし

一　尾上のかねもひゝくなりと云所にて下無調よりいていろゑあり

一　をとこそしほのみちひなれ笛ふきやうあり中の高音吹返す大夫

舞臺へやかて出るあひしらひ皷かしらの位も同意なり

一　さし聲より謠にかゝる所中略也其後あひのかしら打也うたひ一句上略を打也それよりうたひとむる所今のきさみにてかしら留るなり惣してわき能にはつゝみを置ぬ物也何の所もあひしらふ物なり

一　思ひをのふるはかりなりといふに吹樣あり呂なり木かけのちりをかゝふよと言に初中の呂をかへしてふくなり

一　所は高砂といふ笛かんのいろゑあり口傳

一　なるまて命なからへて笛かんより吹手あり

一　それも久しき名所かなと云所笛中よりふく手六下の手あり祝言に口傳

一　言葉のうちに松もろともにこのとしまてといふに呂のいろゑあり口傳

一　四海波しつかにてと云所に笛一切吹へからず

一　松こそ目出度かりけれと云笛高音よりひしきかけて吹口傳大つゝこかしらにきゝと祝言にうつへし

一　すめる民とてゆたかなると言にかんの高音口傳

一　猶〻松のいはれ御物語候へと云に大つゝみかしらところ四つ也ゆりのうちにてこす手なりゆりとゝむる所本のかしら笛くりあけ音とりを吹中の高音まてふく

一　南枝花はしめてといふにふきかけてゆる笛の手あり口傳

一　さしこゑの内かしら二つ也後一つはのらぬ也きさみにてをすこゝろにてのる口傳

一　敷島の影と云に笛吹樣あり六下ゆうゝと

一　曲舞にかゝる所のかしら上略也くあひのかしら心かけて打へし謠のうち祝言に聞分てうつへし上はの前にてはかしらなし

一　異國にも本朝にも萬民これを賞翫すと云所笛吹やうつゝみも打

きりてあけはうたはする事本のうちやうなり

一　立よるかけのあさゆふにと云所にて笛かんより吹手あり

一　中にも名は高砂のといふ所にて中かん六下祝言にふくなり

一　論議になる所三つ打返す也論議の内大夫と地との打様ありはる地はめるめる地ははる心地ろんき過てかく屋へ入いかにもにき〳〵こうつなり

一　海士の小舟にうちのりてといふ所に大つゝみ呂におとし打手あり笛高音のひしき一つ吹かけ祝言打やう口傳あり

一　沖のかたへいてにけりやと云所に吹様口傳

一　狂言大夫あひの物語を云大臣殿狂言にこと葉をかはし給ふ時笛ふきやう有この笛ふく事はあひ何ほとすきたるとかく屋へしらせんかため又狂言大夫ははしめの論議のする大夫かく屋へ入時吹笛の調子をうけ物語をする也されとも狂言のこと葉か調子必かりそめに成

ものなれはわきに調子をしらせんか爲にあい過時分に音とりを吹也

一　此浦ふねにほをあけてといふに高音ひしきかくる手あり

一　はやすみの江につきにけりといふ所はねて一つ吹やうあり口傳やかてひしくいかにも祝言にふくへし此ひしきの位を以て太鼓出る也太鼓打心かけて打へし笛もならひあり口傳京かゝりには鼓やかてこして太鼓うちこむ也大夫のはたらきを見ていきほひ候やうにはやすへしよるのつゝみの拍子をそろへてと云所にて鼓地かしらに習ひあり笛のふき様ありすゝしめ給へといふ所にて笛呂のたれを吹舞は神舞のかゝり急の急なり笛二段目のねろしにならひあり此手のるにもあらすのらぬてもなし此おろしを常に吹へからすわきの能にかきりて祝言の手と定め是をふく也口傳肝要也千秋樂は民をなて高音のひしきはねて一つ颯々のこゑそたのしむにてのひ〳〵と吹はねて吹おさめにひしきあり此ひしきのこゝろもちかんよう一番のおさめな

れはひしきにてうたひのおさめの色をあくる也心得肝要なりわき能の囃やう大かた如此一日の能のはしまりなれはわき能肝心なりわき能出來候へは其日の能は過るまて出來物也又脇のうふてきに候へは其日の能おさめまてきほひぬけ候てあしき物なり返〻わき能第一次第よりいかにも祝言をふくみにき〳〵と打へしかけ聲哀傷へゆかすかやうに心かくへし油斷候へは哀傷になりたかり候物也いかにも〳〵聲に祝言をふくませきほひ候て囃物なり惣別祝言と申にこここまかなる事はなきもの也春のはしめの御よろこひと一禮いへるかをしあまりに面白き手なこうたぬ物也囃おもしろからせすする〳〵とはやすを祝言と申なり謠もおもしろからせたるふしなこうたはすすりとこゑに呂をふくませむねに祝言を以うたふ物なり只面白きと申は幽玄れんほにふかくあるもの也返〻わきのうにこまやかなる事はなし謠のうち地こと葉たりといふともあひしらふへしわきの能につゝみを下に置候事まれなるへしいかにも〳〵しうけんにきほひぬけ候はぬやうにはやしうたひかけかんようなり

一　高砂弓八幡大かた同前のはやし也ゆみやはた少しつかに候惣別かやうのわき能位は定りたりと申せ共かふりゑほしの替り面により又は色により囃の位少替るへし大夫すちの面かくる事あり囃猶急なるへし鬼むきの外すちの面ほとはやき面はなし

一　老松放生川白樂天右三番はいろはかはれ共大かた同前なり取分老松しつかに候惣別のわき能のうちに老松ほとしつかなるはやしはなく候古木に花の咲たること〻くにはやすへしもし天女出る事あり紅梅殿と號す紅梅殿舞あらはしつかに三段の破の舞あり手すくなくする〳〵とはやすへし何も眞の序なりはやし大方ならぬ位習ひ有本の名は眞の達拜といへり眞の序とは平調返しを申也

一　吳服はやしの位の事弓八幡老松のあひた也しつかにもなく急に

もなく中の位なり

一　志賀伏見老松難波右何も色はかはれとも同時のはやしなり何も祝言也難波の梅は京かゝりは出たち唐かふりくろたれかみにて若おとこはやおとこ三日月なとをきて出る舞は破の舞也今春かゝりは鳥かふとにてしろきたれ髪にてあくせうをかけかくに舞なり是上かゝり下かゝりのかはり也天女の舞は破の舞なり大夫の舞ははきうなり

一　みもすそ浦島しらひけ大やしろ九世戸吉野寝覺の床色は替れとも大方似たる囃也何も祝言わき能なりわき能のはやし様はしめにしるし候いつれも其心持なり

一　八島通盛かやうのたくひ一せいはさし聲にうたひ出し月の出しほのといふ所より乘てはやすゆへに一聲の中の一せいともいへり八島にはちつけの板より引ちきつてと云所より同音の間大夫の舞ありいかにも仕舞の内かる〳〵とうきやかにはやすへしときの聲たゐて

磯の波松風はかりのと云所よりうたひもはやしもしつむるこゝをまへの位に囃候へは太夫の舞ならす候心得へしかけりきりの内二番なからいかにもたくさんにつよくきほひぬけ候はねやうにはやすへし

一　田村忠度經政さねもり清經色は替れ共大形同事也但たむらは心もちちかふ祝言第一の脩羅也常の脩羅にはやしてわろし祝言にはやすへしたゝのりつねまさ清經は公家にてましますゆへにゆうに尋常にけたかくはやすへし經政は陰の囃也夢中の囃也清經はうれへ第一の囃なり惣別わき次第しつかに候さしこゑ道行つねのことし忠度の一せいさしこゑの一せい也海士のよひこゑといふ所よりかけて一せいにうつ也後の一せいはうき〳〵とかろき一せい也打出しにならひあり都を出し時なれはといふ同此うたひの道行なりかる〳〵とうちてよし去程に一の谷の合戰と云所いかにもにき〳〵ときほふて打へし序破急の囃なり位ぬけ候はぬやうに心かけ肝要也油斷なきはやし

なり

一　ゑひらの囃の事つねの脩羅のうちにて取分きほふ脩羅也わきの次第しつかなり大夫の次第はかろしのらぬ也心得有へし口傳あり論議に花よとてと云所かしらうたぬ也何もこゝろかけはやすへし

一　松風の囃の事ならひのおほき囃なりわき次第にて出る時もあり名乗ていつるもあり大和かゝり京かゝりのわかち也一聲はしつかなる一せいなりふみこむる一聲なりいかにものりてよししつかなる一聲は松風より外はなし一せいの後當流はやかてさしをうたふ大和かゝりは一せいすき秋になれたると次第をうたふなり心つくしの秋風にのうたひ所おもしろやなれてもすまのうたひ所二段つゝみ打やう面白き心つけ共ありよく謠の吟くさりを聞合似相候樣にはやすへしよみしもことはりやなを思ひこそはふかけれといふ所にて大夫なく仕舞あらはつゝみ打きるへしかやうのこころはやし樣大事也左樣に

なく候へは大夫の仕舞ならす候さやうの所はやす人をよき囃と申なりか樣の事いつれの能にもおほしよく心かけ候て大夫の仕舞ぬかし候はぬやうに囃候事肝要なり物きの段に大つゝみかしらにならひあり笛しんのものき也笛はさたまりたる笛を心得さる大夫ははやく謠候事笛は物きの音とりを吹たさめてよりはよの事を吹へからすさるによつて大夫笛をしらされは心得ゆかす皷は次第にあらす舞にてもなき物なり一拍子にのらぬ囃なりうちむすふ手うたぬ也舞いろゑの舞なり初段より二段めしつかに候笛に二段目に戀の手ありもん有能といふは取分松風野の宮也破の舞のまひとめに習ひあり常には舞とめてうちあけ候大夫上手にて囃も氣にあひ能の位もよく乘て面白けれはつねのことく舞とめすして大夫なつかしき風情をして松をはるゝとしてはしらのきはにて見をくる其時大小打あけにならひありかくのことくの舞とめの時つねのことく打あけ候へは仕舞ぬけ候て

ならす候めつらしく文をつけてまひ候時は常のかしらにてうちあけてうたはするなりかやうの事まれなることなれはよくこゝろかけ候はねはけかありよく大夫に氣をつけへし笛大小ともに上手のはやしにこれをまふか樣の仕舞はたほく候て一代のうちに三度に過へからす前の舞は色ゑの舞也眞實の舞にあらすいやしきあまなれ共行平の思ひ人たりしによりゆうにやさしくはやすなり

一　ゆやの囃あさかほの次第しつかに候初めはおきつゝみいかにも尋常にうちさて打上かしらはつきと三つほとうつへし宗盛御出候おきつゝみなれは如右にうちてよし常のなにかし里人なとのいて候おきつゝみには天と地とのちかひなり惣別のおきつゝみわきの位により眞草行有へし文のうちに笛のいろゑ候事有へからすゆやの囃幽玄のつよき位也曲舞のかゝり大和かゝりは打きらす京かゝりは打切てうたひいたす也舞のかゝりも大和かゝりはつゝみの聲をうけ破のかゝり也京かゝりはしめをいろゑて舞にかゝる色ゑの舞と中也序破急の舞なりならひに短册の段習ひあり大夫歌に心をよすると見へし時はいかにも〳〵眞にはやすへし大夫短册をかき候てより仕手の身かまへをみてはやすへし笛も心持同意也大夫足のはこひを見てさら〳〵と吹上よしありけなるとうたはすへし笛も皷も打上ぬかり候へは仕舞ぬけ候て大夫是をきらふ也祝言にうき〳〵とはやすへし何も松風と此能はならひおほき囃なりよく稽古すへし陰の中の陽の舞なり

一　野の宮の囃の事いかにも〳〵しんに囃へしあらさひし宮所と云所なといかにもさひ〳〵と似相たるやうにはやすへし一聲は中の一せい也舞は序の序也かんかゝり也文句ある能と是をいふ松風のことく二段にあり是は鳥井を目つけとす御息所にてましませはいかにも高く尋常にはやすへし松風と大きにちかふへし是も後の舞に本に舞留す破の舞の如くに舞候て舞とめ時分に鳥井をなつかしけにはる

はるゝ見かくる其時打あくるもありこれもまれなる事なり

一　はせをのはやし大夫次第陰也一聲は中の一聲なりまひは序のまひかんのかゝり序の破の能なり舞のうち眞に囃へし心持あり舞過てはにきやかに心を物すこく同しく一聲はものすこくつゝみひつきる心あり口傳おほき囃也此等は眞の能にあらす草の能にもあらす行のはやしなり

一　江口のはやしの事いかにも〳〵こくりとはやすへしくつかふりといふ事ありこの一せいをくつかふりの一せいと名付其子細ははしめを次第に打出中を一せいにうつ大夫出候てより又次第に打によりくつかふりの一せいと是を云それは細〻は左様にはうたぬ也又曲舞の内くはへかしらより前にもてこす拍子と云事小皷にあり口傳花も雪も雲も波もと云所に大夫心持あり秋の水みなきり落てといふ所つゝみうたぬ子細あり笛も眞の序也平調返し共これを云人またきのかゝりと云事もあり何も大事おほきはやし也かりなるやとにと云所に

こしはたらきあることあり大夫のふりをみてやかてかけりのつゝみ打出すへし笛ふき出し油斷候ましく候つゝみ見つけとは笛より吹出すへし手から次第かやうのたくひあまたある事なりよく心かけへしつゝみのあやすき同しくらんもんにはやすへし

一　井筒の囃大事のはやしなり中入のまへはふかしき習ひもなく候曲舞のうちしんに囃へし幽玄のちやう上也後の一せい中の一せい也序破急なり舞は序の舞なり序へかゝる前に皷大小ならひあり一番のうちの肝心也なりひらの形見のなをし身にふれてといふ所より序へかゝる間の事なり三段のはやしといへり此心持習ひなけれは序にかゝられぬはやしよく口傳有へし惣別此能は習ひおほき囃なり少上手功をも請さる人のならひ候はん事まことしからす一番のうちに陰陽をわかつ囃也女共みえす男なりけりと云より陽の陰なり前は陰の位幽玄のはやしなれはゆうにはやすへし口傳おほしきりしんにはやすへし

一　定家次第しつか也物すこさ夕へなりけりといふ所文句にあひてはやすへし笛もいろゑ有へからすくり上きさみの内より謠出すへし曲舞しつか也後の一せいにならひありこの一せいと云こさぬ一せい也かしらをもうたすきさみ拍子をよせてうたひいたさする也ゆめかこよこうたふ所は一聲にあらす御らんせよ身はあた波のと云所一せいなりかゝるくるしみ隙なき處にあら有難の御法にて打上ならひ大事あり常には打上ぬ秘事也舞は序なりもとのことくはひまこはるゝや定家かつらこうたひ候より陽の位なり陰陽の取合おほき囃也心持分別して囃へし時により破の舞にも囃へしいつれも大夫身かまへをよく目付所口傳なり

一　ゆふかほ序のはやし也一聲は中の一聲也序の留なり序の舞のかゝりにはやす也是も井筒の心に習有大事のかゝりなり眞のはやしなりいかにもけたかく尋常にはやすへし

一　千壽のはやし陰の中の陽の囃也但舞のうちの位の事也曲舞きりのはやしやうあさ〳〵ことつこしたるはやしなり白拍子のまひなれはあまり眞に尋常にははやさぬ也江口同前

一　二人しつか是も白拍子の舞なりあまりに眞にけたかくはやさぬ能也曲舞の内此類の能のうちにてしつかに候序の舞呂のかゝりなりさら〳〵こしなやかなるはやし也

一　東北院是は木の精なり何となくする〳〵こはやすへし是もけたかく尋常にはやすにはあらす乍去花のせいなれは朽木のせいなこにはちかひ候あまりにはやさぬ能也しら拍子の舞よりしんに囃すへし序はつねのことし舞過て今春かたには論議になすよの座にはいつものそく也きりいかにも花やかにはやすへし

一　楊貴妃の囃次第陽也さく〳〵こかろき次第なり天にあらはねかはくはこいふ所戀慕の心もちされとも世中のこいふより哀傷なりい

かにもしんにしつかに囃へし舞曲舞なれとも楊貴妃一番にきして居るくせまひのくらゐ也あはれ小蝶のまひと云よりいろゑあり本のいろゑ也眞のものき也松風なとのあま乙女のものきにははるかにちかふへしいかにもうつくしくしんに囃へし玉のかんさしとり出し方士にあたへたひけれはと云所わきの仕舞習ひあり形見のかんさしを見定めいやとよ是は世中にとうたひ出す心持よく候いまた見さためすして謠出す事あしき也是習ひ也惣別此わきはならひ心付おほきわき也よく口傳すへし楊貴妃わきに物を仰候とき謹而かうへを地につけうけたまはるへし又返しを申時も同事なり舞は序の舞なりかんのかゝり眞の舞なりこの能は大夫せいころなと大きなるはあしく候またとしよりたる大夫なとかたく斟酌すへし其子細はたとひ上手たりといふ共年よりぬれは其すかた見くるしきなりつまはつれいやしき也さるによつてとしよりぬれは楊貴妃の能はなりかたき物なり返〻此能眞の能也よく心得へし

一采女の囃の事野の宮千壽の間なるへし野の宮はみやす所也囃も眞にはやし候千壽は白拍子也さるによつて囃もさうなるはやし也うねめは右二番の間なりと申は采女は宮女なり宮女にて候へ共位さかりたる宮女なり然によりて囃も其心得有へし序の舞あり是少かろし和歌の心を舞の内より持へし口傳

一鞍馬天狗の囃の事善界と大形似たるはやしなり去なからさいたうの鬼也太郎房舍那王殿へこゝろをそへられたるやさしき風情なり囃も其心得有へしはやきくらゐは善界よりはやく候大夫もしあくせうをかくる事あり其時はやしの位ちかふへし

一せかい囃の事りきたうの囃也いかにもゆたかに落付て大夫はたらく能なり其心得有へし

一鵜飼松の山鏡野守大形同し事也さりなから何も色は替れとも鵜

飼位いたる能なり囃もとに大事也前のせう入はにうたひのうちきりきりとはたらく所あり此はたらき大事なりあまりに身かるにはたらき候へはとしよりたるせう似合す又ゆる〳〵としつかにすれは鵜をつかふきをひなし分別肝要なり後の鬼常の鬼にあらすめいとの鬼なりはたらき口傳松の山鏡後鬼めいとの鬼也同前

一　昭君はたくひすくなし前の一聲はしつか也さしこゑに謠の内哀傷也同しく小うたひのすゑの謠所同前なりさしこゑ曲舞同前入は哀傷の中のあいしやう也出は急なり當流には出はに太鼓あり昭君の出所一せい也若乱序にて出るもあり急の急なり大事の能囃也鬼のはやしにかやうの類まれなるへし

一　紅葉狩の囃の事大夫の次第しつか也わきの一聲はや一せい也曲舞幽玄の戀慕也舞のうちさうの囃也女の舞とは申せ共本躰鬼神なれはまことの女にあらすはやし其心得有へしさく〳〵とすらりとした

る囃なりりきたう第一の鬼也つよくたくさんに囃へし

一　春日龍神の囃の事鬼の序さいたうの鬼なりまく屋より出るほとの間五段の囃此はやし大事なり龍神のはやしなれはおろそかなる囃にあらすいかにもたくさんに大夫のきほひぬけ候はぬ樣に心付はやすへし

一　春榮男舞也常の男舞よりしつかに候但こかうよりはかろしきり第一の能也きりは祝言曲舞也出は地謠に味あり千代のこゑそふのたしはあちありよく位を分別してうたふへし囃の位は次第道行物あはれに心をもつへしさし曲舞同前きり祝言なれはいかにもたくさんにきやかにきほふてはやすへし

一　七騎落のはやしの事舞は御前の舞なり眞に囃へし西國の兵はせさんすれは程なく御勢二十万騎になり給ひつゝと云所より祝言也はやしの心持かへてうき〳〵とはやすへし初はきり第一の能也はやし

其心得有へし

一　猩々の囃の事出はさかりは也うたひのうちことなることもなく候まひ破の舞也みたれあらは眞草行三有へしよく大夫のふりを見わけてはやすへし眞のみたれははやし候人もまれなるへしみたれの見様の事大夫酒をくみてのみさて後へ二足三足しさりてさて急のあしをふむ時乱又大夫くわつして足を折時みたるゝもあり又作物なくて乱れ候事もあり其時の見やうは大夫乱れ候はんことてはこし帶をする物也是見所也乱れのはやさの位は大夫諸候位をむねに分別すへし

一　小塩うき〳〵こしつかに囃へし幽玄也序の舞杜若よりはちこしつかに候ゆう〳〵こつよく囃へし業平の舞なれはいかにもけたかく尋常にはやすへし爰に大事の習あり神舞のこゝろもちあるへし

一　三井寺の囃の事一せいはかろき一せい也たくさんに打へし鐘の段うき〳〵こ囃へし惣別いやしき狂女なりはき〳〵こつよくはやすへしさうのはやし也

一　百萬わきの次第陽なり但しつか也念佛の内太鼓にかしらつけぬ也いろゑありさう曲舞きり〳〵こはやすへしいやしき狂女なれはつよくたくさんに囃へし後のかけりのりて囃へしかけりのうち乘てたくさんに囃へし子にあはぬさきはしやつきりこ囃へし子にあふてより大夫うらめしき心持なりきりは祝言也さら〳〵こ囃へしさうのはやしなり

一　西行櫻次第うき〳〵こ囃へしあの柴かきの戸をひらひて内へいれ候へこいふ所狂言のあひしらひありねはく候へは櫻花咲にこうたはれすさら〳〵こあひしらひ櫻花さきにこうたふ習ひなり舞は序あり笛にも習ひあり古木に花のさきたるやうに吹へし太鼓過て大小の心もち肝要なり太鼓あるうちはにきやかなり太鼓過ねれはさひしきなり大小の心持を以さひしからす後夜の鐘の音ひゝきそすると云所

にて太鼓笛ならひあり

一　遊行柳小塩と同し心もちの舞の位なり同前西行櫻に似たりちと しつかにをしほは業平の舞なれは尋常に囃へし序のうち神舞のこゝろあり幽玄第一の能也遊行柳は朽木の精なれはさうにはやすへし西行櫻は花のせいなれは遊行柳よりしんにはやすへし

一　安宅の囃次第にき〳〵と打へしさりなから心はうれひなり道行なさら〳〵と囃へしつとめの内弁慶か最後のつとめなれはいかにもつよくけなけに囃へし勸進帳のうちよく口傳候はては筆に書かたしくりさし曲舞のうち述懐の心持なれははなやかにうきたつ心にあらす舞は御前の舞のやうなれ共御前の舞にあらす弁慶關守に心をつけ油斷をせすして舞候へはぬかりたる事なし是なる山水の落て岩ほにひゝくといふよりなを心持しやつきともつへし舞の名は大聖舞といへりひゐの山衆徒の舞の手なり弁慶山門そたちにて此舞をつねに

もてあそふと也まひの内破急の位也子細ありきりはやし様さら〳〵とはやすへし其心得なく候へは大夫の仕舞成かたし大夫いそく仕舞はやし心得有へし

一　卒都婆小町の囃の事わきの次第しつかに候大夫の次第又位静かに候いつれの能もそれに似たる能ある物にて候このそとはこまちはたくひすくなき能也大夫のはたらく事もなく謡まてにてする〳〵としたる能なれはつゝみのうちうたひ肝要なり大夫のあしに似合たる様にはやすへし小町はゆふにやさしき女なれ共年よりぬれはかたちかわりぬれともさすかつたなき狂人にあらすいつれの囃にも順にはつる位此かけりにかきり順をはつしさら〳〵と破に囃へし口傳有之

一　さか髪の囃の事物狂とはいへ共世の常の物狂にあらす延喜第三の御子にてまします其つき物怨霊なとの物狂にてなしはやし心得有へしいかにも尋常にけたかく花やかに囃へし

一　反魂香の囃の事哀傷の中の哀傷也いかにも心持あはれにもち物すこくうれへに囃へし

一　をはすての囃の事あはれなる囃也あはれといつは聲をもいからすほけて打へし後よわなる囃也老女の舞大事也習ひおほし心つけおほきはやし也きり眞のしんなり

一　錦木の囃男の靈と是をいふ戀慕第一の能也わきの次第しつかに候大夫の次第さく〳〵とかろき次第也けふのほそ道わけくらしと云所よりかろく引立て囃へし舞の事鈴木の舞と同前右二番は太鼓おき舞の内にての急なりきりいかにも舞の位より引はへてのりてかろく花やかにはやすへし必舞過てまひにくたひれてたるむ物也よく心かけへしきりたるみ候へは能のきほひぬけ候て其能ふてきなる物也惣別の能これにかきらすきりの位肝要也一番の間の肝心なり取分錦木松虫のきりぬかり候ては大夫まはれぬのうにて候さり〳〵様〳〵の夜遊の盃のあたりよりいかにもたくさんに舞へしきりの留り破に留る也

一　楊貴妃井筒夕顔しつかさ同し位也楊貴妃は立曲舞なれとも右二番の居曲舞の位なり子細あり能の様子も右の二番にかはり候へとも位同し位也但楊貴妃はわきの次第かろしはやし右二番よりけたかく打へし

一　葵の上舞はなけれ共五段の囃也一せいはのる一聲也みやす所にて候へは尋常にはやすへしくときのうちつゝみなし思ひしらすやおもひしれと云より地謠はやし油斷なく急に候様に謠囃すへし扨うちのせかくれゆかふよにて謠囃いかにもしつむへし大夫の入はしつめすしていられぬ能なり祈りの内山伏のいのりなれは神子陰陽の祈りに替るへしいかにもおそろしくつよくもち囃へし序破急ある祈り也はたらきの内いかにもたくさんにつよくはやすへし囃のきほひにて

大夫のはたらきなり候もの也囃あしけれははたらかれす候きり急に候なりりきたうのはやしなり

一　海士の囃の事大事也次第いかにもうき〳〵ことはやすへし大夫一せいかろき也これこそ御身の母海士人と云所しんに心得てと也玉取の段かろく舞へし出は太鼓あり笛のかゝり大夫大臣に御經わたし愁歎候時舞にかゝるへし大夫により色々の仕舞あり心得見さためてかゝるへし海士人の舞はやしなれはさうの囃なり去なから龍をいたゝきたる能に限りはやしぬかり候へは龍のいきほひうせはて大夫はたらきかたしよく心得囃へし一切の能出立面いたゝき物により囃のくらゐありよく口傳稽古すへし

一　三輪の囃の事陰の次第わきの名乘もしつかに候いかにもさひしき風体也中入とりわけさひて囃へしくりさし曲舞の前は殊勝なる位也曲舞は舞曲舞也又をたまきにはりをつけと云所まて腰をかくるもあり曲舞論議の前は杜若よりしつかに候これそ神樂のはしめなると云太鼓の打出し習ひあり乘にもあらすのらぬにもあらざる位也三拍子といふ事神樂の前にあり神樂へかゝる所の事也太鼓のかしらと大小鼓のかしらをうけちはや振とうたふ是三拍子なり神樂は三段舞は一段也序の内中の位いかにもしつかに候但するはちとつめて打おろす時打出の序の位にしつめておろす事習ひなり初段しつかに候二段目よりそろ〳〵とつめて神樂より舞になり候一段迄は神樂の位なり笛神樂に似たる手を吹候てより舞急なりさて和歌うたひいたしてきりに太鼓打あけてよりいかにもにき〳〵ことはやすへし油斷ありてはさひしき也きりの心持肝要也返〻小つゝみ取分大事なり神樂の打出し一番のかなめ也小鼓打出しはしらかして頭をうちたつとつと〳〵と打いたしいかにもさきたゝぬ樣に三輪の明神の御舞なれは眞に殊勝に囃へし扨次第〳〵につと〳〵とつめて舞になすへし必後にくた

ひれたるむ物也たるまぬやうに前かゝより心かけ肝要也舞のかゝり
當流はこへいにて舞今春かゝりは扇にて舞候こへいをすて候時舞也
まひになり候てよりは破の舞の心也急也おもへは伊勢の所當流は太
皷うちあけそのまゝうたふ大和かゝりは太皷打上つゝみのかしらを
うけうたひいたす是兩座のかはりなり

一　邯鄲のかくの事はしめのかゝりに序を吹事くわらをもとらせか
たをもぬき太夫に舞のこしらへをさせん爭のまひ也其外習ひおほき
序也段の數十二段いつれの段にも名有如此に舞候へはかくなかく候
左樣に候へは實はつまり過たかり候物也其心かけなき囃手はつめ少
くたひれ後次第にたるむものにて候左樣に囃候てはきよくなく候前
かゝより此かくはなかしと心得いかにもしつめゆうをあらせ候て後
つよにはやし段〻に位をこめ序破急につめ候へはよきかけんにつま
る物なりたゝみのたいををりて破急と舞なり笛常のかくにかはり候

て三段目を二段にかへし吹事あり夢中の舞の心也子細あり太皷右の
習ひ同前也盧生の夢中の舞なれは心得分別有へし夢の中は祝言也い
かにもにき〳〵と囃へしゆめ覺て後さゝりをひらき候所懺法也心持
しんにたつとくはやすへし

一　角田川いやしき狂女也三井寺百萬は子ゆへに狂乱し國々を廻り
候へ共子に尋あひて末は目出度祝言也すみた川は身をやつし國々を
めくり候へ共終にあはすしてむなしくなりたる跡を見幽靈にあふた
る也かゝるかゆへによつて哀傷の中の哀傷と名付物あはれに囃へし心
付たほき能なり一聲の中の一聲なり

一　鐵輪中入より前はうらみの能なれは其心得相應に囃へし中入よ
り後はものすさましくたそろしき躰なれは其相應にはやしもつよく
たくさんに力をそへ囃へしいのりは陰陽の祈り也小つゝみつと〳〵
にむらなきやうに前かゝより心かけ囃へし肝要也山伏の祈りにちか

ふへし祈りの末つゝみをすてゝ謠を聞へし

一　通小町の囃の事男の靈と是を云初の次第陰也戀慕のはやしなり かけりなどのこころいかにもつよくしやつきと囃へしうきやか成はやしなり油斷候へは大夫はたらきかたしいかにも〳〵きたてさくさくとはやすへし地謠たるみ候てまはれぬ能也返〻地謠肝要也

一　こかうの囃の事男舞の囃の中の序也位中の位なりこかうのつほね大内上臈なれはいかにもけたかく尋常にはやすへしさうのか〻りも也きりは破のこめなりにき〳〵と囃へし幽靈の心持なり

一　源氏供養の囃の事色ゑのはやし也紫式部の舞なれはいかにも尋常に囃へし一せいは中の一せい也曲舞の出しは當流はうちきらせて出すなり今春か〻りは其ま〻うたふ也曲舞の内大事の囃也二段曲舞なり心持習ひおほき能なりいかにも〳〵うきやかに囃へしきり眞のきりなり後つ〻みならてはあく候間かしらをこませ打へし小皷まて也

如此の能何も同前此外色〻秘曲有へく候大小此心持有へし

一　浮舟玉葛大方似たる能なり源氏にてつくりたる能なれはきはめていかにも尋常に囃へし初の一聲はしつかに候後の一せいははやき一せい也浮舟は少狂亂のこゝろあり玉かつらより少さうに有へし是こまかなるならひ也うき〳〵と心を陰にもちさすかたるます此類のちにかけりなどある曲舞こうたひとめ頭きられぬこゝろよかるへし

一　龍田姫の囃の事是もゆうなるへし舞神樂なりこへい捨て舞になるかくらのつめやう三輪と同事也舞になりてより破のまひの心也舞になり候て笛に神樂手と云事ありきり花やかにたくさんにはやすへし

一　富士太皷次第陰也よするや時のこゑ立てといふ所にき〳〵とはやすへしかくの内しつかにのりて打へしかく序あり打あけきさみにて打あけもちたるはちとはいはするなり序破急ありさうの囃也初は

れんほの心持に似たり中程は哀傷也後きりに成りて哀傷をすて〻花やかにたくさんにはやすへし

一　柏崎の次第は陽也道行と〳〵くくときのうちうたぬ也曲舞口傳有へし數のうちの曲舞也大事の曲舞なり哀傷第一のはやし也物きの段とに大事なり次第舞にてもなき物也一拍子にのらぬはやしなりうちむすふ手をうたぬ也心持あはれにもつへし

一　善知鳥の囃の事後の一聲いかにもうき〳〵ことはやくなくのらすうつへし心持口傳破のとめ也あいしようの囃なり陰の位なり曲舞の出はこゝろありかけりの打上大事也太夫によくこゝろをつけへし

一　盛久の囃の事御前の舞也物語第一の祝言なりうきやかに打へし破の留なり曲舞は御前にての物語なれは謠をよくそたて〻打へしきり祝言也酒宴なかはのうたひのいたしはむつかしき出はなりよく心得出すへし

一　融の囃の事前はいかにも眞なる囃也こひて老木に花の咲たるやうにはやすへし大事のはやし也あらむかしこひしやと云所に笛色ゑあり大事のいろゑ也後の出は急也太鼓過てきり大小手からあるはやしなりいかにもたくさんにき〳〵と囃へし公家の御まひなれはいかにもけたかく囃へし舞は急の急也

一　自然居士東岸居士花月放下僧いろはかはれとも大方似たる囃也さうの囃也羯鼓を打時大小しつむへし羯鼓の内あまり手打まし

一　藤榮のはやしの事初は幽玄なりなるをの出はさかりは也太夫の舞男舞也曲舞まひ曲舞也うき〳〵と囃へし羯鼓の舞ありきり祝言也

一　たんふう前はきり也後鬼也留は破のとめ也

一　大會しつかにゆうにつよくはやすへし

一　松虫の囃の事錦木と同前曲舞さく〳〵とかろき曲舞なり太夫の次第かろし舞は急の舞なり同きり舞の位よりきりをたるみ候はぬ様

に心かくへしたくさんに花やかに打へし

一　羽衣の囃の事天人の舞なりいかにもけたかく尋常に囃へしきり祝言なりいかにも花やかにたくさんうつへし

一　杜若物きあり中の物き也曲舞は二段曲舞也舞序の舞也きりさく〳〵ことはやすへし

一　あつもりの囃の事ちこの脩羅なり囃やう心得有へしつねの脩羅よりしつかにいかにも眞なる脩羅なり平家の公達にて候へはいかにもけたかく尋常にはやすへし

一　關守檜垣をはすていつれも似たるはやし也右の三番は老女の舞何も大事のはやし也右何も心持習ひおほき囃なり取分關寺此うちにて猶大事の囃なり此等は名人こうを得さる人ははやし候事まをしからす大概のうち手ならはかたく斟酌すへし囃の位はいつれも陰の位なり老女の舞なれはいかにもしつかにこひて眞にはやすへし古木に花のさかんがをく手なともいかにもかれたる手のあまくなきかしらなとをうたひの文字くさりなとのたもしろくゆく所にかすませて打へし同しく小つゝみの手の事是もあまりに花やかなる手をはうたぬ也いかにも似合たる事をうつへし取分何も舞のうちしつかに候關寺の舞なをしつかに候百年はといひて舞にかゝる所肝心なり笛つゝみよく口傳あるへしいろゑ候て舞にうつり候ところ笛いかにもしほらしくかゝるへしつゝみ相應に囃へし眞のしんのはやしなり物にたとへは風の吹に朽木にはしらをかうたる心持なりつよくはりをかへは朽木おれ候なりあまり又かけん過てよはくかうはりをかひ候へは風にこたへす候右の關寺のはやしの心持此たとへなり聲なともあまり花やかにはかけぬなりをは捨は關寺よりはかろく候むかしの名人もこれらをは終にはやしすましたる事はなきなとゝ申され候

以上九十七ヶ條囃の奥書此卷にかき盡すなり此傳書の數〻家

を繼子より外弟子の事は申に及す二番目の子といふとも見す
る事は中〻あるましき事也か樣の事しりておほく候へは秘書
といふ事はなしつたへぬをもつて大事は殘り候ものなり

せあみ

まつ稽古の條〻大形此卷にしるす凡能藝をたしなまんと思ふ人は第
一のいましめあり第一に好色博奕大酒三重戒を古人持なり稽古はつ
よかれ淨識はなかれ風姿花傳にをゐて大方七歳をもつてはしめとす
此比の能のけいこかならす其物は自然と次第にとに得たる風躰ある
へし舞はたらきの間音曲もしはいかれる事なとにもふとしひいたら
さらんをまかせてこゝろのまゝにせさすへしさのみよしあしとをし
ゆへからすあまりにいたくいさむれはわらむへは氣をうしなひての
うものくさくなりたちぬれはやかて能はとまるなりたゝ音曲うこき
まひなとなくてはせさすへからすさのみのものまねたとひすへくと
もをしへましきなり大庭なとの申樂にはたつへからす三番四番の時
分のよからむするに得たらん風躰さすへし

十二三歳

一　この年のころよりははややうゝ聲も調子にかゝり能もこゝろ

つくころなれは次第〳〵に物數をもをしゆへしまつ音形なれは何としたる事も幽玄なりこゑ自在なり二のたよりあれはわるき事はかくれよき事はいよ〳〵花めけるなり大かたちこのさるかくにさのみこまかなる物まねなとにせさすへからす當座も似合す能もあからぬさうなりたゝ堪能になりぬれは何としたるもよかるへしちこといひこゑといひしかも上手ならはなにかはわるかるへきさりなから此花はまことの花にはあらすたゝ時分のはなりされは此時分のけいこすへて〳〵やすき也さるほとに一部の能のさためには成ましきなり能稽古やすきこころを花にあてゝわさをもたしやかに音曲をも文字にさい〳〵とあたり舞をも手をさためて大事にして稽古すへし

十七八歳

一　此ころはあまりの事にて稽古たすからす先聲かはりぬれは第一の花うせたり姿もこしたかになりたれはかゝりうせてはたとかはりぬれは氣をうしなふ結句見る物もをかしけなるけしき見ぬる事はつかしさと申彼是に退屈するなり此比の稽古はたとひ人にわらはるゝともそれをはかへりみすして内にてこゑのとゝかん調子にて一期のさかひこゝなりとしやうかいにかけて能をすてぬより外は稽古あるへからすをこたりぬれは其まゝ能はとまるへし總して調子聲によるといへ共わうしきを以て用へし拍子にさのみかくれは身なりくせ出來物なりまたこゑもそんするさうなり

二十四五歳

一　此比よりは一期の藝能さたまるはしめなり去程にけいこのさかひなりこゑもすてになをりすかたも定まる時分なりされは此道に二つの果報ありこゑと身なり此二つは此時分さたまるなり年さかりにむかひ藝能の成就するところ也さるほとに上手いてきたるとて人も目にたつる也もと名人なとなれとも當座の花にめつらしくてたちあ

ひ勝負にも一且かつ時は人も思ひあけ主も上手と思ひしむるなりかへす〳〵すこしのあひた也これも眞實の花にはあらす年のさかりとみる人の一且こゝろのめつらしき花なり眞實の目きゝは見わけへしこの比の花こそ初心と申ころなるをきはめたる樣にぬしのおもひてはやさるかくにそはみたるりんせつを仕出したる風躰をするこそあさましき事なりたとへは人もほめ名人なとゝいふとも是は一たんめつらしきはなりと思ひさとりていよ〳〵物まねを直にし定め名を得たらん人に事をこまかにとひてけいこいやましにすへしされは時分の花をまことの花としるこゝろは眞實の花に猶とをさかる心なり只人をに此時分の花にまよひやかて花のうするをもしらす初心と申は此ころの事なり一かう案して我位のほとをよく〳〵心得ぬれは其ほとの花は一期ちらす位よりうへの上手とおもへはもとありつる位の花もうする也よく〳〵心得へし

三十四五歳

一　此ころの能さかりのきはめなりこゝにて此條〻きはめさとりて堪能になりぬれは定て天下にゆるされ名望を得へし若此時天下のゆるされは不足に名望も思ふほともなくはいかなる上手なりともいまた誠の花をきはめぬ仕手と知へし其程にあかるは三十四五までの比さかるは四十以來の事也返〻此比天下のゆるされを得すは能をきはめたるとは思ふへからす爰にてなをつゝしむへし此ころきはめすは此後天下のゆるされをえん事返〻かたかるへし此比は過しかたをおほえまたゆくさきの手たてをもさとるなり

四十四五歳

一　此比より能の手たて替るへしたとひ天下にゆるされ能に得法したり共それにつきてもよきわきの仕手をもつへし能はさからね共ちからなくやう〳〵年たけぬれは身の花もよそめの花もうするなりま

つけ肝要に候またならひ候人大かた口つき候にしたがひ次第〳〵にひきく習ひ候人にたかくうたはするもの也習ひ候人のうたひのよしあしをき〻入なをし候はんため也

一　立昌のならひやう二色に有へしうたひの本をかくひとの曲を心得て文字うつりをはうつくしくつくるへき事またうたふ人のふしをつけて文字をわかつへき事文字によりてか〻りに成て五音た〻しく句うつりの文字くさりのすへ様に聞よくてゆう〳〵と有やうにふしをはつけ候なりさてうたふときその曲を心得わけてうたへは曲のつけやう相應してよきなりおもしろきかんあるへししかれはた〻ふしの付やうを以てうたひのはかせとす文字うつりのうつくしくすみにこりの曲に似合たるかか〻りにはなるなりふしはかたきか〻りは文字うつり曲は心也出よきいきも氣もおなしものふしきよくといふも同し文字なれともうたふ時は習ひやう別なり稽古にいはく聲をわすれて曲をしれ曲を忘て調子をしれ調子を忘れて拍子をしれといへり又謠をならふ條〻まつ文字をおほゆる事其後ふしをきはむる事其次に曲をいろとる事其後こゑのくらゐをしる事其後こ〻ろほとをもつ事拍子は初中後へわたるへき事かんようなり

一　聲を使ふ事聲のむきたる時を失はしとつかふへし聲のくさりなと〻申たるもつかひたる後に藥をのむへしこれこゑのよくなるたしなみ也聲をつかふ事其聲のむきによるへし又氣力にもよるへしわうのこゑをはたすけてつかひしゆのこゑをはをしてつかふへし聲につかはれてよきこゑありこゑをつかひてよきこゑあるへし横竪ともにあるこゑをあひをんとは申なり宵曉の事よひには物數をつかひてあかつきはすこしすくなくつかうへしをさら横のこゑなとをは曉は聲につかはれてこゑをいたはりてれさめて聲をほんにつかふへし返〻こゑのむきたる時をうしなはすつかふへき物なり聲をつかふにはよひ

に曲舞五つはかり地聲にてうたひ納に小謠五つはかり調子高くうたひあかつき又地こゑに曲舞三つ四つ謠わさめに調子をあけて小謠三つほとたかくうたひさて何にても食をそと用へしさなく候へはつかひ候聲かへり候ものなりしよくを用るも秘事なり五十日はかりつゝけてつかひ候へはこゑかるゝものなり其ときこゑをつかひぬき候へはよき聲になり候也聲の一稽古と申は夏百日かん三十日これをいふとりわけ冬のうち本なり

一　稽古の時つゝみうちにいましむる事第一に身なりをたしなめ第二にくせのなきようにたしなむへし第三にや聲かしましくなきようにこゝろかくへしやこえのたかきはいやしきものなりやこゑにせいを入れは身なりくつれかほにくせ出來つゝみもしたるき物なり第四にきさみの事うたひのめりかりふしによつて高くひきく有へしそうたゝいのきさみはひきく打へしたかきはかしらにもまきるゝ其うへ

かしましくいやしき物なり又はしたるきさうなりかへすゝいましむへしまた小つゝみはおつかちになるはこれもかしましき也おつときさみと陰陽和合夫婦なりまたは阿吽の二字にも是をたとへ候乙ときさみをとりあはせ等分にうつへし是陰陽和合といへりきさみをなかくつゝけたらんにはおつにていろゑ今のおつはいつくへ行たるよと人おもふほとあさをさましき候はねは必かしましき也總別手のまへの手曲のまへの曲とて手をうたんまへには手に似たる地をうたすきさみの手をうたんとおもはゝ前の地を乙に打へし又乙よりうつ手をうたんと思はゝ手の前の地をきさみに打へし左様にうちわけ候へは手に水きはたち手のいせい是あつてかんある物也これ秘事也大小にかきらす太鼓によらすいつれのなり物にもかきらす此心得諸藝にわたるへし此段鼓の巻にくはしくあり

一　惣して諸藝の稽古の心持けいこをはれとしくかいを常とす是諸

藝のこゝろもち也

一　萬年にしたかひ藝の心もち十七八のころまてはいかにも〳〵花のつほむ樣に心得へし二十四五三十四五の内はいかにも花のさかりなるをくに心得へし四十四五五十迄は花のさかりすきやうやくかつちるこゝろもちなりところ〳〵に花の殘るかをくにこひて藝をすへし五十四五六十にならは又二十四五にかへりてわかく花やかにけいをすへしはや其時分はちからもおち藝のかさもなくなりさる時分なれはいかにもわかやき花やかに心持候はては藝わかき時の半分にもきこえ見えぬものなり六十すき諸藝斟酌すへしそれをすてかたくて七十までも藝をすれはわかき時のれほ白まてうしなふ物なり返〻心得へし

一　能をしゆる事一番に仕舞ををしへよさてやう〳〵仕舞おほえたる時二番に身なりをなをせ身なりやう〳〵なをりたる時くせをなをせ扨くせの大方なをりたるこき仕舞の位をこめよかやうに段〻をれつてをしゆる事師匠する者の秘事也一番より百色も取かけなをし候へは十方にくれ候て覺られす退屈して藝わする〻物也此心かけ肝心也扨二三番なし候てより裝束面にてまはせ裝束あつかひ面位ををしゆへし

一　笛は第一しやうかをれほ白させよ第二手うつりをなをせ第三皷をおほ白させよ第四うたひをおほえさせよ第五仕舞心を知せよとかく第一仕舞心なくは手のふき所いろゝところそはつらなるへし音は漸〻に入へし返〻ほそ竹にて吹ならはせぬ物也縱しか〳〵ならす共ふとき竹にて吹ならふ事肝要也

一　大小共につゝみをしへやうの事まつかまへくせ手あたりやこえにかまはす數をほんにおほ白させさて皷少打覺たらんとき手あたりをなをせ手あたりにて皷の音ちかふもの也それにてひときはつゝみ

あかりてきこゆるもの也さて其次にかまへをなをすへし又かまへなをり候へははつくん皷見事にみへ候物なりそのつきにくせをなをせそのゝちにやこゝをなをすへしつゝみあかり候程自然とやこゝはひとりあかる物也さて如此段々になをしあけ候てよりあち位をつたふへしまつ〳〵大方の次第此分也はしめ初心より何もかも一度になをし候へはそれにかゝりてつゝみあからぬなり又をそくなをし候へはくせ身なりなをらす候見あはせの時分かんようなり

一　太皷をしゆる事是も大方つゝみと同前なり先はしめ二三番程おほゆるうちはよろつをなをさすしてうちれほえさせ心付候時分にはちの持やうかまへをなをしさて其後かけこゝをなをし其次にくせをなをす也はやくくせをなをし候へはそれにひかれてけいはあからぬ物也其後所〻に手をうたすへしはしめ地たしかにおほゆさるうちに手ををしへ候へは太皷のかゝりあしくなり候扨漸〻こうゆき候時分

に味ををしへあち大形ゆきたるれりふし位ををしゆへしかやうに段〻見合肝要なり

一　狂言をしゆる事まつはしめ初心なる時はいかにもおかしく人のわらひ候やうにをしへ候物也さて少〻狂言をもしれほゆ如形仕候時あまりをかしき事をそゝとのそき狂言にみを入面白き事をませへし其後はや年もゆき候はんよきしてと申時はいかにも物すくなふかしましくなき様にしんにしてはつれにをかしきことを入とつさいふ様にすること是上手のわさ也稽古の次第大方如此

一　よろつの稽古の事いかにも心のむきたる時ならふへし氣のむかさる時けいこする事ことの外の諸藝の毒なり

一　稽古の時役者の外人をはあまた稽古の座敷へよせ候はぬ物なり第一はれかましくて稽古ならぬものなりはやしの稽古よりものうの稽古とりわけみところなき物也かへす〳〵しろうとなとよすれはけ

いこにれもしろき事なけれはかたわきにてものかたりなとするもの
なりいかにもけいこひそかにするものなり第一雨のうち雪の中なと
とりわけけいこはしむ物なり地うたひ二三人調子ひきくうたはせつ
〻み手拍子口笛にてけいこすへし大勢ありてははやしにまきれなを
されす候大方おほえ候て本のはやしにて位をけいこすへし
一　狂言のあひの事中入の仕手のいてたちもかんかへ手まの入には
なかくかたる物なり手まのいり候はぬ太夫のこしらへのあひはみし
かくかたる物なりそのこゝろかけ肝要也
一　おさなき物に能をしゆる事あまりにこひたる能ををしへましき
事也又たもてかけすしていせいのなき能同前なりいかにも仕舞れほ
きにをしゆへしあまりこまかなるものまねはせさすましき也
一　稽古にあしき役者にてまひ候事その外の毒なり仕舞にかきらす
大つ〻み小つ〻み笛共にわろきあひ手ごはやし候へは藝もさかり其

上わろきくせ出來物也似合たるあひ手稽古のときそれ〳〵にある物
にて候それとはやすへしわれより手うへとあひてになり候事はこれ
第一のくすりなり返々我より手したとあひてになりはやす事おもし
ろくをかしくはつすへし第一の毒とは此事也
一　稽古に調子たかくうたはぬものなりうたひけいこならは平調尤
に候のうけいこならは双調しかるへく候
一　稽古のうちに能にてもうたひにてもはやしにてもあれその能す
きさるあひた湯茶をものますそはの人とも物をもいはすよるにて候
はゝらうそくのしんを取あふら火をかきたつる事もせぬ也其一番す
きてかさねて稽古いまたはしまらぬ間に用をもかなへて湯茶をもの
みよるならはともし火をもかきたてらうそくのしんをもとりこしら
へすましてさてけいこをはしむへしこれはけいこの時の法度なりよろ
つの事さしあへはこゝろうつりけいこにまきるゝによりみきの法度

をさためたり

一　次第に地をこる事すゑののうにはこるへからす

一　能の仕舞けいこの事小袖をつほれりまひならふへし又ある時は なかはかまにてまひならふへしさやうに候へは座敷舞と能とのたよりあるもの也さしき舞には仕舞をすくなくそゝと其文句にこゝろを付へし拍子をたくさんにふみ數をまはること有間敷候也

一　稽古の時裝束にてまふ事はしめより裝束にてまふはあしき也三番ほともおほへ候てより裝束にてけいこしやうそくあつかひをもならふへし又面をかけ候事右と同前二三番れほに候てより面をかけそのおほえたる能を舞候て面位おほにへしまたしらぬ能をはしめて稽古するにめんをかけたるはかやうの心得よく心得てけいこすれはひときは藝能あかることはやし

一　けいこにてこうは自然とゆきたるかよしけいこは初心にてこゝ

ろのたけてよきをきゝそこなひ藝をこひさせたかる事第一のあしき事也たとへは名人の子なとにてよき事をしりたるとも其身の藝初心ならはその藝のたけほとに相應してこひさせへし相應にはつれこひたるはすて所なきあしき事也

一　座敷能舞臺の能はやしも太夫もたほきにかはりありよく稽古すへし大方は舞臺にてするわさは大きにいらりと藝をすへし座敷にてはこまかに藝をすへし

一　稽古いたらすして物を心得人のよき藝者にあひてのあしきにてけいこを所望する事是大きなるふしつけなりあしき道具にて所望する事同前也

一　初心なる人のわれより上手なるけいをほうへんせぬものなり

一　稽古をきはめ何にても一藝仕る人の又あれこれ取合よのやくに出る事かたくいましめてすへからす我身の本藝迄あさくなり候

一　つゝみ太鼓笛共にてまへけいこは上手にてかゝりあしく候て人のきらひ候流あり左様の藝者には能をははやさすへからす其人の藝習ひ候事かへす〳〵無用なりよきをはなりかたくあしき事はなり候てより一世の間うせかぬる物也たとへはけいは少つきなり共よきかゝりを本として稽古すへし

一　おさなき人にはしめてをしへる能の事小塩經政籠太鼓楊貴妃誓願寺花月藤榮羽ころもあつもり西王母此類尤に候

一　諸藝いたらさる時手にまかせ仕度事いたす事との外のけいの毒也かりそめの一座一しやうにも藝を心かけ候人は仕間敷なりしつけ候へはまことの時いてたかる物也よき事はかならすなりかねあしき事ははやくなりよくにせよく候てうせかぬる物也返〳〵いむへしつゝしむへし是によつてけいこをはれとしはれをつねとたもひ候へとは古人の申つたへられ候も此儀なり何事か名人の申をかれ候事にあたなる儀は候はねともとりわきかやうの心持たもしろく候はれの時爰をせんとたしなみ候へはこゝろせはくなり手もすくみ藝ならぬ物にて候それに依てはれをつねと思ひ候へとは此儀なりはれなる所をつねと思ひ候へは思ひこなし藝にかさあり其時のしよさ出來る物なりこれ初心の人におもしろきをしへのこゝろもちなり

右稽古の條〳〵三十五ヶ條此巻にかきしるし候是をもつてよく心得わけ稽古すへし稽古なれはとて只つめかけてならふまてにては藝はあらすしてわろきこうゆく也よく其分を心得てけいこすれは第一なりやすくけいもはやくあかるものにて候

せ　あ　み

帝國圖書館
第7927
受入
36. 3. 14

明治三十一年四月十五日初版印刷
同　三十一年四月二十日初版發行
明治三十五年六月二十日訂正再版發行
明治四十二年八月十五日同三版發行

著作權所有

校訂者　大和田建樹　東京市牛込區東榎町三十番地
發行者　江島伊兵衛　東京市日本橋區通四丁目八番地
印刷者　笈田吉松　東京市京橋區新富町一丁目六番地
印刷所　笈田活版所　右同所（電話新橋二八〇九）